ファカルティリンケージ・プログラム
Faculty Linkage Program

社会的ニーズに直結した、多彩な「学びの場」

活動報告書

2018年度

中央大学全学連携教育機構

2018年度　FLP活動報告書の発刊に寄せて

2018年度ファカルティ・リンケージプログラム「Faculty-Linkage Program」（通称FLP）の活動報告書が、ここに完成しました。

FLP は、総合大学として確固たる実績と伝統ある中央大学だからこそ構築できる全学横断的な学修システムです。現在開講の5プログラム（環境・社会・ガバナンス、ジャーナリズム、国際協力、スポーツ・健康科学、地域・公共マネジメント）の担当教員は、中央大学に置かれるすべての学部並びにFLPの運営組織である全学連携教育機構から、それぞれの専門分野に応じてプログラム教育の担い手として構成されています。

学生諸君が所属する学部では学びきれない視点や活動をFLPは実践することを目指し、併せて、その結果をもって、さらに所属学部での勉学を向上させるという、FLP は、まさに教育活動の相乗効果をも期待した教育プログラムといえます。そのため、学生諸君が担当教員と最も近しい距離で学ぶ「ゼミナール方式」を中心に教育活動が展開されています。

FLPの3年間では、所属学部で修得した内容の向上、FLPでのゼミナール方式による教育の実践と担当教員からの直接指導、ゼミ生同士のふれあいと切磋琢磨といったことを通じて、研究テーマの深化のみならず、全人格的な涵養も修めることができると申し上げられます。

「FLP活動報告書」は、学生と担当教員のこうした教育実践の記録です。

ここに表現されている内容は、ごく一断面でしかありません。この内容以上の教育的成果と学生諸君の達成感がこの冊子には無限に詰まっています。

ご高覧いただく皆様におかれましては、表現し切れない担当教員や学生諸君の思いに幾ばくかの思いをはせていただければ幸甚に存じます。

改めまして、FLPに対し、なお一層のご理解とご支援を賜りたくお願いを申し上げます。

最後になりましたが、この活動報告書をまとめるに際し多大なご尽力いただきました関係各位への御礼をこの場をお借りして申し上げる次第でございます。

2019年3月吉日

中央大学全学連携教育機構
機構長　　石川　鉄郎

目次

Ⅰ．環境・社会・ガバナンスプログラム……1
１．設置の趣旨と教育の目的 ……1
２．2018 年度演習科目担当者および履修者数……2
３．プログラムスケジュール ……2
４．プログラムの活動 ……3
５．これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先……3
６．演習教育活動 ……5
（１）星野　智（法学部･教授） ……5
（２）田中　廣滋（経済学部・教授） ……6
（３）西川　可穂子（商学部・教授） ……8
（４）谷下　雅義（理工学部・教授） ……13
（５）西田　治文（理工学部・教授） ……16
（６）盛田　富容子（文学部・兼任講師） ……19
（７）ハリスン、ブライアン（総合政策学部・教授） ……22
（８）横山　彰（総合政策学部・教授） ……24

Ⅱ．ジャーナリズムプログラム ……26
１．設置の趣旨と教育の目的 ……26
２．2018 年度演習科目担当者および履修者数……27
３．プログラムスケジュール ……27
４．プログラムの活動 ……28
５．これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先……28
６．演習教育活動 ……29
（１）鈴木　俊幸（文学部・教授） ……29
（２）松田　美佐（文学部・教授） ……31
（３）市川　哲夫（総合政策学部・特任教授） ……33
（４）大橋　正和（総合政策学部・教授） ……37
（５）松野　良一（総合政策学部・教授） ……39
（６）村田　雅之（総合政策学部・教授） ……56
（７）臼井　敏男（全学連携教育機構・兼任講師） ……57
（８）清水　一彦（全学連携教育機構・兼任講師） ……64

Ⅲ．国際協力プログラム ……66
１．設置の趣旨と教育の目的 ……66
２．2018 年度演習科目担当者および履修者数……67
３．プログラムスケジュール ……67
４．プログラムの活動 ……68
５．これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先……68

６．演習教育活動 ……69
（１）小森谷　徳純（経済学部･准教授） ……69
（２）林　光洋（経済学部・教授） ……70
（３）清水　武則（商学部・特任教授） ……90
（４）武石　智香子（商学部・教授） ……93
（５）中迫　俊逸（商学部・教授） ……104
（６）平澤　敦（商学部・教授） ……105
（７）新原　道信（文学部・教授） ……110
（８）野宮　大志郎（文学部・教授） ……116
（９）伊藤　晋（全学連携教育機構・特任教授） ……118
（１０）稲葉　誠（全学連携教育機構・客員教授） ……125
（１１）佐々木　弘世（全学連携教育機構・客員教授） ……128

Ⅳ．スポーツ・健康科学プログラム ……138
１．設置の趣旨と教育の目的 ……138
２．2018 年度演習科目担当者および履修者数 ……139
３．プログラムスケジュール ……139
４．プログラムの活動 ……140
５．これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先 ……140
６．演習教育活動 ……141
（１）村井　剛（法学部・准教授） ……141
（２）中谷　康司（経済学部・助教） ……146
（３）小峯　力（理工学部・教授） ……148
（４）加納　樹里（文学部・教授） ……154
（５）布目　靖則（文学部・教授） ……158
（６）森　正明（文学部・教授） ……161
（７）小林　勉（総合政策学部・教授） ……162

Ⅴ．地域・公共マネジメントプログラム ……168
１．設置の趣旨と教育の目的 ……168
２．2018 年度演習科目担当者および履修者数 ……169
３．プログラムスケジュール ……169
４．プログラムの活動 ……170
５．これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先 ……170
６．演習教育活動 ……171
（１）工藤　裕子（法学部･教授） ……171
（２）山﨑　朗（経済学部・教授） ……174
（３）斯波　照雄（商学部・教授） ……178
（４）根本　忠宣（商学部・教授） ……179
（５）御船　洋（商学部・教授） ……187

（６）植野　妙実子（理工学部・教授）……190
（７）天田　城介（文学部・教授）……192
（８）新原　道信（文学部・教授）……200
（９）黒田　絵美子（総合政策学部・教授）……206
（１０）小林　勉（総合政策学部・教授）……209
（１１）関　有一（総合政策学部・教授）……216
（１２）堤　和通（総合政策学部・教授）……217
（１３）細野　助博（総合政策学部・教授）……218

Ⅰ．環境・社会・ガバナンスプログラム

１．設置の趣旨と教育の目的

「環境・社会・ガバナンス」プログラムは、「環境」を中心に、社会の諸問題について広く取り組むことができるプログラムです。現代社会では、人間がよりよい生活を営むための経済や社会の諸活動により、行き過ぎた資源の利用が行われ、自然の浄化能力を超える環境汚染が拡大しています。これらの環境汚染や資源問題は、社会経済システムのグローバル化により、一層深刻な事態になりつつあります。

世界的な問題となっている地球温暖化を例に挙げると、今までの地球温暖化は、先進国の工業化により発生した二酸化炭素の排出が原因とされています。しかし、今では中国やインド、東南アジア諸国でも経済発展と共に二酸化炭素の排出量が増大し温暖化を加速させています。今後は、経済発展が見込まれるアフリカの国々でも同様の事態が予測されています。このように、世界経済が発展すると先進国だけの問題であったものが世界規模へ拡大し、発展途上国を含むより複雑で、深刻な事態へと変容しています。また、地球温暖化による気候変動は人間ばかりではなく、地球上に生息する生物すべてに広範囲に影響を与えており、確実に生態系を壊しています。自然科学による調査データがその事実を裏付けています。人間の生活基盤は、自然が機能的に働いてこそ得られる資源、いわゆる「生態系サービス」とそれを支える生態系の維持のもとに成り立っていることを忘れてはいけません。我々の子孫が地球で存続できるかどうかは、我々の今後の行動にかかっています。地球環境を維持し、自然とその資源を持続可能な範囲で利用し、経済活動とのバランスをとっていく事が重要と考えられます。

地球温暖化の例を挙げましたが、我々が直面する環境問題はこのような世界的規模の環境問題ばかりではありません。身近な産業廃棄物や外来種などの多様な問題もまた地域における重要な環境問題です。環境汚染の防止と資源や生態系の維持への配慮が重要である点は、身近な問題であっても変わりません。こうした問題を解決するために、われわれの社会はどのような取り組みを必要としているのでしょうか。

現在の社会経済システムにおける主要なプレーヤーの一つは企業です。従って、その活動と環境との関わりは、企業の社会的責任（Corporate Social Responsibility）といった企業統治の問題として捉える必要があります。また、住民は環境の単なる受益者ではありません。地域の環境問題を住民参加の視点から考えることも必要でしょう。

本プログラムは、こうした現実に生じている環境問題に対して、正しく問題をとらえ、アプローチすることができる人材の育成を目指しています。環境問題は、人間活動の総体がもたらす問題ですので、自然科学・社会科学・人文科学にまたがる学際的なアプローチが必要です。本プログラムでは、様々な分野の専門家が多様な角度から問題に取り組んでいます。担当教員は、履修者の興味に即した研究ができるように工夫し、理論的な研究、フィールドワークなどを含めて多彩な指導を行っています。「環境・社会・ガバナンス」プログラムは広い視野を持って、持続可能な経済社会の実現に取り組もうという意欲をもった学生の参加を期待しております。

２．2018 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
1	星野　智	法学部	5	－	2	合併（A・C）
2	田中　廣滋	経済学部	2	－	－	単独（A）
3	西川　可穂子	商学部	6	－	3	単独（A・C）
4	谷下　雅義	理工学部	6	4	3	合併（A・B）/単独（C）
5	西田　治文	理工学部	4	1	－	合併（A・B）
6	盛田　富容子	文学部	1	5	3	合併（A・B）/単独（C）
7	ハリスン、ブライアン	総合政策学部	－	3	3	合併（B・C）
8	横山　彰	総合政策学部	1	3	－	合併（A・B）
合計			25	16	14	

３．プログラムスケジュール

4 月　　履修ガイダンス
第一回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
学内活動（スプリングスクール・学内）

5 月　　第二回部門授業担当者委員会

6 月　　2019 年度募集に伴う総合ガイダンス

7 月　　第三回部門授業担当者委員会

8 月　　学外活動（サマースクール・鳥取県岩美郡岩美町）

9 月　　2019 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
学内活動（サマースクール・学内）

11 月　　2019 年度募集に伴う選考試験

12 月　　第四回部門授業担当者委員会
学内活動（期末成果報告会）

2 月　　第五回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）

3 月　　FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

４．プログラムの活動

①スプリングスクール

実 施 日：　2018 年 4 月 28 日(土) 13:00～16:00
実施場所：　中央大学　多摩キャンパス
実施内容：　フィールドワーク
テ ー マ：　多摩キャンパスの自然を探検！キャンパスウォーク　2018

②サマースクール

(1)学外（公立鳥取環境大学との連携事業）

実 施 日：　2018 年 8 月 29 日(水)～8 月 31 日(金)
実施都市：　鳥取県岩美郡岩美町
実施場所：　浦富海岸・他
実施内容：　フィールドワーク
テ ー マ：　海洋生物資源の持続的な利用―鳥取県の水産関連施策の背景―

(2) 学内

実 施 日：　（1 日目）2018 年 9 月 19 日(水) 13:00～17:00
　　（2 日目）2018 年 9 月 20 日(木) 9:30～12:00
実施場所：　中央大学　後楽園キャンパス　3310 教室
実施内容：　（1 日目）インプットレクチャー、個人ワーク、グループワーク
　　（2 日目）プレゼン準備、グループ発表、ラップアップ
テ ー マ：　SDGs で大学を変えよう！
講　　師：　水野　雅弘 氏（株式会社トゥリー）
　　木村　麻紀 氏（株式会社トゥリー）

③期末成果報告会（公立鳥取環境大学との連携事業）

実 施 日：　2018 年 12 月 15 日(土) 13:00～
実施場所：　中央大学　多摩キャンパス　7103 教室
実施内容：　各ゼミによる年度活動報告、鳥取環境大学・中央大学とのサマースクールについての報告

５．これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先

東北電力、トヨタ自動車、三井住友銀行、三菱 UFJ 銀行、住友信託銀行、三菱 UFJ 信託銀行、日本放送協会（NHK）、河北新報社、博報堂プロダクツ、リクルート、INAX、小松製作所、シャープ、東芝、住商スチール、住友重機械エンバイロメント、日立ビルシステム、富士ゼロックス、富士通、住友林業、日本電設工業、千代田化工建設、日本工営、住友化学、三井化学、凸版印刷、資生堂、イトーヨーカ堂、クオール、JTB 法人東京、エイチ・アイ・エス、小田急箱根ホールディングス、ヤマト運輸、新日本有限責任監査法人、日本自動車連盟（JAF）、国家・地方公務員（農林水産省、公正取引委員会、会計検査院、北海道庁、東京都庁、埼玉県庁、岐阜県庁、日野市役所、習志野市役所など）、東京大学大学院工学系研究科

社会基盤学専攻、東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻、北海道大学大学院環境科学院生物圏科学専攻、上智大学大学院地球環境学研究科、筑波大学大学院生命環境科学研究科、慶應義塾大学法科大学院、中央大学法科大学院、中央大学大学院（経済学研究科、理工学研究科、公共政策研究科）など

６．演習教育活動

（１）星野　智（法学部･教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｃ

＜テーマ＞

地球環境政治とガバナンス

＜授業の概要＞

環境政治についての基本的な文献を購読することを通じて、各国および地球社会に生じている環境問題への取組を研究する。森林破壊、大気汚染、水質汚染、河川・海洋汚染、地球温暖化、オゾン層破壊、生物多様性喪失、有害廃棄物の越境移動などへの取り組みを考察し、そこでのガバナンスとレジームの構造を検討する。環境政治は、基本的には、環境破壊の歴史、グローバル、リージョナル、ナショナル、ローカルな領域での環境政策や環境運動、資源をめぐる紛争などを主な対象としている。授業では、これらの問題を取り上げたい。

＜活動内容＞

星野ゼミは、今年度、環境政治に関する基本的な文献を購読するとともに、環境問題に関するゼミ員の問題関心にもとづいたテーマごとにプレゼンテーションを行ってもらうという形で進めた。

まず基本文献としては、星野智『ハイドロポリティクス』を購読し、現代の水資源をめぐる紛争とガバナンスおよびレジームの問題について考察した。主な内容は、中央アジアの地政学と水資源問題、アラル海地域の水資源と環境、ナイル川流域の水資源をめぐるレジームとガバナンス、メコン川流域のガバナンスとレジーム、グローバル化と世界の水資源、水をめぐるグローバル・ガバナンスなどの問題を取り上げた。

続いて、7 名のゼミ員にそれぞれのテーマについてプレゼンテーションをしてもらった。水道の民営化の問題、再生可能エネルギーの問題、外来生物種の問題、宇宙ゴミの問題などが主なテーマであった。なかでも水道の民営化問題は、理工学部の学生が報告した関係で、文系の学生にとっては水道民営化の現状や技術的な問題についての言及があったことから、有意義であった。文理融合型の研究が可能になったのは利点であった。

また授業のなかで、水問題との関連で、ANA 総合研究所の依頼で、ANA が顧客に提供している黒部の名水と経口補水液のサンプル調査に協力した。ゼミ員には、①感想、②他社製品を含めて成分分析の比較、③他社製品を含めた用途などの意見、が求められた。

最後に、3 月 29 日～30 日に合宿研究会を実施した。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A

実 施 日：2019 年 3 月 29 日(金)～3 月 30 日(土)

実施都市：山梨県笛吹市

実施場所：石和温泉

実施内容：合宿研究会

（2）田中　廣滋（経済学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

環境と市場経済

＜授業の概要＞

グローバル化された経済社会のなかで地域および企業は持続可能性を実現しなければならない。この目標を達成するためには、公民のパートナーシップが効率的に実行されなければならない。本演習の目標は地域と企業が協働して持続可能な社会を実現するシステム設計を容易にする分析手法を習得することである。

グローバル市場において引き起こされた問題は単独の国家で対応することは、不可能な状況になっており、パリ協定などの国際的な国家間の協力の枠組みが必要になっている。地球規模の課題として環境問題の重要性は、温暖化問題だけでなく、資源や廃棄物など広い範囲のテーマにおいて認識されなければならない。本年度は、環境問題との関連においてグローバル市場のダイナミズムを特徴づける環境技術のイノベーションや企業の社会的責任の議論の基本的な考え方を学ぶ。

経済社会のグローバル化、地方分権などに対応して、地域あるいは企業がそのガバナンスを実施するためには、それぞれの主体は自らの課題を正確に評価して、その分析結果に基づく目標あるいは計画を明確に設定して、地域あるいは組織の能力を結集してその実現に取組むことが不可欠である。多数のステークホルダーと良好な関係を築いていかなければならない、多数のステークホルダーから構成される社会において、ガバナンスの主体である自治体や企業によって推進される成果はこの主体の活動に対応するステークホルダーの活動水準によって規定される。自治体や企業が持続可能なガバナンスが実現できるかどうかは、住民、従業員、取引先、産業界、中央政府などステークホルダーの反応あるいは評価によって決定される。いずれかのステークホルダーからその活動内容が拒絶される判定を下された自治体や企業の執行部はガバナンスの主役としての座を追われるか、あるいは、当該の地域あるいは企業自体の存立そのものが危機に直面するといっても過言ではない。このように、持続可能な社会のための管理経営は個々の主体のリスク管理にも役立つのである。授業の中では、日本と米国、中国などの経済と環境に関する最新のデータの収集と分析を行いながら、企業と地域の持続可能性を考察する。また、英国を中心として、EU の地球環境問題への取組を紹介する。

＜活動内容＞

本ゼミは、前期は企業のガバナンスの活動を実際に企業が発表するガバナンスの報告を評価する活動を行った。このようなアプローチでは企業の自己申告のポイントがある程度理解できるようになったが、企業が発表の項目を企業に有利なように書くことが可能である。学生は、報告の方法に問題であることから、第 3 者による評価の意味が重要であるあることを理解できた。後期には、サスティナブル・ジャパンの記事を読んで、環境社会に役立つ取り組みの実例を調査した。学年の学習のまとめとして、株式会社オルタナが主催する『SDGs

（持続可能な開発目標）を達成するためにどうイノベーションを起こすか―「未来に選ばれる会社」とは―』をテーマとする住友理工学生小論文アワードへの懸賞論文を作成して、応募することを目的として、3月にも作業を行なう予定である。

（3）西川　可穂子（商学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

水環境を中心とした環境問題とその対策　＜化学物質汚染とその影響評価＞

＜授業の概要＞

本演習では主に水環境に焦点をあて、履修学生がグループに分かれて実態調査（フィールドワーク）を実施する。演習の前半では、主に基礎的な知識を習得するため輪講を実施した。夏休みには、他大学とのフィールドワークにも参加した。演習後半では、フィールドワークに関する文献調査などを行い、調査データをまとめて 1 年間の報告と次年度の課題を抽出する。

＜活動内容＞

演習 A では、前期は水質に関する基本的な事項についてテキストで学習した。7 月には群馬工業高等専門学校と共同で群馬県粕川市の河川についてフィールド調査を実施した。同時に、環境中に拡散する「マイクロプラスチック」について、各自のテーマを決定し調査を実施した。その成果は、11 月の学園祭で発表した。12 月の期末報告会では、鳥取環境大学と実施したサマースクールでの成果を鳥取環境大の学生と共に発表を行った。また、薬剤耐性菌調査活動についても報告した。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A
実 施 日：2018 年 5 月 25 日(金)
講 演 者：宮里　直樹 氏（群馬工業高等専門学校環境都市工学科）
演　　題：河川における富栄養化の実態把握とその解析方法
実施施設：中央大学　多摩キャンパス　5702 教室
実施内容：群馬県粕川市のフィールド調査地点における窒素代謝と河川の水質について講義を受けた。
成　　果：7 月に群馬工業高等専門学校と共同で実施するフィールド調査に関しての事前学習となった。また、実際の調査方法も学んだ。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 7 月 1 日(日)
実施都市：群馬県前橋市
実施場所：粕川
実施内容：群馬県粕川市内に流れる河川について、3 か所フィールド調査を実施した。
成　　果：水生生物調査、水質調査、薬剤耐性菌の調査をそれぞれ分担して実施しデータを得た。

対象演習：A
実施内容：水質調査と薬剤耐性菌のフィールド調査（6 回）
成　　果：現地での水質調査と採水試料から薬剤耐性菌の調査を実施した。
［フィールド調査の詳細］
［第 1 回］
実 施 日：2018 年 11 月 24 日(土)
実施都市：神奈川県厚木市・相模原市
実施場所：中津川・相模川
［第 2 回］
実 施 日：2018 年 12 月 7 日(金)
実施都市：東京都八王子市・日野市
実施場所：浅川・多摩川
［第 3 回］
実 施 日：2019 年 2 月 26 日(火)
実施都市：茨城県東茨城郡
実施場所：涸沼川・霞ケ浦周辺
［第 4 回］
実 施 日：2019 年 2 月 27 日(水)
実施都市：千葉県東金市・他
実施場所：八鶴湖・印旛沼・手賀沼
［第 5 回］
実 施 日：2019 年 2 月 28 日(木)
実施都市：千葉県君津市
実施場所：亀山ダム周辺
［第 6 回］
実 施 日：2019 年 3 月 13 日(水)
実施都市：埼玉県川越市・神奈川県川崎市
実施場所：伊佐沼公園・浮島町公園

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

水環境を中心とした環境問題とその対策　＜化学物質汚染とその影響評価＞

＜授業の概要＞

本演習では主に水環境に焦点をあて、履修学生がグループに分かれて実態調査（フィールドワーク）を実施し、調査対象に関する理解を深めていく。大学や研究所における最先端技術に関しても理解を深めるため、テーマに関連のある研究については、学会やシンポジウムにも参加する。演習 C では、演習 A,B を通じて得た調査データや文献調査を踏まえて、調査データをまとめ、各自で学会発表やゼミ論文の執筆を行った。

＜活動内容＞

本演習では、都内表層水の薬剤耐性菌調査、都内病院における患者の薬剤耐性菌に関する対面式アンケート調査、都内医師会における薬剤耐性菌対策啓発活動の調査を行った。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：C
実 施 日：2018 年 7 月 1 日(日)
実施都市：群馬県前橋市
実施場所：粕川
実施内容：粕川市の河川について水質調査を実施した。
成　　果：水生生物、水質および薬剤耐性菌の分離を実施した。

対象演習：C
実 施 日：2018 年 8 月 19 日(日)～8 月 21 日(火)
実施都市：岐阜県岐阜市・他
実施場所：長良川・木曽川・他
実施内容：日本水環境学会ノンポイント汚染研究委員会主催ワークショップ in 岐阜・木曽川に参加した。
成　　果：一般公演として、3 題（1. 濃尾平野の河川と地形－流域からの土砂と河川環境－、2. 木曽川の景観変遷と魚類・貝類の今、3. 木曽川のワンド・タマリの水質環境 －地形がもたらす影響についてー）を聴講し、木曽川の治水方法や地形の形成と特色、歴史などを学んだ。また、他大学の学生と共に木曽川のフィールド調査を実施し、グループ討論などを行った。

対象演習：C
実 施 日：2018 年 11 月 22 日(木)
実施都市：東京都千代田区
実施場所：杏雲堂病院
実施内容：病院の通院患者に抗菌剤と薬剤耐性菌に関するアンケート調査を実施した。
成　　果：計 29 名（男性 10 名・女性 19 名；10 代 1 名、20-30 代 2 名、40-50 代 12 名、60 代 4 名、70 代以上 10 名）の患者に対面式アンケートを実施し、回答を得た。約 8 割の患者が「薬剤耐性」という言葉を知らず、抗菌剤の適正使用に関する知識が不足していることが明らかとなった。

対象演習：C
実 施 日：2018 年 12 月 17 日(月)
実施都市：東京都千代田区
実施場所：日本大学会館
実施内容：一般社団法人環境情報科学センター主催　第 32 回環境情報科学学術研究論文発表会に口頭発表 1 件、同時開催の第 15 回環境情報科学ポスターセッションに 2 件発表した。
成　　果：口頭発表およびポスター発表において、3 年間の研究成果を発表することができた。

＜その他＞

第二回薬剤耐性(AMR)対策普及啓発活動表彰で西川ゼミの活動「都内表層水の薬剤耐性菌の調査と薬剤耐性菌についての知識の普及活動」が表彰され、文部科学大臣賞を受賞した。

（4）谷下　雅義（理工学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ

＜テーマ＞

エコツーリズムを通じて農山漁村の未来を考える

＜授業の概要＞

持続可能な地域社会について考える際には、都市と農山漁村をセットで議論する必要がある。都市で十分生産できない資源である食やエネルギーを提供してきたのが農山漁村である。これまでこうした地域では過疎化が進み、地方財政の悪化とともに、「撤退」や「たたむ」という議論が行われている一方で、地域にある資源：森川里海の連環を強化して、新しい暮らし方がはじまっている場所も少なくない。農山漁村で十分でないのは、「仕事」であるが、その一つとして「観光、ツーリズム」があげられる。このゼミでは、「エコツーリズム」に着目し、また農山漁村のフロンティア地域として石川県能登半島や宮城県南三陸町を取り上げ、持続可能な地域社会について、現地の方から学び、一緒に考える。

＜活動内容＞

前期は、キャンパスと能登において、それぞれ学習を行った。キャンパスでは、2 年生は、エコツーリズムとは何かについて、文献を輪読して環境問題とあわせ理解を深めた。3 年生は、地域創生とは何か、だれがどう担えるのかについて、同様に文献を輪読して理解を深めた。能登においては、エコツーリズムを実践されている方また地区の公民館活動を展開されている方、林業家、民泊事業を行っている方などからお話を伺うとともに、地元の方々の前で自分たちが考えたエコツアーの提案を行った。キャンパスに戻ってからは振り返りの活動として報告書をまとめる作業を行った。

後期は、大きく 1）地域の自然資源を活用してエコツアーもしくは環境保全活動を行っている地域、2）観光客の集客に成功としている国内外の地域、3）無形の伝統・文化資産を活用して観光を行っている地域、にわかれ、文献購読、現地調査やインタビューを行った結果を報告するとともに、12 月にはエコツーリズム学生大会において、ポスター発表を行った。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A

実 施 日：2018 年 6 月 1 日(金)～6 月 3 日(日)

実施都市：石川県能登町

実施場所：岩井戸地区・柳田地区

実施内容：エコツアー体験、公民館・ブルーベリー作業・ノトノカのお手伝いなど

成　　果：エコツアーの理解と地域資源の再発見

対象演習：A・B

実 施 日：2018 年 9 月 13 日(木)～9 月 15 日(土)

実施都市：石川県能登半島

実施場所：株式会社ぶなの森・他
実施内容：当目夢を語る会、岩井戸公民館、ブルーベリーの活用など
成　　果：エコツアーの提案を地元のみなさんの前で行ってコメントをいただいた。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 12 月 7 日(金)～12 月 10 日(月)
実施都市：滋賀県大津市
実施場所：コラボしが 21
実施内容：ポスター発表
成　　果：多くの方から多様なコメントをいただいた。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

エコツーリズムを通じて農山漁村の未来を考える

＜授業の概要＞

これまでのエコツーリズムに係る知識と農山漁村の暮らしについての智慧等そして農山漁村の再生に資する関連分野の知識に基づき、最終的に論文という形式でまとめる。

＜活動内容＞

前期は、宮城県南三陸町についての事前学習を行い、ゼミの OBOG の方を対象としたエコツアーの検討を行い、夏に実施した。

後期は、学部の卒業論文を執筆していることを踏まえ、毎回、その内容の紹介をしてもらうとともに、それが環境・社会・ガバナンスとどのようにかかわるかを考えてもらう活動を行った。全員が学部の方で論文を提出するということで、FLP のゼミ論文としては提出しないということにした。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：C

実 施 日：2018 年 8 月 24 日(金)～8 月 28 日(火)

実施都市：宮城県南三陸町

実施場所：さんさん商店街・他

実施内容：農作業や田束山整備のお手伝い、語り部バスによる震災の継承などについて OBOG とともに学習を行った。

成　　果：天候が悪かったため、当初予定していた、2013-14 年に行った、ホテル観洋の裏の海の見えるやすらぎの森の整備活動を行うことができなかった。

（５）西田　治文（理工学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ

＜テーマ＞

生物多様性と地球環境

＜授業の概要＞

受講者の設定した課題について個別指導を行うこともあれば、課題の設定がまだ充分にできない者に対しては例えば、様々な生物の観察を通して生物多様性を実感してもらうこともある。学外活動以外は、理工学部の研究室で演習を行うことが多い。

＜活動内容＞

本年度は、これまで継続してきた多摩キャンパスの植物リストとガイド冊子の製作を一時休止し、実態調査、見学調査、外部講演会への参加など、7 回の学外活動を行い、その内容についての議論を後日後楽園キャンパスにおいて行った。後楽園キャンパスではその他に、白亜紀の植物化石顕微鏡標本作製と観察を通して過去の生物多様性について知るという、実験形式の実習も行った。また、4 月 28 日(土)には FLP 環境・社会・ガバナンスプログラム主催のスプリングスクール「多摩キャンパスの自然を探検！キャンパスウォーク 2018」にも参加した。いずれも A・B 合同授業である。参加学生は、A 生 4 名、B 生 1 名であった。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

1. 浅間山見学調査

実 施 日：2018 年 7 月 1 日(日)

実施都市：群馬県軽井沢町

実施場所：浅間山

実施内容：浅間山鬼押出周辺で、火山噴火と溶岩流によって破壊された植生が復活する様子を観察し、植生遷移とともに植物種と生態系の変化を実地で学ぶ。また、浅間山火山博物館を見学し、地質的変動が常時起こりうる日本の自然の特徴を理解する。

成　　果：自然史という広い観点から実際の自然と生態系を体験することで、日本の自然環境の特徴を知り自然現象の規模をあらためて認識し、技術の限界を知ることができた。

2. 只見町実態調査

実 施 日：2018 年 8 月 25 日(土)～8 月 27 日(月)

実施都市：福島県只見町

実施場所：只見町内

実施内容：只見町にみられる多雪地域独特の地勢と、ブナをはじめとする自然植生と生物相を現地観察する。また町内から産出する温暖期の植物化石を採集･観察し、現在進行してる生物相の変化は地質時代の時間感覚で捉える生物相変化との本質的な違いを学習する。また、只見町ブナセンターを訪問し地元民が伝統的に行ってきた持続的自然利用の歴史も学ぶ。

成　　果：中新世後期の植物化石採集、ブナ林の徒歩観察、ブナセンターでの展示見学を通して、只見の高い生物多様性が成立してきた長い歴史を知り、その多様性を維持しつつ伝統的に利用してきた地域文化の価値を認識した。

3. 講演会、学外活動、他

・生物多様性 JAPAN 活動見学

実 施 日：2018 年 4 月 21 日(土)

場　　所：中央大学理工学部

テ ー マ：NGO 生物多様性 JAPAN の活動を体験

・東大小石川植物園見学

実 施 日：2018 年 5 月 19 日(土)

場　　所：東京大学理学部附属植物園

テ ー マ：東京の原植生と植物園における種の保全

・生物多様性基本法制定 10 周年記念シンポジウム

実 施 日：2018 年 6 月 2 日(土)

場　　所：早稲田大学

テ ー マ：生物多様性基本法制定の趣旨と問題点

・生き物文化誌学会第 16 回学術大会シンポジウム「絶滅危惧種を喰らふ」

実 施 日：2018 年 6 月 23 日(土)
場　　所：立正大学品川キャンパス
テ ー マ：絶滅危惧種の食料利用と保全

・新宿御苑見学
実 施 日：2018 年 7 月 7 日(土)
場　　所：新宿御苑
テ ー マ：都市公園と生物多様性

・生き物文化誌学会例会　イノシシシンポジウム
実 施 日：2018 年 11 月 17 日(土)
場　　所：東京農業大学
テ ー マ：イノシシの食肉利用の実態と生態系への影響

キャンパスウォーク

東大小石川植物園

（6）盛田　富容子（文学部・兼任講師）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ

＜テーマ＞

都市環境マネジメント

＜授業の概要＞

環境マネジメントの観点から都市環境をめぐる様々な問題を整理し、持続可能な都市構造のあり方について考察する。持続可能な都市の基本的概念やその計画手法等について、基本的な文献を講読し、内容に関するディスカッションによって理解を深める。また、国内外の事例研究を通じて、持続可能な都市づくりについて基本的かつ総合的な議論を進めていく。

＜活動内容＞

都市とは、人口が集中し、その活動を支える機能や施設が集積した場所のことである。今や、この都市に世界人口の 55%が暮らしており、国連の予測では、世界の都市化率は 2050 年までには 68%に拡大するという。この巨大な人口集積の欲望を満たし、多種多様な活動を支える場としての都市を造りだすために、私たち人間は、環境に対して技術を適用し、環境を人工化してきた。急速な都市化の進展は、都市の物理的空間を大きく変容させることとなり、それが環境に影響を及ぼし、ひいては都市に暮らす人々の活動や生活の質を左右する要因にもなる。したがって、環境問題について考えるにあたって、都市は無視することのできない存在である。このような認識から、本ゼミでは、持続可能な都市（Sustainable Cities）のあり方について研究を進めている。

都市を構成する要素は多様であるが、本年度は特に、近年、少子高齢化・人口減少の進展を背景に日本で深刻化している空き家問題からみた都市の持続可能性と都市づくりについて研究に取り組んだ。空き家問題といっても、その状況や課題は地域によって一様ではない。そこで、世界最大のメガシティである東京圏（東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県の 1 都 3 県）に焦点を当て、東京圏における空き家問題について考察した。

まず、前期は、東京圏における空き家の現状と課題を把握するために、「住宅・土地統計調査」や「国勢調査」などの統計から東京圏のデータを収集し、分析を行った。データの分析には、エクセル統計やフリーの GIS ソフト「MANDARA」を用いた。分析の結果、東京圏においても空き家問題は深刻化してきており、都心部と周縁部で二極化する傾向が確認された。特に、都心から 50～60 ㎞圏以遠の地域で空き家問題が深刻化する地域が増えていることも確認された。この分析結果に基づき、後期は、東京圏においても特に空き家問題が深刻化する地域の取り組みについて事例研究を行った。ゼミ生が研究対象として選んだ地域は、「空き家バンク」の設立など空き家問題に対する取り組みが比較的早い段階から行われていた埼玉県秩父市である。研究を進めていく過程で、ちちぶ空き家バンクや市の取り組みの詳しい現状を知りたいというゼミ生からの要望があり、ゼミ生自ら秩父市にアポイントを取り、市とちちぶ空き家バンクに対する聞き取り調査とフィールドワークを行った。これらの実態調査から、空き家バンクは一定の成果をあげているものの、市の取り組みとして従前の取り組みから大きく進展しているものは示されなかった。市では、空き家の実態調査を行い、これに基

づき、現在、データベースを作成しているという話であったが、このデータベースを今後、空き家問題の対策に具体的にどのように活かしていくかが課題として挙げられていた。

取り組みに大きな進展の見られない秩父市の現状からも空き家問題の難しさがうかがえるが、都市部においても今後ますます空き家問題が深刻化すると予測される中で、持続可能な都市を実現するためには、空き家問題は避けて通れない問題である。持続可能な都市の実現に向けて、いかにして空き家問題を解決し、どのような都市づくりを行うべきなのか、この点については次年度のゼミの研究課題としたい。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 11 月 1 日(木)～11 月 2 日(金)

実施都市：埼玉県秩父市

実施場所：秩父市役所・他

実施内容：秩父市および「ちちぶ空き家バンク」への空き家の現状と取り組みに関する聞き取り調査とフィールドワーク

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

都市の環境課題に関する卒業論文の作成

＜授業の概要＞

都市環境問題について、各自の研究テーマに基づき、卒業論文の執筆に向けて段階的に指導を行う。また、執筆した卒業論文について発表を行う。

＜活動内容＞

本ゼミでは、環境マネジメントの観点から都市環境をめぐる様々な問題を概観し、持続可能な都市構造のあり方について考察してきた。その総括として、この演習Ｃでは卒業論文を作成した。本年度の演習Ｃのゼミ生は一名であり、卒業論文のテーマとして選んだ内容は、近年、日本でも注目される「コンパクトシティ（compact city)」についてである。本論文では、持続可能な都市の構造の観点からコンパクトシティという都市のあり方について考察している。本論文の構成は以下のとおりである。まず、第 1 章では、「持続可能性（sustainability)」という概念について、その発生経緯と定義について概観し、それに基づき持続可能な都市とはどのような都市なのかについて筆者の考えを述べたうえで、持続可能な都市の構造としてのコンパクトシティの可能性について考察している。これを踏まえて、第2章では、コンパクトシティ政策の事例として、成功事例として採り上げられることの多い富山県富山市の取り組みについて考察している。コンパクトシティは、あくまでも持続可能な都市の一形態にすぎず、一般に成功事例とされる富山市においてもその効果は限定的であることを指摘しながらも、筆者は富山市のコンパクトシティ政策に一定の評価を与えている。この富山市の取り組みを参考に、第3章では、まとめとして、筆者が理想とする都市の循環図を示し、持続可能な都市の条件について述べている。分量としては短い論文ではあるが、持続可能な都市のあり方に対する筆者の考えが十分に反映された内容となっている。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 11 月 1 日(木)～11 月 2 日(金)

実施都市：埼玉県秩父市

実施場所：秩父市役所・他

実施内容：秩父市および「ちちぶ空き家バンク」への空き家の現状と取り組みに関する聞き取り調査とフィールドワーク

（7）ハリスン、ブライアン（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

Environmental studies: pollution control and environmental management

＜授業の概要＞

We will cover various aspects of environmental management and pollution and consider the countermeasures used; we will also look at sustainable approaches to energy supplies and general management of the environment (e.g. desertification).

＜活動内容＞

During the year we studied a range of environmental topics, including the following:

- Antarctic ecotourism, with particular emphasis on the biosecurity measures introduced to prevent the spread of invasive species. We also discussed the drastic reduction in the population of krill, which underlie the whole food web of the region.
- Waste recycling and Sweden’s revolutionary approach.
- Anti-air pollution measures, including plans to ban traffic from large urban centres.
- Mining worries, especially with the relatively unknown but serious problem of sand mining, plus the ethics of deep-sea mining.
- Green buildings and so-called “forest cities” such as Italy has and China is planning.
- The worrying rise in methane emissions.
- Meat-related CO_2 emissions, and the proposals to tax meat, a major cause of global warming.
- The impact of the agreement to limit the production and use of hydrofluorocarbons (HCFCs).
- A discussion of how far we should try to eliminate invasive species.
- The devastating impact of building roads in areas of pristine nature.
- Illegal logging, and how healthcare initiatives have reduced the problem in some areas of Indonesia.
- The danger of predicted future humid heatwaves.
- The legacy of Zambia’s toxic lead mines and possible countermeasures.
- The air quality on cruise ships.
- Insect numbers - and how the dramatic plunge has led to warnings of an “ecological Armageddon”.
- The ethics of driving native tribes out of areas in order to build luxury

facilities for rich tourists.

· Etc.

All students also participated in small group projects (with presentations) on topics such as food mileage.

In addition to the above group projects and discussions, all students pursued individual research. In the case of the two 4th year students, this led to a 5,000 word graduation thesis, respectively on the topics of waste disposal and the problem and countermeasures for so-called e-waste. The 3rd year students wrote shorter reports, respectively on the topics of the problems associated with the construction of dams etc. and the dangers of particulate air pollution. In all cases, students gave detailed presentations about their research.

There were no field trips, however.

（８）横山　彰（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ

＜テーマ＞

環境政策論

＜授業の概要＞

この演習では、環境政策について、法律・政治・経済・社会などの多角的視点から実証的に評価・検証し、政策改善案を考え論証する研究を行います。そして、その研究成果を共同論文にまとめて、12 月中旬に実施する環境経済交歓セミナー（中央大学横山ゼミ・同志社大学岸ゼミ・一橋大学山下ゼミ）の場で発表討論し、他大学との研究交流を行います。共同論文の研究は、以下の視点から検討を行います。

1. その事例は、いかなる社会のどのような環境問題なのか
⇒⇒ その社会の文化や歴史は？
2. その環境問題を引き起こす諸要因は何か
⇒⇒ 何が原因か？どのように要因を探すのか？
3. その環境問題を放置するとどうなるのか
⇒⇒ 政策の有無で社会状態はどう違うのか？
4. その環境問題をどのようなデータで把握するのか
⇒⇒ データは入手可能か？
5. その環境問題と諸要因を関連づけるモデルは何か
⇒⇒ 関係する主体の行動は？
6. 社会状態を比較するときの価値判断基準は何か
⇒⇒ 何を目指しているのか？
7. その環境問題を解決するための最善の政策手段は何か
⇒⇒ 政策手段の選択基準は？
8. その環境問題を解決するために社会が犠牲にしなければならないものは何か
⇒⇒ コストは？
9. その環境問題と最も密接に関連する社会問題は何か
⇒⇒ 政策の外部性は？
10. 誰がその環境問題を解決すべきなのか
⇒⇒ 政策実施主体は？
11. 自分たちは、その環境問題の解決について何ができるのか
⇒⇒ 当事者能力はあるのか？

＜活動内容＞

演習 A では、前期は環境経済学や環境政策の理論や計量分析について理解を深め、後期は自分たちの設定した研究テーマについてグループ研究を実施し共同論文を作成します。演習 B では、前期は共同論文のテーマ及び研究計画に基づく先行研究整理やデータ収集・アンケ

ート調査・統計解析の研究を行い、後期は共同論文の中間報告と作成を行います。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：B

実 施 日：2018 年 12 月 7 日(金)～12 月 8 日(土)

実施都市：京都府京都市

実施場所：同志社大学　今出川キャンパス

実施内容：環境経済交歓セミナーでの研究報告・討論

成　　果：11 月下旬までに完成させた共同論文「現代社会を考慮した環境ラベルの在り方の検討～有効性認知の観点から～」について研究報告を行い、他大学の学生たちや教員との質疑応答を行い、研究交流を深めた。

Ⅱ．ジャーナリズムプログラム

１．設置の趣旨と教育の目的

本プログラムは、長谷川如是閑や杉村楚人冠といった日本の歴史に残る著名なジャーナリストを輩出した中央大学の伝統を継承し、ジャーナリズム全体のさらなる発展をこの中央大学から巻き起こすことを目的としている。

所属する学部で学ぶ専門知識と本プログラムのフィールドワークを融合させることにより、広い視野を持ち物事の本質を深く考察・分析・報告できる人材を育てる。さらには、企画力、文章力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力などの社会人基礎力を向上させ、ジャーナリズムの世界で活躍できる人材を育成する。

また、学生諸君が個々の目的と将来に向けてのキャリアデザインを描けるように、担当教員はマスメディア界を含めた広い社会の要請に十分応えられる指導と教育を行う。

長谷川如是閑

杉村楚人冠

山根真治郎

中央大学は、1909 年に新聞学科を設置。日本では、最も早くジャーナリスト養成に取り組んだ大学のうちの 1 つである。これまで、東大、早慶とともに、マスコミ業界に多数の人材を輩出してきた。また、戦前に、「新聞学院」という民間のジャーナリズムスクールがあったが、それを設立した山根真治郎も、中央大学出身であった。この「新聞学院」はのちに、日本新聞協会付属の機関となり、終戦まで続いた。

戦後も駿河台にキャンパスがあった時代には、朝毎読の新聞社の各部長、デスクに必ず 1 人は中大出身者がいたという時代もあるほど、ジャーナリストを輩出していた。しかし、1978 年の多摩全面移転以降、マスコミ志望者の減少、大学としての公的教育プログラムの消滅によって、ジャーナリストの道へ進む学生の数が激減した。権力を監視し弱者の声を代弁し社会に対し大きな影響力をもつジャーナリストを中央大学が育成することは、大学のみならず民主的な社会を構築する上で極めて重要である。

このため、2003 年に「FLP ジャーナリズムプログラム」を設置。戦前戦後に渡って、優秀なジャーナリストを輩出してきた中央大学の名誉と勢いを回復せんとするものである。実際、2003 年以降、この FLP の演習を受講した後、朝日・毎日・読売などの新聞業界、NHK や民放などの放送業界、電通などの広告業界、講談社などの出版業界などのマスコミへ就職した学生の数は、100 人以上に及んでおり、本プログラムは確実に実績を出している。

２．2018 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
1	鈴木　俊幸	文学部	2	1	1	合併（A・B・C）
2	松田　美佐	文学部	6	6	8	合併（A・B・C）
3	市川　哲夫	総合政策学部	11	11	10	単独（A）/合併（B・C）
4	大橋　正和	総合政策学部	－	－	1	単独（C）
5	松野　良一	総合政策学部	10	9	9	単独（A・B・C）
6	村田　雅之	総合政策学部	－	7	－	単独（B）
7	臼井　敏男	全学連携教育機構	4	4	5	単独（A）/合併（B・C）
8	清水　一彦	全学連携教育機構	7	7	7	合併（A・B・C）
合計			40	45	41	

３．プログラムスケジュール

4 月　　履修ガイダンス
　　第一回部門授業担当者委員会

6 月　　2019 年度募集に伴う総合ガイダンス

7 月　　第二回部門授業担当者委員会

9 月　　2019 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
　　第三回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）

11 月　　2019 年度募集に伴う選考試験

12 月　　第四回部門授業担当者委員会
　　学内活動（期末成果報告会）

3 月　　FLP 修了発表
　　FLP 修了証書授与

４．プログラムの活動

期末成果報告会

実 施 日：　2018 年 12 月 15 日(土) 13:00～

実施場所：　中央大学　多摩キャンパス　11430 教室

実施内容：　各ゼミによる年度活動報告

５．これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先

日本放送協会（NHK)、テレビ朝日、TBS テレビ、中部日本放送、東海テレビ放送、朝日新聞社、読売新聞社、毎日新聞社、中日新聞社、中国新聞社、岐阜新聞社、新潟日報社、共同通信社、NTT 東日本、NTT データ、電通、小学館、日本出版販売、ベネッセコーポレーション、文藝春秋、光文社、白泉社、ダイヤモンド社、有斐閣、WOWOW、東北新社、京王エージェンシー、読売広告社、IMAGICA、PRAP JAPAN、デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム、学情、リクルート、みずほフィナンシャルグループ、横浜ゴム、日本銀行、三井住友銀行、三菱 UFJ 銀行、千葉銀行、京葉銀行、八十二銀行、川崎信用金庫、日本政策金融公庫、東京海上日動火災保険、損害保険ジャパン日本興亜、野村総合研究所、野村証券、富士通、リコー、凸版印刷、野村不動産パートナーズ、ヤフー、ニフティ、GeeeN、全日本空輸、ANA エアポートサービス、日本旅客鉄道、JTB 首都圏、オリエンタルランド、地方公務員（県庁・市役所など)、慶應義塾大学、早稲田大学大学院政治学研究科 ジャーナリズムコース、中央大学大学院（文学研究科、総合政策研究科）など

６．演習教育活動

（1）鈴木　俊幸（文学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

明治前期のメディア史研究

＜授業の概要＞

本年度は、昨年度までの成果を踏まえ、新たな調査・研究を二件並行して展開する。第一に、新聞・雑誌の流通網の発達する過程を捉え、稗史小説類の出版・流通との相関を明らかにすること、第二に、広告メディアの多様性とその時代的変遷、地域発信の広告戦略の様相を捉えるための事例研究として、地方新聞・地方書店の広告を網羅的に調査・収集し、その史的展開をたどってみるということを、対象とする地域を限定しながら具体的な資料に基づいて行った。

＜活動内容＞

前年度に山梨県立図書館にて調査した『甲陽日報』のデータと、かつて調査した『山梨日日新聞』のデータとを合わせて、山梨県域に地域をしぼって、明治 10 年代後半から明治 20 年代初頭までにおける書籍流通の変化、新聞というメディアの定着状況について考察した。これについては、両新聞の広告記事の分析だけではなく、中央大学図書館所蔵の『時事新報』・『朝野新聞』等東京紙複製本の調査も行い、甲陽日報社・又新社の広告を中心に、東京以外の新聞社の広告記事を収集し、考察の材料とした。これら資料のデータ入力等は授業時間外の作業となったが、その作業に基づく報告と討議を主軸に授業を進め、それに基づいて共同の論文に仕上げ、2019 年 3 月発行予定の『中央大学国文』第 62 号に投稿、念校まで済ませた。タイトルは「『山梨日日新聞』『甲陽日報』所掲書籍安売広告をめぐって」、ゼミ員連名のものとした。

また、新たな研究資料を得るために、静岡市で調査合宿を行い、県立図書館所蔵の『静岡大務新聞』を調査、有用な記事の収集を行った。これについては、後期の授業で、各記事を詳細に検討し、書籍安売り広告と新聞販売所についてのデータを作成した。データは manaba にアップし、ゼミ員が活用できるようにした。そのデータに基づき、同紙における特色を洗い出していった。また来年度末を目途に同紙を材料とした共同論文を作成するための準備、すなわち、構成と分担等についての討議を進めた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 9 月 13 日(木)～9 月 14 日(金)

実施都市：静岡県静岡市

実施場所：静岡県立中央図書館

実施内容：同図書館において、『静岡大務新聞』明治 18 年から 21 年までを調査し、書籍・書店の広告、また新聞売捌店の広告等、当該地域における書籍および新聞・雑

誌の流通を把握するために必要な資料を収集した。

成　　果：同新聞は比較的散逸が少なく、この地域における 4 年間の新聞流通の変化や書籍流通の動向を十分に把握しうる資料の収集を行えた。

（2）松田　美佐（文学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

学問としてのジャーナリズム、および、取材・表現活動の実践

＜授業の概要＞

ネット社会の進展にともない新聞やテレビなど伝統的メディアの報道に批判の目が向けられるなか、ジャーナリズム機能をどう維持、発展させるかが問われている。本演習では、ジャーナリズムの原理・理念について文献で学んだ後、ゼミでの議論を通じてジャーナリズム活動の現状と可能性を考えたい。また、それと並行する形で、受講生自らが取材し、記事にまとめる活動をおこなう。具体的には、夏期ゼミ合宿を取材・調査にあてることとし、前期には取材地の選定から始め、グループに分かれて取材の準備をおこなう。後期にはゼミでの発表などを通じて、記事にまとめることとする（2017 年度は島根県松江市・出雲市、2016 年度は高知市、2015　年度は広島市、2014 年度は石巻市をベースにおこなった)。 このような取材・表現活動の実践やゼミでのディベートにより、現代社会で広く必要とされている「主体的に情報収集し、議論を通じて理解し、自分なりの見解をまとめ、わかりやすく表現する力」を磨くことを目的とする。

＜活動内容＞

本年の活動は四点に大きく分けることができる。

まず、文献講読によるジャーナリズムの理解とそれに基づき議論をおこなう訓練である。文献講読で取り上げた本は、林香里，2017，『メディア不信』岩波新書である。この文献を講読しながら、ジャーナリズムの基礎について理解を深め、さらに、関連するさまざまなテーマについて、受講生の専門領域と関係づけながら議論をおこなった。次に、例年議論の練習のためにディベートをおこなうこととしているが､本年も受講生からテーマの希望を募り、「キャッシュレス化推進の是非」「重大犯罪における未成年容疑者実名報道の是非」「サマータイム導入の是非」「建物内全面禁煙の是非」「女子大のトランスウーマン受け入れの是非」「高等教育無償化の是非」などのテーマで、ディベートをおこなった。さらに、三点目として、本年は夏に鹿児島県で調査・取材合宿をおこなうこととし、グループに分かれ事前取材・調査をした上で、9 月 10-13 日に実態調査に出かけた。取材地の決定から、具体的な取材計画立案、取材の申し込みなど、取材合宿の全ての過程は学生たち自身が企画・実行する。成果はすべてのグループが後期に行われた新 2 年生の見学が可能なゼミにおいて発表し、全員が 1,000～2,000 字程度の記事にまとめた。そのうち 2 名の記事は『Hakumon CHUO』冬号に掲載され、3 名が春号に掲載予定である。四点目として「社会問題を考える」を大きなテーマとするグループ研究を行った。この研究は、注目されている「社会問題」について特定のテーマを決め、5 つのグループにわかれ、1.現状　2.問題点　3.改善策をまとめ、プレゼンテーションし、グループ研究論文にまとめるものである

以上の活動を通じて、学年末に受講生全員が合宿取材記事を修正して完成させ、「社会問題を考える」グループ研究のプレゼンテーション資料と研究論文をゼミ論集としてまとめた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 9 月 10 日(月)～9 月 13 日(木)

実施都市：鹿児島県鹿児島市

実施場所：鹿児島県庁・他

実施内容：取材合宿

成　　果：全員が取材成果を 1,000～2,000 字程度の記事にまとめ、そのうち 5 名の記事が『Hakumon CHUO』冬号と春号（予定）に掲載された。

（3）市川　哲夫（総合政策学部・特任教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

放送文化論

＜授業の概要＞

前期：全 15 回にわたり、各回のテーマごとに関連映像のアーカイブを参照しながらテレビというメディアの使命と可能性を探求した。

後期：『二十歳の自画像』というタイトルのオムニバス・ドキュメンタリーに取り組む。これは本ゼミにおいて 2014 年以降、毎年制作（DVD）している企画で本年は 5 枚目の DVD となる。

併せて、戦後「若者論」の変遷を『調査情報』506 号特集（当世「若者論の虚実」）をテキストに使用して学んだ。これは、ドキュメンタリー制作の「核心」を掴む為の考究である（各テーマごとに、輪番でゼミ生が発表しそれを基に活発なディスカッションが行われ、その後に毎回市川が総括を行う形式だった）。

＜活動内容＞

市川ゼミでは上記授業の一方、テレビ局スタジオ見学、ゲスト講座（二回）、そして『二十歳の自画像』の学内外での撮影を行った。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B

実 施 日：2018 年 5 月 26 日(土)

講 演 者：山崎　恆成 氏（株式会社 TBS テレビ制作局次長・開発部長）

演　　題：テレビ局で働くということ

実施施設：中央大学　多摩キャンパス　11400 教室

実施内容：時期的な事もあり、テレビ局での仕事を最近入社の若手社員を例に挙げゼミ生たちに「テレビ局」での「働き甲斐」について丁寧に話した。

講演終了後、ゼミ生の有志と市川、山崎氏と懇親の食事会も行った。

成　　果：これまで、漠然と抱いていたイメージが現場の最前線の人から直接話を聞いて以後のゼミナールへの取り組みにも、前向きな変化が現れた。

対象演習：A

実 施 日：2018 年 6 月 23 日(土)

実施都市：東京都港区赤坂

実施場所：TBS 放送センター（『王様のブランチ』生放送スタジオ）

実施内容：毎年恒例の企画だが、放送後半部のスタジオ見学。

初めて生放送のスタジオ見学のゼミ生が多く、2 時間弱興味津々の見学となり、終わって元番組プロデューサー中野匡人局次長から「テレビの仕事」と題しレ

クチャーを受け、ゼミ生全員が一問ずつ質問を行った。

成　　果：生放送の現場を目の当たりにして、新鮮な仕事を受ける。
また中野局次長の話しを聴いて、ここでもゼミ生の進路設定に大きな示唆が与えられた。毎回、TBS 訪問のあとにこのスタジオ見学と中野氏とのやりとりの感想レポートを提出させているが、ゼミ生からの異口同音に「百聞は一見に如かず」の思いが綴られている。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 10 月 27 日(土)
講 演 者：山崎　恆成 氏（株式会社 TBS テレビ制作局次長・開発部長）
中谷　弥生 氏（株式会社 TBS テレビ営業局営業推進部長）
演　　題：テレビ局で働くということ
実施施設：中央大学　多摩キャンパス　11430 教室
実施内容：5 月に実施した同一テーマの講演であったが、「就活」シーズン直前でもありより「実践的」な内容となった。
具体的には、「エントリーシート」の書き方や「面接」での心得など聴衆（市川ゼミ生以外にも公開）にも有効な会合になった。近年、女子学生のマス・コミ志望が増加しており、昨年、今年と男性講師、女性講師を一緒に招いている。
中谷氏は報道局時代、総理の番記者経験を持ち、その後、結婚・出産を経て現在、女性初の営業推進部長を努めている。マス・コミ志望の女子学生にとっては目指すべき「ロールモデル」と受け止められた。
講演後は、市川ゼミ生と市川、山崎氏、中谷氏と懇親の食事会。ここでも熱い「就活」談義が交わされた。

成　　果：昨年から、男性、女性の講師を招いているが、非常に貴重な機会となった。
1986 年の「雇用機会均等法」施行から 33 年経過したが、一般企業のなかでの女性の管理職、役員の比率はまだそれほど高まったとは言えない。その中で TBS の管理職として活躍する中谷氏の話にはとりわけ有意義なものがあった。

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

放送文化論

＜授業の概要＞

2015 年 7 月、市川が編・著者として上梓した『70 年代と 80 年代～テレビが輝いた時代』（毎日新聞出版刊）を、テキストに今年度は 1970 年代のディケード（十年間）の、「万国博覧会」から「JAPAN as No1」にいたるテーマごとに検証した。

テレビ関連のテーマに拘わらず、戦後日本の転換期だった 70、80 年代を検証することにより、ポスト「平成」の新時代を構想する糧とすることが本講座の目的である。

ゼミ生は、毎週一人が担当テーマの発表を行い、そのあとにゼミ生相互のディスカッション、そのあとに市川が改めて解題する。随時テーマ関連の映像も参照する。

＜活動内容＞

演習 B・C では、前後期通じて 27 本（残り 3 本は、市川の総合解説）のテーマに取り組んだ。以下、列挙する。（括弧内は、執筆者名）

・1970 万国博覧会と「テレビマンユニオン」（今野勉）
・「モーレツ」から「ビューティフル」へ（藤岡和賀夫）
・テレビバラエティの嚆矢『ゲバゲバ 90 分』とは（鈴木健司）
・思考停止元年～大宅壮一と三島由紀夫の死（猪瀬直樹）
・「私たち」から「私」の歌へ～第 3 回フォークジャンボリー（富澤一誠）
・ドラマ『時間ですよ』～テレビドラマが一番元気だった頃（久世光彦）
・「テレビの一番長い日」～あさま山荘事件のテレビ中継（竹馬伸朗）
・田中角栄内閣誕生のころ～高層ビル、高速道路、新幹線（坪内祐三）
・情報化時代の幕開け『ぴあ』の誕生（矢内廣）
・アイドル・ポップスの誕生（酒井政利）
・70 年代前期の日本映画～セックス・バイオレンス・宗教・パニック！（樋口尚文）
・ラジオ深夜放送の時代～わたしたちのライ麦畑（落合恵子）
・「七十年代コンビニ」の郊外・その後（宮台真司）
・首相退任に追い込んだ『田中角栄研究』（立花隆）
・長嶋茂雄がバットを置いた日（玉木正之）
・先進国首脳会議（サミット）にメンバー入りの日本（嶌信彦）
・ロッキード事件に見る、事件の「国際化」（堀田力）
・文化大革命の終焉～周恩来、毛沢東の死と鄧小平の復活
・雑誌『クロワッサン』が生まれた時代（松原惇子）
・岸辺の・三十三年の・アルバム（関川夏央）
・広がる「家庭内暴力」～70 年代後半、「家庭」に何が？（斎藤環）
・「共通一次試験」は何をもたらしたのか？（和田秀樹）
・すべては「79 年」に起こった～イラン、アフガン、スリーマイル嶌（坪内祐三）

・日本文学のメルクマール～村上春樹のデビュー（市川真人）
・『ジャパン　アズ　ナンバーワン』をめぐって～誤読した日本人（嶌信彦）

上記テーマを取り上げ、検証し「1970 年代」を総覧した。各論のみならず、関連書を毎回ごと必ず読むように指導した。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 5 月 26 日(土)
講 演 者：山崎　恆成 氏（株式会社 TBS テレビ制作局次長・開発部長）
演　　題：テレビ局で働くということ
実施施設：中央大学　多摩キャンパス　11400 教室
実施内容：時期的な事もあり、テレビ局での仕事を最近入社の若手社員を例に挙げゼミ生たちに「テレビ局」での「働き甲斐」について丁寧に話した。
講演終了後、ゼミ生の有志と市川、山崎氏と懇親の食事会も行った。
成　　果：B のゼミ生には「就活」が迫っており、講師に対し様々な質問が出た。
夏以降の「就活」に向けて有益であった。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 10 月 27 日(土)
講 演 者：山崎　恆成 氏（株式会社 TBS テレビ制作局次長・開発部長）
中谷　弥生 氏（株式会社 TBS テレビ営業局営業推進部長）
演　　題：テレビ局で働くということ
実施施設：中央大学　多摩キャンパス　11430 教室
実施内容：5 月に実施した同一テーマの講演であったが、「就活」シーズン直前でもありより「実践的」な内容となった。
具体的には、「エントリーシート」の書き方や「面接」での心得など聴衆（市川ゼミ生以外にも公開）にも有効な会合になった。近年、女子学生のマス・コミ志望が増加しており、昨年、今年と男性講師、女性講師を一緒に招いている。
中谷氏は報道局時代、総理の番記者経験を持ち、その後、結婚・出産を経て現在、女性初の営業推進部長を努めている。マス・コミ志望の女子学生にとっては目指すべき「ロールモデル」と受け止められた。
講演後は、市川ゼミ生と市川、山崎氏、中谷氏と懇親の食事会。ここでも熱い「就活」談義が交わされた。
成　　果：B の 3 年生にとっては、「就活」直前の講演会となり受講態度も真剣そのものだった。ゼミ生以外にもオープンにしたため、マス・コミ受験を目指す学生が多数参加して盛会であった。
19 年度においても、同様企画は実施したい。

（4）大橋　正和（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

現代社会の変容研究 -デジタル革命による社会の変容について-

＜授業の概要＞

Social Media やクラウドコンピューティングなどが浸透することによりコミュニケーションやメディアが大きな変容を迎えている。グローバルには、2011 年以来インダストリー4.0 と呼ばれるデジタル革命が急速に進行しつつある。

米国では、「2011 年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの 65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう。」と言われており今後 20 年くらいでこの革命により現代社会は、基盤から大きく変容すると考える。デジタル革命の中心となる技術は、IoT、AI、ビッグデータ、3D ビジョン&ソリューション、ロボット技術などであり人間の働き方や教育にも大きな変革をもたらすと言われている。人工知能やビッグデータなどを利用した自動車の自動運転などすでに実現しつつある技術等、実社会にも大きな変革をもたらすものが実現しつつある。21 世紀の現代社会がどのように変容しつつあり今後どのような方向に向かうのかをデジタル革命の視点により研究する。研究成果は、外部で発表もしくは公表するものとしたい。

＜活動内容＞

大橋ゼミにおいては廣田君が前年度から本年夏以降オランダへの留学を計画していた。そのため今までに研究したテーマについて英語での文献を再研究するとともにそれらを英語でまとめを行った。

昨年度の研究テーマは、「デジタル革命による社会の変容について」特に第 4 次産業革命による社会システムの変容をテーマに、AI(人工知能)、IoT(Internet of Things)、ビッグデータ、フィンテックなどの具体的事例にそって研究を行った。特にブロックチェーン技術と事例についての研究とブロックチェーンの重要な技術である時刻認証について研究を行った。

ゼミ中には、これらの成果を元に共通テーマである「現代社会の変容」「Social Media の社会への影響」などについて最新の事例と研究成果について議論した。

台湾で 2017 年 11 月に行われた国際学会において FLP 演習 A 所属（当時）の全員と B 所属（当時）の廣田君が下記の論文を発表した。

Nozomi Tomura, Saki Uehara, Konosuke Kaneta, Ryosuke Hara, Ryogo Sasaki, Maho Tsuchida, Ayu Shibuya, Maiko Yamashita, Chuo University (Japan)
“CONSTRUCTION OF THE E-GOVERNMENT -CASE STUDY OF JAPAN AND ESTONIA-“
Shinnosuke Hirota, Chuo University (Japan)
“BLOCKCHAIN PROMOTES OPEN INNOVATION FOR SERVICE BUSINESS”

THE THIRTEENTH INTERNATIONAL CONFERENCE ON KNOWLEDGE-BASED ECONOMY AND GLOBAL

MANAGEMENT

Southern Taiwan University of Science and Technology, November 23-24, 2017

これら 2 つの論文を元に留学先でプレゼンテーションが出来るようにまとめを行った。

8 月からは、オランダ　フォンティス応用科学大学 ict 学部 ソフトウェアエンジニアリング専攻 に 2 月まで留学した。第 4 次産業革命の最先端の技術の勉強をするとともにプログラミング能力のスキルアップに努めた。研究は、Facebook のグループ機能を使い継続した。

（５）松野　良一（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

放送用番組の制作およびノンフィクション執筆の実践

＜授業の概要＞

①「多摩探検隊」「地域ドキュメンタリー」「にっぽん列島探検隊」の制作

②台湾、ベトナムなど海外取材プロジェクトの遂行とアウトプット

③「中央評論」のグラビア、特集、「草のみどり」、などへの執筆、出版活動

＜活動内容＞

多様な能力開発およびジャーナリストマインドの育成のために、実践的な活動を行なった。主として、①実際にケーブルテレビで放送するための番組制作、②各種活字メディアへの執筆活動、を 2 本柱とした。

① 番組制作については、ケーブルテレビ向けの番組「多摩探検隊」および「にっぽん列島探検隊」の 2 本を制作した。視聴世帯可能世帯数は、多摩探検隊は JCOM 系列の約 270 万世帯、にっぽん列島探検隊はイッツコム系列の約 68 万世帯である。

(1)「中央大学と戦争」プロジェクト

2010 年に出版された『戦争を生きた先輩たち Ⅰ』、『戦争を生きた先輩たち Ⅱ』、2013 年に出版された『中央評論 戦争を生きた先輩たち（完結編）』の取材対象者に再度取材を行い映像化した。2018 年度は、元台湾人学徒、被爆米兵を調査し、オバマ大統領と抱擁した方、陸軍に入隊された方にインタビューを行い、映像制作、執筆活動を行った。

② 執筆活動については、学内のメディアである『中央評論』『草のみどり』に定期的にルポルタージュ等を投稿し掲載された。さらに、独立した取材・執筆プロジェクトを立ちあげ、実行した。

1、番組「多摩探検隊」[1]制作

放送月	企　画	D	番 P	進行状況
12 月	中島飛行機	堀場	堀場	放送済み
18 年 1 月	中大と戦争⑤－前編－	鈴木	鈴木	放送済み
2 月	中大と戦争⑤－後編－	鈴木	鈴木	放送済み
3 月	ぞうのはな子	清水	清水	放送済み
4 月	浅川地下壕	工藤	工藤	放送済み
5 月	グローブマスター機	和田	和田	放送済み
6 月	高浜－前編－	梅田	梅田	放送済み
7 月	高浜－後編－	梅田	梅田	放送済み
8 月	中大と戦争④－前編－	松本	松本	放送済み
9 月	中大と戦争④－後編－	松本	松本	放送済み
10 月	町田米軍機墜落事故	柳下	柳下	放送済み
11 月	ムエタイ	成田	成田	放送済み
12 月	肥沼信次医師続編	桑山	桑山	放送済み
1 月	満蒙開拓団－前編－	久保寺	久保寺	放送中
2 月	満蒙開拓団－後編－	久保寺	久保寺	編集中
3 月	平和を招く猫	原	原	事前取材中

(1)「中央大学と戦争」プロジェクト

取材対象者	住所	取材者	進行状況
梁敬宣	台湾	柚木	放送済み
塚本此清	韓国	谷井	編集中
森重昭	日本	友利	執筆中

[1]東京・多摩地域のケーブルテレビ局 3 局、J:COM 系列 15 局、九州地域の 2 局の計 20 局（視聴可能世帯数:約 270 万）で放送されている 10 分間の地域再発見番組。

2、番組「にっぽん列島探検隊」[2]制作

放送月	番組回	使用 VTR	キャスター	ゲスト	番 P
17 年 12 月	32 回	熊本	―	―	原
18 年 1 月	33 回	国分寺特集	梅田	明田	桑山
2 月	〃	〃	〃	〃	〃
3 月	32 回	熊本	―	―	原
4 月	34 回	朝鮮人学徒兵	―	―	工藤
5 月	〃	〃	〃	〃	〃
6 月	35 回	高浜	梅田	―	井土
7 月	〃	〃	〃	〃	〃
8 月	36 回	高浜再放送	梅田	―	井土
9 月	37 回	台湾人学徒	―	―	柳沢
10 月	〃	〃	〃	〃	〃
11 月	38 回	グローブマスター機墜落事故	梅田	―	矢吹
12 月	〃	〃	〃	〃	〃
1 月	39 回	B29 特集	梅田	―	佐藤
2 月	〃	〃	〃	〃	〃
3 月	40 回	満蒙開拓団	梅田	―	飯嶌

3、地域密着プロジェクト[3]

活動日程	場所	内容	アウトプット
2018 年 9 月 5 日～8 日	福井県高浜町	福井県高浜町の観光 PR 動画の制作。 日本語、韓国語で制作。	完成した作品を ・CATV で放送 ・WEB へのアップロード

[2] 佐世保ケーブルテレビと東急沿線イッツコムエリア（約 68 万世帯）で放送されている全国の土地に密着した 30 分番組。

[3] 地域に密着したドキュメンタリーを撮ることによって、地域の魅力の再発見を目指したプロジェクト。

4、執筆プロジェクト

① 中央評論グラビア

掲載時期	執筆者	内容
2018 年春号	工藤 慶	浅川地下壕
2018 年夏号	柳下 沙良	町田米軍機墜落事故
2018 年秋号	友利 桂都	B29 慰霊碑物語
2018 年冬号	佐藤 仁紀	多摩火工廠

② 草のみどり(「多摩探検隊」制作日誌)

納品月	執筆・タイトル
‘18 年 3 月 (307 号)	「日本の宇宙開発のルーツ、国分寺ー偶然ではなかった発祥の理由ー」 明田 夕芽
5 月 (308 号)	「勤労学徒の証言をつなぐ」 堀場 貴登
7 月 (309 号)	「『浅川地下壕』ー本土決戦前の異常なエネルギーを感じてー」 工藤 慶
9 月 (310 号)	「若狭高浜の夏」 梅田 有紀子
11 月 (311 号)	「元朝鮮人学徒の証言ー中央大学と戦争ー」 鈴木 勇輝
‘19 年 1 月 (312 号)	「ある台湾人学徒の証言」 松本 弥彩暉
3 月 (313 号)	「町田米軍機墜落事故」 柳下 沙良

③中央評論特集

3 年間に亘り行ってきた「B29」プロジェクトが、2018 年をもって完結した。

掲載時期	執筆者	内容	
2018 年 12 月	12 名	続・日本全国 B29 慰霊碑物語	資料①

5、コンテスト受賞歴について

日時	コンテスト名	賞	作品	制作者	時間	内容
2018 年 11 月	「地方の時代」映像祭 市民・学生・自治体部門	奨励賞	「『私は何者であるのか…』－ある台湾人学徒の証言－」	松本 弥彩暉	19 分	太平洋戦争末期、日本の戦況が悪化し、政府は学徒勤労動員を行いました。その対象は当時、日本の統治下にあった台湾からの留学生も例外ではありませんでした。中央大学に在学していた梁敬宣さん（93）は、台湾人でありながら、日本人として戦争に参加しました。しかし、終戦後、中国人として「戦勝国」の人間という扱いを受けることになります。戦争を機に、日本と台湾の間で生きることになった梁さんは、「自分はいったい何者なのか…」という問いに一生苦しめられることになります。戦争に翻弄された元台湾人学徒の人生を追いました。
2019 年 1 月	東京ビデオフェスティバル	入賞	①「『私は何者であるのか…』－ある台湾人学徒の証言－」 ②「グローブマスター墜落事故」 ③「南阿蘇に生きる」	①松本 弥彩暉 ②和田 ユリ花 ③原 啓介	① 20 分 ② 20 分 ③ 28 分	①上記と同じ ②朝鮮戦争休戦間近の 1953 年 6 月 18 日、立川基地から飛び立った米軍大型輸送機グローブマスターが、現在の小平市に墜落。当時航空機事故史上最大の死者を出しました。多摩探検隊（第 102 回）で、同事故について取り上げ、番組サイトで配信を開始したところ、いくつかのコメントが寄せられました。コメントを辿っていくと、最終的に、アメリカに住む遺族の方々にたどり着きました。アメリカでの取材を踏まえ、米軍立川基地グローブマスター機墜落事

						故を、遺族の視点から見つめ直します。 ③熊本県南阿蘇村。23 年前、この村に移住してきた、ある夫婦がいます。 写真家の野中元さん、料理家のかるべけいこさんご夫妻です。移住後、二人は農業などの経験を通して、南阿蘇での生活を築き上げてきました。 そんな中、未曽有の自然災害に見舞われます。2016 年 4 月に起きた、熊本地震です。住み続けてきた自宅が損壊するなど、大きな被害を受けました。そうした状況の中でも、野中さんたちは地域の方々と助け合いながら、少しずつ、もとの生活を取り戻していきます。 熊本地震から 1 年。地震を経ても、二人は南阿蘇で暮らし続けるといいます。二人にとって南阿蘇とはどのような存在なのでしょうか。南阿蘇に生きる、夫婦の物語に迫りました。

6、松野ゼミについて取り上げた新聞記事・テレビ番組について

2018 年	掲載紙・出演番組	取り上げられた活動	
12 月 18 日	読売新聞	多摩探検隊「肥沼信次医師の記憶を繋ぐ」の紹介	資料②

資料①

資料②

31 地域 多摩 13S 2018年(平成30年)12月18日(火曜日) 讀賣新聞

多摩

立川 本社 八王子 府中 町田

立川支局
〒190-8540 立川市曙町1-27-10
電話042-523-4477 Fax523-4478
メールtachikawa@yomiuri.com
八王子支局
〒192-0081 八王子市横山町1-6
電話042-644-9701
町田支局
〒194-0021 町田市中町2-4-14
電話042-723-3661
府中支局
〒183-0026 府中市南町4-40-33
電話042-351-4141
青梅通信部 0428-21-4015
福生通信部 042-551-0540
東村山通信部 042-392-1121
ホームページ
www.yomiuri.co.jp/local/

購読は 0120-4343-81

【広告】読広エリア・アド 042-524-0435
【折込チラシ】 0120-03-4343
【読売旅行】 03-5550-0666

12月19日（水曜日）
旧 11月13日＜大安＞

■あすの暦
通日 353
月齢11.8
（正午）

東京標準
日出 6.45 満潮 2.35
日入16.30 14.07
月出14.02 干潮 8.07
月入 2.29 20.59
（中潮）

澤乃井 SINCE 1702
純米 大辛口 だいからくち
辛いからうまい訳ではない
東京都青梅市沢井一七七〇
小澤酒造株式会社
☎0428(78)8219
http://www.sawanoi-sake.com/

肥沼博士の生涯 番組に

肥沼博士のドキュメンタリー番組を作った桑山さん

中央大生制作 CATVで放映

中央大の学生8人が、第2次大戦後のドイツで多くの伝染病患者の命を救った八王子市出身の医師、肥沼信次博士の生涯を紹介するドキュメンタリー番組を作った。多摩地域と九州のケーブルテレビ局で放映されている。

8人はジャーナリズムを学ぶゼミに所属している。地域の魅力を伝える番組「多摩探検隊」を制作し、ケーブルテレビ局で放映してきた。番組は月に1本ずつ更新しており、12月放映の作品として博士を取り上げた。

博士は同市中町の医院の跡取りとして生まれ、医学を学ぶためにドイツに留学。戦後もドイツの地方都市・ウリーツェン市で伝染病患者の治療に携わった。1946年、37歳の若さで発疹チフスのため命を落とした。

学生らは遺族らと面会したほか、博士と治療活動にあたった現地の医療関係者の証言も収集。博士の生涯をたどる約10分間の作品に仕上げた。

番組プロデューサーで総合政策学部3年の桑山依生基さん(20)は「『偉大な人物』という印象からスタートした」と話す。ただ、遺族らに会って、母親が博士の身を案じていたことなどを聞くと、「家族に愛されていた一人の息子という博士の人間像も浮かんできた」という。

番組は31日まで、ジェイコム系列など多摩地域、九州地域のケーブルテレビ計20局で視聴できる。「多摩探検隊」のホームページ(http://www.tamatan.tv)でも見ることができる。

猫の街

「青梅猫町倶楽部」の発起人会。猫にまつわる商品などで集客を目指す方針を確認した（6日、青梅市で）

商店街が参道の彫様の彫る。商店街おこし納した

■ゆかりを強調

青梅ではかつて養蚕が盛んだった。野崎さんは「青は、作品の発表と販売の場を確保できる利点がある。倶楽部にとっても、様々な種類の「猫」を街に増やすことができ、PRに活用できる。

倶楽部の会長で青梅赤塚不二夫会館の館長、横川秀利さん(83)は「アーティストと猫の手を借りて、商店とお客さんがともに楽しめる新しい街づくりを進めたい」と話している。

セアカゴケグモ1匹 豊洲市場で見つかる

都は17日、豊洲市場（江東区）で特定外来生物の毒

多摩 火災

多摩

7、合宿について

・2018 年 11 月 24 日、25 日。奥多摩「奥多摩温泉郷旅館　観光荘」にてゼミを開催。高浜プロジェクトのプレビュー、多摩探検隊の簡易構成表添削を行った。

8、実態調査・見学調査・講演会

対象演習：B
実 施 日：2018 年 4 月 5 日(木)
実施都市：東京都あきる野市
実施場所：南沢あじさい山
実施内容：多摩探検隊「南沢あじさい園」の制作の為の実態調査
成　　果：「南沢あじさい園」運営者の方の証言を得た。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 4 月 8 日(日)
実施都市：東京都多摩市
実施場所：拓魂公苑
実施内容：多摩探検隊「拓魂－ある満蒙開拓団員の証言－」の制作
成　　果：制作した番組は CATV で放送。WEB でも配信した。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 4 月 11 日(水)
実施都市：東京都町田市
実施場所：町田公民館
実施内容：多摩探検隊「町田米軍機墜落事故～平和な空を願って～」の制作
成　　果：制作した番組は CATV で放送。WEB でも配信した。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 4 月 15 日(日)
実施都市：東京都町田市
実施場所：町田市民ホール
実施内容：多摩探検隊「町田米軍機墜落事故～平和な空を願って～」の制作
成　　果：制作した番組は CATV で放送。WEB でも配信した。
　　tvf(東京ビデオフェスティバル)入賞。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 4 月 19 日(木)
実施都市：東京都多摩市
実施場所：関戸会館
実施内容：多摩探検隊「多摩火工廠」制作

成　　果：中央評論 2018 冬号に執筆が掲載。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 4 月 28 日(土)
実施都市：東京都八王子市
実施場所：学園都市センター
実施内容：多摩探検隊「肥沼信次医師の記憶を繋ぐ」の制作
成　　果：制作した番組は CATV で放送。WEB でも配信した。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 5 月 1 日(火)
実施都市：東京都八王子市
実施場所：日比野知三氏宅
実施内容：多摩探検隊「町田米軍機墜落事故～平和な空を願って～」の制作
成　　果：制作した番組は CATV で放送。WEB でも配信した。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 5 月 12 日(土)
実施都市：東京都千代田区
実施場所：しょうけい館
実施内容：多摩探検隊「結核と清瀬」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 5 月 14 日(月)
実施都市：東京都立川市
実施場所：国立極地研究所
実施内容：多摩探検隊「八王子隕石」制作の為の実態調査
成　　果：八王子隕石の成分、歴史的価値等の把握。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 5 月 19 日(土)
実施都市：東京都港区
実施場所：赤坂レジデンシャルホテル
実施内容：多摩探検隊「結核と清瀬」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 5 月 20 日(日)

実施都市：東京都府中市
実施場所：都立武蔵野の森公園サービスセンター
実施内容：多摩探検隊「調布飛行場物語」の制作
成　　果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：B
実 施 日：2018年5月20日(日)
実施都市：東京都北区
実施場所：デニーズ豊島店
実施内容：多摩探検隊「中央大学と戦争」の制作
成　　果：取材内容を執筆し、アウトプット予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2018年5月29日(火)
実施都市：東京都清瀬市
実施場所：結核予防会結核研究所
実施内容：多摩探検隊「結核と清瀬」制作
成　　果：制作した番組はCATVで放送。WEBでも配信した。

対象演習：A・B
実 施 日：2018年5月31日(木)
実施都市：神奈川県川崎市
実施場所：小澤昔ばなし研究所
実施内容：多摩探検隊「多摩火工廠」制作
成　　果：中央評論冬号に執筆が掲載。

対象演習：A・B
実 施 日：2018年6月3日(日)
実施都市：東京都新宿区
実施場所：新宿FACE
実施内容：多摩探検隊「再起～あるムエタイ選手の挑戦～」の制作
成　　果：制作した番組はCATVで放送。WEBでも配信した。

対象演習：A・B
実 施 日：2018年6月8日(金)
実施都市：東京都小平市
実施場所：多摩小平保健所
実施内容：多摩探検隊「結核と清瀬」の制作
成　　果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 6 月 9 日(土)
実施都市：東京都府中市
実施場所：都立武蔵野の森公園
実施内容：多摩探検隊「調布飛行場物語」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 6 月 12 日(火)
実施都市：東京都青梅市
実施場所：東京都立青峰学園
実施内容：多摩探検隊「パソコン部」制作の為の実態調査
成　　果：パソコン部の活動状況、実績等の把握。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 6 月 16 日(土)
実施都市：東京都稲城市
実施場所：稲城市地域振興プラザ
実施内容：多摩探検隊「多摩火工廠」制作
成　　果：中央評論 2018 冬号に執筆が掲載。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 6 月 16 日(土)
実施都市：東京都新宿区
実施場所：新宿駅
実施内容：多摩探検隊「再起～あるムエタイ選手の挑戦～」の制作
成　　果：制作した番組は CATV で放送。WEB でも配信した。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 6 月 23 日(土)～6 月 24 日(日)
実施都市：長野県下伊那郡阿智村
実施場所：満豪開拓平和記念館
実施内容：多摩探検隊「拓魂－ある満蒙開拓団員の証言－」の制作
成　　果：制作した番組は CATV で放送。WEB でも配信した。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 7 月 10 日(火)
実施都市：東京都青梅市

実施場所：東京都立青峰学園
実施内容：多摩探検隊「パソコン部」制作の為の実態調査
成　　果：パソコン部員からの証言を得た。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 7 月 11 日(水)
実施都市：千葉県柏市
実施場所：平和像の製作者　住山氏の工場
実施内容：多摩探検隊「町田米軍機墜落事故～平和な空を願って～」の制作
成　　果：制作した番組は CATV で放送。WEB でも配信した。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 7 月 14 日(土)
実施都市：東京都八王子市
実施場所：浅川市民センター
実施内容：多摩探検隊「多摩火工廠」制作
成　　果：中央評論冬号に執筆が掲載。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 7 月 14 日(土)
実施都市：東京都八王子市
実施場所：小中沢麻里氏宅
実施内容：多摩探検隊「水俣病」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 7 月 15 日(日)
実施都市：千葉県松戸市
実施場所：上原登志江氏宅
実施内容：多摩探検隊「調布飛行場物語」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 7 月 17 日(火)
実施都市：東京都北区
実施場所：北とぴあ
実施内容：多摩探検隊「中央大学と戦争」の制作
成　　果：取材内容を執筆し、アウトプットする予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 7 月 22 日(日)
実施都市：東京都多摩市
実施場所：パルテノン多摩
実施内容：多摩探検隊「多摩火工廠」制作
成　　果：中央評論冬号に執筆が掲載。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 8 月 3 日(金)
実施都市：神奈川県横浜市
実施場所：帆船日本丸
実施内容：多摩探検隊「LST」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 8 月 5 日(日)
実施都市：東京都八王子市
実施場所：小中沢麻里氏宅
実施内容：多摩探検隊「水俣病」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：B・C
実 施 日：2018 年 8 月 6 日(月)
実施都市：東京都北区
実施場所：北とぴあ
実施内容：多摩探検隊「中央大学と戦争」の制作
成　　果：取材内容を執筆し、アウトプットする予定。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 8 月 12 日(日)
実施都市：東京都千代田区
実施場所：国会議事堂
実施内容：多摩探検隊「LST」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 8 月 29 日(水)
実施都市：東京都府中市
実施場所：田中昭男氏宅

実施内容：多摩探検隊「調布飛行場物語」の制作
成　　果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A
実 施 日：2018年8月31日(金)
実施都市：神奈川県平塚市
実施場所：ラスカ平塚
実施内容：カンボジアから、難民として日本に逃れてきた方への取材
成　　果：取材内容を執筆し、アウトプット予定。

対象演習：A
実 施 日：2018年9月2日(日)
実施都市：神奈川県横浜市
実施場所：こどもの国
実施内容：多摩探検隊「多摩火工廠」制作
成　　果：中央評論2018冬号に執筆が掲載。

対象演習：A
実 施 日：2018年9月3日(月)
実施都市：東京都世田谷区
実施場所：金子熊夫氏宅
実施内容：ベトナム戦争時、外交官としてサイゴン日本大使館に勤務していた方への取材
成　　果：中央評論2019秋号に執筆が掲載予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2018年9月3日(月)
実施都市：東京都八王子市
実施場所：小中沢麻里氏宅
実施内容：多摩探検隊「水俣病」の制作
成　　果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2018年9月5日(水)～9月9日(日)
実施都市：福井県大飯郡高浜町
実施場所：日引の棚田・他
実施内容：福井県高浜町観光PR動画の制作
成　　果：制作した番組はCATVで放送やWEBで配信した。

対象演習：A・B

実 施 日：2018 年 9 月 26 日(水)
実施都市：東京都台東区
実施場所：東京文化財研究所
実施内容：多摩探検隊「調布飛行場物語」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 9 月 29 日(土)
実施都市：神奈川県横浜市
実施場所：エスカル横浜
実施内容：多摩探検隊「LST」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・C
実 施 日：2018 年 10 月 18 日(木)
実施都市：東京都豊島区
実施場所：オリエント設計株式会社
実施内容：多摩探検隊「台湾出身戦没者慰霊碑」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 11 月 1 日(木)
実施都市：東京都清瀬市
実施場所：公益財団法人結核予防会結核研究所
実施内容：多摩探検隊「結核と清瀬」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 11 月 9 日(金)
実施都市：東京都三鷹市
実施場所：近藤孝子氏宅
実施内容：多摩探検隊「樺太残留邦人」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 11 月 10 日(土)～11 月 12 日(月)
実施都市：大阪府吹田市
実施場所：関西大学　千里山キャンパス
実施内容：「地方の時代」映像祭への出席

成　　果：「『わたしは何者であるのか…』－ある台湾人学徒の証言－」が奨励賞を受賞。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 11 月 23 日(金)
実施都市：東京都清瀬市
実施場所：公益財団法人結核予防会結核研究所
実施内容：多摩探検隊「結核と清瀬」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 11 月 27 日(火)
実施都市：東京都世田谷区
実施場所：金子熊夫氏宅
実施内容：ベトナム戦争時、外交官としてサイゴン日本大使館に勤務していた方への取材
成　　果：中央評論 2019 秋号に執筆が掲載予定。

対象演習：A・C
実 施 日：2018 年 11 月 29 日(木)
実施都市：東京都東村山市
実施場所：多磨全生園・花さき保育園
実施内容：多摩探検隊「多磨全生園」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 12 月 2 日(日)
実施都市：東京都港区
実施場所：慶応義塾大学　三田キャンパス
実施内容：多摩探検隊「調布飛行場物語」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 12 月 5 日(水)
実施都市：東京都渋谷区
実施場所：日本サハリン協会東京本部
実施内容：多摩探検隊「樺太」の制作
成　　果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 12 月 19 日(水)

実施都市：神奈川県川崎市
実施場所：加納実紀代氏宅
実施内容：多摩探検隊「韓国人パイロット」の制作
成　　果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A
実 施 日：2018年12月20日(木)
実施都市：東京都清瀬市
実施場所：公益財団法人結核予防会結核研究所
実施内容：多摩探検隊「結核と清瀬」の制作
成　　果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A
実 施 日：2019年1月12日(土)
実施都市：静岡県熱海市
実施場所：玄岳
実施内容：多摩探検隊「韓国人パイロット」の制作
成　　果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A
実 施 日：2019年1月28日(月)～1月29日(火)
実施都市：長野県安曇野市
実施場所：上原幸一氏宅
実施内容：多摩探検隊「調布飛行場物語」の制作
成　　果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A
実 施 日：2019年1月30日(水)
実施都市：静岡県熱海市
実施場所：医王寺・熱海梅園
実施内容：多摩探検隊「韓国人パイロット」の制作
成　　果：制作した番組はWEBで配信予定。

（6）村田　雅之（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

現代社会の変容研究 ―デジタル革命による社会の変容について―

＜授業の概要＞

今年度シラバスの内容は以下のとおり。

Social Media やクラウドコンピューティングなどが浸透することによりコミュニケーションやメディアが大きな変容を迎えている。グローバルには、2011 年以来インダストリー4.0 と呼ばれるデジタル革命が急速に進行しつつある。

米国では、「2011 年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの 65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう。」と言われており今後 20 年くらいでこの革命により現代社会は、基盤から大きく変容すると考える。デジタル革命の中心となる技術は、IoT、AI、ビッグデータ、3D ビジョン&ソリューション、ロボット技術などであり人間の働き方や教育にも大きな変革をもたらすと言われている。人工知能やビッグデータなどを利用した自動車の自動運転などすでに実現しつつある技術等、実社会にも大きな変革をもたらすものが実現しつつある。21 世紀の現代社会がどのように変容しつつあり今後どのような方向に向かうのかをデジタル革命の視点により研究する。研究成果は、外部で発表もしくは公表するものとしたい。

＜活動内容＞

大橋正和先生のゼミ（「FLP 演習 A」）を直接に引き継いでいるため、テーマ、目的、進行等については、昨年度までの大橋ゼミの内容を継続した。

Facebook 上のグループを活用した PBL の手法を用いて、個人もしくはグループごとに関心と問題意識を持った研究テーマを探索・発見し、そのテーマに沿った調査研究活動を行った。具体的には、「ソーシャルメディアマーケティング」、「地域での ICT 活用」、「漫画の電子書籍および海賊版」、「世界遺産登録とグローバルストラテジー」、「公共交通とオープンデータ」、「Sharing City」、「ブロックチェーン技術」、「Water Crisis」などである。

ゼミ中には、共通テーマである「現代社会の変容」や「Social Media の社会への影響」などを意識しながら、最新の事例と研究成果について、レジメあるいは口頭による紹介、報告、議論を行った。

なお、佐々木涼悟君が研究成果を以下に発表した。

Ryogo SASAKI, 2019, “On the Study of Water Crisis,” Journal of Transformation of human behavior under the influence of The Infosocionomics Society, Hawaii.

（7）臼井　敏男（全学連携教育機構・兼任講師）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

タフで心優しい新聞記者を育てることです。

＜授業の概要＞

授業は①作文の講評②日々の新聞記事の分析③新聞記者の直面する問題の 3 本立てです。①の作文は毎週、宿題として 800 字を書いてもらいます。テーマは新聞社、通信社、NHK の過去の入社試験の課題です。作文を書く狙いは、一つには分かりやすく論理的な文章を書く訓練をすることです。もう一つは、自分を見つめ、社会の問題を深く考えることです。②では、いい記事と悪い記事、特ダネ、ユニークな記事などを取り上げます。③では、取材される側のプライバシーやメディアスクラムがテーマです。いずれも講師が学生に質問して、学生に自ら考えてもらうのが授業の特徴です。

講師は 38 年間、朝日新聞社で社会部記者、週刊誌記者、社会部長、論説委員を務めました。その経験を学生に伝えたいと思っています。

＜活動内容＞

ゼミ生は 2 年生 4 人。

■作文

手本は朝日新聞の「天声人語」、読売新聞の「編集手帳」、毎日新聞の「余録」など各紙の一面コラム。一面コラムは通常、本や映画、ことわざなどを引用して書き出し、後半で社会的な問題につないでいる。ゼミ生には、前半で自分の体験を書き、後半で社会的な問題につなぐよう指導した。自分の体験を書けば、独自の作品をつくれるからだ。社会的な問題を扱うのは、記者の卵として当然だからだ。

作文では、自分の体験で 5～6 本の鉄板ネタをつくるのを目標とした。面白いネタが 5～6 本あれば、どんなテーマについても書けるからだ。

毎週、800 字を鉛筆で書いてもらって、講師が添削し、次の週に講評した。ゼミ生にも互いに講評してもらった。

作文のテーマは次の通り。

▽分断▽競争▽3・11 以後の日本と私▽転機▽私が大切にしていること▽人工知能▽人口減社会▽貫く▽食のこれから▽色▽アメリカ▽男女格差▽多様性▽記者という仕事▽世論▽10 年後の日本▽備える▽ローカルとグローバル▽力▽嘘▽外国人▽聴く▽創る▽デジタル時代に期待すること

■紙面をもとに議論

日々の新聞を取り上げて、「いい記事か悪い記事か」「自分が記者だったら、どう取材して、どう書くか」「自分が記者だったら、どんな質問をするか」を考えて、議論してもらった。読

者目線だけでなく、記者目線で新聞を読む訓練をするのが狙いだ。

取り上げた主なテーマや記事は次の通り。

▽森友、加計、自衛隊日報問題の共通点と相違点はなにか。

▽「施設の子同士の性暴力」（朝日新聞）

▽「『みる・きく・はなす』はいま」「明日も喋ろう」（朝日新聞）

▽「柳瀬秘書官の名刺の公開」（朝日新聞、読売新聞）

▽「弁護士の懲戒請求」（朝日新聞、読売新聞）

▽「日大、会見も炎上」（産経新聞）

▽「去勢不妊手術　新聞はどう報じたか」（朝日新聞）

▽「あの日から10年　秋葉原無差別殺傷事件と私」（東京新聞、筆者は共同通信）

▽佐川氏不起訴について落合洋司弁護士の談話の違い（朝日新聞、読売新聞）

▽「東日本入管センターでの自殺、自殺未遂」（朝日新聞茨城版）

▽共同通信記者の盗聴

▽「『おもてなし』って、だれを」（朝日新聞）

▽「カジノ法案　衆院委可決」（読売新聞）

▽ゼミの先輩の寺田佳代さんの大阪北部地震での遺族取材体験記（共同）

▽連続中毒死で逮捕前の看護師に取材（朝日新聞）

▽青森・大湊高校川内校舎の野球部投手（毎日新聞、共同通信）

▽女子高生コンクリ殺人事件の週刊新潮の新聞広告

▽「昭和天皇　晩年の心情　戦争責任いわれるとつらい」（共同通信）

▽「バス停　横断歩道に近接　危ない交差点　横浜で小5死亡」（読売新聞）

▽「てんでんこ　祈り」（朝日新聞）と「福島と原発　弔いのかたち」（読売新聞）の比較

▽「ココハツ　『カメ止め』が教えてくれたこと」（朝日新聞）

▽「択捉島　進む軍事強化」（朝日新聞）

▽「奨学金　説明せず全額請求　保証人　支払い義務は半額」（朝日新聞）

▽「官民ファンド　高額報酬案　産業革新機構　年収1億円超も」（朝日新聞）

▽「NHK連ドラ『まんぷく』暴行シーンは史実か　過酷だった憲兵の弾圧」（毎日新聞）

▽「外国人1000人雇い止め　シャープ亀山工場の減産影響」（東京新聞＝共同通信）

▽「今日も傍聴席にいます　テロ決行した右翼活動家　逮捕後に知った裏切り」（朝日新聞）

▽「四万十に『ハイジ』なぜ　ヤギと散歩する少女『楽しい』」（朝日新聞）

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A

実 施 日：2018年11月9日(金)

実施都市：東京都文京区

実施場所：東京大学　安田大講堂

実施内容：朝日新聞・ニューヨークタイムズ共催の講演会

成　　果：メディア社会でどのように新聞は動いていくべきか学ぶことができた。

対象演習：A・C
実 施 日：2018 年 12 月 1 日(土)
実施都市：東京都渋谷区
実施場所：聖心女子大学
実施内容：「シリア難民、子どもたちの日々の暮らし」と題する松永晴子さんのトークイベント
成　　果：ザアタリ難民キャンプで、必死に溌剌と生きている子どもたちの存在を知り、そこに身を寄せている人々をもっと深く知りたいと思った。

対象演習：A・C
実 施 日：2018 年 12 月 26 日(水)
実施都市：東京都文京区
実施場所：文京区民センター
実施内容：安田純平さんを含めて新聞やテレビ、フリーランスなど、海外を中心に活動するジャーナリストのシンポジウム
成　　果：「自己責任論」についての議論が深く分かり、海外の戦場の実情を伝えるジャーナリズムの意義を学んだ。

対象演習：A・C
実 施 日：2019 年 2 月 3 日(日)～2 月 6 日(水)
実施都市：岡山県倉敷市真備町・広島県三原市・広島市
実施場所：倉敷市災害ボランティアセンター・他
実施内容：西日本豪雨災害の復興取材、毒ガス資料館の見学、原爆資料館の見学
成　　果：普段のゼミでは体験出来ない現場の雰囲気を感じることができた。

■講演会
新聞社や通信社に内定した 4 年生にゼミで就活体験を話してもらった。
読売新聞人事部次長の月野美帆子さんにゼミで就活のコツを話してもらった。

■インターンへの参加
2 年生でも参加できる夏・冬のインターンに積極的に参加してもらった。読売新聞に 1 人、河北新報に 3 人が参加した。

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

タフで心優しい新聞記者を育てることです。

＜授業の概要＞

授業は①作文の講評②日々の新聞記事の分析③入社試験を突破するための技術を磨くことの 3 本立てです。①の作文は毎週、宿題として 800 字を書いてもらいます。テーマは新聞社、通信社、NHK の過去の入社試験の課題です。作文を書く狙いは、一つには分かりやすく論理的な文章を書く訓練をすることです。もう一つは、自分を見つめ、社会の問題を深く考えることです。②では、いい記事と悪い記事、特ダネ、ユニークな記事などを取り上げます。③では、現代の社会の問題の考え方、エントリーシート(ES)の書き方、面接での答え方などを指導します。いずれも講師が学生に質問して、学生に自ら考えてもらうのが授業の特徴です。

講師は 38 年間、朝日新聞社で社会部記者、週刊誌記者、社会部長、論説委員を務めました。その経験を学生に伝えたいと思っています。

＜活動内容＞

ゼミ生は 3 年生 4 人、4 年生 5 人。

■作文

手本は朝日新聞の「天声人語」、読売新聞の「編集手帳」、毎日新聞の「余録」など、各紙の一面コラム。一面コラムは通常、本や映画、ことわざなどを引用して書き出し、後半で社会的な問題につないでいる。ゼミ生には、前半で自分の体験を書き、後半で社会的な問題につなぐよう指導した。自分の体験を書けば、他人とは違う独自の作品をつくれるからだ。社会的な問題を扱うのは、記者の卵として当然だからだ。

作文では、自分の体験で 5～6 本の鉄板ネタをつくるのを目標とした。面白いネタが 5～6 本あれば、どんなテーマについても書けるからだ。

毎週、800 字の作文を鉛筆で書いてもらい、講師が添削し、次の週に講評した。ゼミ生にも互いに講評してもらった。

3 年生には作文だけでなく、ES、街ダネも書いてもらった。これはインターンや本試験に備えてのことだ。

作文や ES、街ダネのテーマは次の通り。

▽ES「記者への志望理由」「学生時代に力を入れたこと」「記者として取り組みたいこと」「自己 PR」▽競争▽3・11 以後の日本と私▽転機▽私が大切にしていること▽街ダネ「東京の夏」▽驚いたこと▽人口減社会▽貫く▽食のこれから▽色▽アメリカ▽男女格差▽多様性▽記者という仕事▽世論▽10 年後の日本▽備える▽ローカルとグローバル▽力▽嘘▽外国人▽聴く▽創る▽デジタル時代に期待すること

■紙面をもとに議論

日々の新聞を取り上げて、「いい記事か悪い記事か」「自分が記者だったら、どう取材して、どう書くか」「自分が記者だったら、どんな質問をするか」を考えて、議論してもらった。読者目線だけでなく、記者目線で新聞を読む訓練をするのが狙いだ。

取り上げた主なテーマや記事は次の通り。

▽森友、加計、自衛隊日報問題の共通点と相違点はなにか。
▽「施設の子同士の性暴力」（朝日新聞）
▽「『みる・きく・はなす』はいま」「明日も喋ろう」（朝日新聞）
▽「柳瀬秘書官の名刺の公開」（朝日新聞、読売新聞）
▽「弁護士の懲戒請求」（朝日新聞、読売新聞）
▽「日大、会見も炎上」（産経新聞）
▽「去勢不妊手術　新聞はどう報じたか」（朝日新聞）
▽「あの日から10年　秋葉原無差別殺傷事件と私」（東京新聞、筆者は共同通信）
▽佐川氏不起訴について落合洋司弁護士の談話の違い（朝日新聞、読売新聞）
▽「東日本入管センターでの自殺、自殺未遂」（朝日新聞茨城版）
▽共同通信記者の盗聴
▽「『おもてなし』って、だれを」（朝日新聞）
▽「カジノ法案　衆院委可決」（読売新聞）
▽ゼミの先輩の寺田佳代さんの大阪北部地震での遺族取材体験記（共同）
▽連続中毒死で逮捕前の看護師に取材（朝日新聞）
▽青森・大湊高校川内校舎の野球部投手（毎日新聞、共同通信）
▽女子高生コンクリ殺人事件の週刊新潮の新聞広告
▽「昭和天皇　晩年の心情　戦争責任いわれるとつらい」（共同通信）
▽「バス停　横断歩道に近接　危ない交差点　横浜で小5死亡」（読売新聞）
▽「てんでんこ　祈り」（朝日新聞）と「福島と原発　弔いのかたち」（読売新聞）の比較
▽「ココハツ　『カメ止め』が教えてくれたこと」（朝日新聞）
▽「択捉島　進む軍事強化」（朝日新聞）
▽「奨学金　説明せず全額請求　保証人　支払い義務は半額」（朝日新聞）
▽「官民ファンド　高額報酬案　産業革新機構　年収1億円超も」（朝日新聞）
▽「NHK連ドラ『まんぷく』暴行シーンは史実か　過酷だった憲兵の弾圧」（毎日新聞）
▽「外国人1000人雇い止め　シャープ亀山工場の減産影響」（東京新聞＝共同通信）
▽「今日も傍聴席にいます　テロ決行した右翼活動家　逮捕後に知った裏切り」（朝日新聞）
▽「四万十に『ハイジ』なぜ　ヤギと散歩する少女『楽しい』」（朝日新聞）

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：C
実 施 日：2018年10月14日(日)
実施都市：東京都港区
実施場所：ザ・プリンスパークタワー東京

実施内容：言論 NPO 主催による日中の記者や有識者のシンポジウム
成　　果：両国のメディアの違いを学んだ。自国のメディアへの両国の信頼度のアンケート結果が披露された。日本の低さは残念だが、中国側の高さも気になる。国営メディアのニュースをすべて信じるのは危険だ。両国民が共通の認識を持つには、まだまだ時間がかかると思った。

対象演習：C
実 施 日：2018 年 10 月 15 日(月)～10 月 16 日(火)
実施都市：群馬県多野郡上野村
実施場所：御巣鷹の尾根
実施内容：日航機墜落事故の現場、資料館を訪れた。
成　　果：遺族に会った。墜落の 8 月 12 日前後のマスコミが集まる時期を避けて、静かな環境で慰霊登山をする遺族も多いそうだ。仮設の小屋には、亡くなった方の顔写真がある。1 人 1 人に人生があったのだ、と思いを巡らせた。尾根から帰ろうとすると、日航の関連会社の新入社員も登ってきた。聞くと、ライバルの ANA や東京メトロも研修に来ることがあるそうだ。御巣鷹は、空だけでなく、交通の安全を祈る場所になっていた。

対象演習：C
実 施 日：2018 年 10 月 16 日(火)
実施都市：東京都世田谷区
実施場所：本屋 B&B
実施内容：森達也×藤井誠二トークイベント「なぜ日本では犯罪加害者家族が社会に叩かれ、つるし上げられるのか？」
成　　果：犯罪加害者家族の苦悩とその支援について取材体験を聞き、考えを深めることができた。

対象演習：A・C
実 施 日：2018 年 12 月 1 日(土)
実施都市：東京都渋谷区
実施場所：聖心女子大学
実施内容：『シリア難民、子どもたちの日々の暮らし』と題する松永晴子さんのトークイベント
成　　果：ザアタリ難民キャンプで、必死に溌剌と生きている子どもたちの存在を知り、そこに身を寄せている人々をもっと深く知りたいと思った。

対象演習：A・C
実 施 日：2018 年 12 月 26 日(水)
実施都市：東京都文京区

実施場所：文京区民センター
実施内容：安田純平さんを含めて、新聞やテレビ、フリーランスなど、海外を中心に活動するジャーナリストのシンポジウム
成　　果：「自己責任論」についての議論が深く分かり、海外の戦場の実情を伝えるジャーナリズムの意義を学んだ。

対象演習：A・C
実 施 日：2019年2月3日(日)～2月6日(水)
実施都市：岡山県倉敷市真備町・広島県三原市・広島市
実施場所：倉敷市災害ボランティアセンター・他
実施内容：西日本豪雨災害の復興取材、毒ガス資料館の見学、原爆資料館の見学
成　　果：普段のゼミでは体験出来ない現場の雰囲気を感じることができた。

■講演会
新聞社や通信社に内定した4年生にゼミで就活体験を話してもらった。
読売新聞人事部次長の月野美帆子さんにゼミで就活のコツを話してもらった。

■インターンへの参加
夏・冬のインターンに3年生が参加した。参加先は朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、共同通信、NHK。

■4年生の就職先
読売新聞、共同通信、日本経済新聞、朝日新聞、貿易会社「Tiramis」　各1人

（8）清水　一彦（全学連携教育機構・兼任講師）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

ポピュラー文化とメディア変容

＜授業の概要＞

本演習は、ポピュラー文化に関連するメディアの実態について、広く理解を深めることを目的としている。たとえば、趣味やファッション、ライフスタイルに関する雑誌やインターネット情報であったり、あるいはスポーツジャーナリズムであったりというように、われわれの日常生活において身近な、ポピュラー文化を切り口にして、今日のメディアの実態や問題点について考えてみたい。

＜活動内容＞

辻ゼミ（本年度は清水が兼任講師として担当）は、若者向け男性誌群、若者向け女性誌群、趣味の専門誌群の各ジャンル雑誌群を 3 年に一度ずつ連続的にとりあげ、その時々での雑誌群の内容分析、読者調査、編集部取材などを通じて、経時的変化を加味しつつ特定の雑誌を核とするポピュラー文化の分析と理解を深めている。本年度は、若者向け女性誌 7 誌(『CanCam』『non・no』『JJ』『JELLY』『sweet』『FUDGE』『mini』) を分析対象としてとりあげた。

2 年、3 年、4 年の計 20 名を 3 班にわけ、それぞれが 1 誌を担当した。活動の初期には、各種資料と文献講読から雑誌のポピュラー文化形成における位置づけと雑誌市場の動向を調査し、さらに編集部の実態を知るために小学館の編集者をゲスト講師として招いた。その後、首都圏の若年女性層を中心に各誌読者のインタヴュー調査と、各誌のマルチメソッドアプローチによる分析を開始した。

9 月には若年女性層の典型的市場と思われる中堅地方都市である金沢市をフィールドとして読者インタヴューを行った。また、同地での合宿では、それまでの内容分析と首都圏でのインタヴューと編集部取材に基づく中間報告発表会も同時に行った。

後期に入ってからは、中間報告会で指摘された項目に沿い、さらなる雑誌内容と読者調査の分析を精緻化した。そのさい、それぞれの女性誌の雑誌市場におけるポジショニングを出版社の立場から知るために、暮しの手帖社の編集者（元マガジンハウス編集者で、女性誌一般について詳しい）をゲスト講師として招いた。

これらのゼミ活動の成果として、2018 年 12 月 15 日にはゼミ代表者による期末成果報告会での発表を行い、さらに 2019 年 1 月には成果報告書を完成させた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 6 月 11 日(月)

講 演 者：苅谷　昌利 氏（株式会社小学館）

演　　題：編集者の思考と行動

実施施設：中央大学　多摩キャンパス　3202 教室

実施内容：雑誌の企画がどのような過程で成立するのか、そのさい、読者の嗜好を編集部がどのように把握するのかを教えていただいた。

成　　果：読者の立場からではわからない雑誌記事の制作過程や構成を知ることができ、内容分析がより的確なものとなった。また出版業界を目指す学生にとっては、編集者の日常も垣間見られ、就活の一助にもなった。

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 9 月 17 日(月)～9 月 19 日(水)

実施都市：石川県金沢市

実施場所：金沢 21 世紀美術館・他

実施内容：金沢市をフィールドとして読者インタヴューを行った。また合宿中に、それまでの容分析と首都圏でのインタヴューと編集部取材に基づく中間報告発表会も行った。

成　　果：学生の日常的生活圏から離れフィールドでの視野を広くすることができ、読者分析の深化が図れた。また、中間発表会では活発な質疑応答および相互批評をすることにより、後期ゼミナールでの学習・研究目標を明確化することができた。

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 11 月 19 日(月)

講 演 者：久我　英二 氏（株式会社暮しの手帖社）

演　　題：雑誌のポジショニング

実施施設：中央大学　多摩キャンパス　3202 教室

実施内容：広告依存度が高く流行の先端を追いかけるマガジンハウスを代表とするファッション誌などの雑誌群と、広告非掲載で流行とは一線を画する『暮しの手帖』との雑誌ポジションの差異を解説していただいた。

成　　果：研究対象としている雑誌群以外にも、まったく異なる価値観と読者を持つ雑誌群も広く存在し、それらの多様性がメディアとしての雑誌市場の特性であり、それが幅広いポピュラー文化を担保していることを理解することができた。また、調査対象雑誌を分析するときのあらたな視点を得ることができ、研究により説得力をもたせることができた。

Ⅲ．国際協力プログラム

１．設置の趣旨と教育の目的

21 世紀、人類の抱えるもっとも深刻な問題は、アジア、中東、アフリカ、中南米諸国に広く見られる貧困問題です。地球上の多くの人々が、依然として経済的に厳しい貧困な状況に喘いでおり、栄養、人口、教育、衛生疾病、人権、環境、時には難民、紛争などの側面で､様々な深刻な問題が生じています。

途上国の経済社会が、この厳しい貧困の悪循環から抜け出して、持続的な成長の軌道に乗るには、そこに住んでいる人々自身による自立した自助努力が不可欠です。まだ未成熟の市場の機能を強めるような民間の産業や企業を開発育成していくことが重要ですが、さらに社会の様々な領域で効率的な政府が積極的に介入し、単に市場機能だけでは解決できない深刻な構造的な問題を解決していかなければなりません｡幅広い分野にわたる社会開発､ハード･ソフトのインフラ整備、計画的な経済開発の推進など、今後も長い時間をかけて継続的に全力で取り組むべき問題が山積しています。

同時に、貧困問題の解決には、南北間の継続的かつ大規模な国際協力も不可欠な条件になっています。豊かな先進国が、途上国との緊密な協力のもとに、資金面、人材面、貿易面、情報面の幅広い分野で、今後も長期間にわたって継続して積極的に開発問題に参加しなければ、人類の貧困問題の根本的な解決は極めて困難と考えられます。国家レベルでの多様な国際協力、NGO など民間レベルでの国際協力、さらに、先進国の優れた技術の国際移転や途上国におけるグローバル企業の活動などが、貧しい途上国の経済社会の活性化（テイクオフ）に非常に重要な貢献をしていることは、確かな事実です。

国際協力の諸活動を支え主導しているのは、開発問題に関する様々な分野で高度に優れた専門能力をもつ人材です。すなわち、高度な語学力による国際コミュニケーション能力、柔軟な異文化理解・異文化適応能力、途上国問題に関する国際政治や経済社会の分析における高度な専門的知識・技術などが、国際協力に参加する人材にとって不可欠の個人的資質能力として強く求められています。異文化社会の複雑な社会経済構造を的確に分析し、様々な困難な環境の中でも経済社会の発展の方策を具体的に模索試行する、逞しい精神力と高度な専門能力を持った人材こそが、21 世紀の人類的な課題に挑戦することができるのです。

「国際協力プログラム」は、貧困問題の解決という、21 世紀の人類的課題に挑戦する人材の基礎的な専門能力を養成する場として設定されました。国際的なコミュニケーション能力を継続的に強化するとともに、複数学部にまたがる様々な開発問題の専門科目群の学修を進めていきます。

さらに、本プログラム独自に開講する演習科目の履修を通じて、複数の担当教員とより緊密に協力しながら様々な視点から開発問題の専門的な研究を行い、総合的かつ体系的な能力育成を目標にしています。特に、途上国社会に密着した現地感覚と鋭い問題意識を深めるよう、アジアなどでの現地社会調査「Project-Based Field Work」による調査報告書を執筆する、実践的教育を重視しています。

２．2018 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
1	小森谷　徳純	経済学部	2	－	1	合併（A・C）
2	林　光洋	経済学部	11	10	9	単独（A・B・C）
3	清水　武則	商学部	3	－	－	単独（A）
4	武石　智香子	商学部	13	9	3	単独（A・B・C）
5	中迫　俊逸	商学部	2	1	－	合併（A・B）
6	平澤　敦	商学部	6	7	5	単独（A・B・C）
7	新原　道信	文学部	9	3	2	単独（A・B・C）
8	野宮　大志郎	文学部	－	2	1	合併（B・C）
9	伊藤　晋	全学連携教育機構	4	2	1	単独（A・B・C）
10	稲葉　誠	全学連携教育機構	－	－	2	単独（C）
11	佐々木　弘世	全学連携教育機構	15	25	18	単独（A・B・C）
合計			65	59	42	

３．プログラムスケジュール

4 月　　履修ガイダンス

5 月　　第一回部門授業担当者委員会

6 月　　2019 年度募集に伴う総合ガイダンス

7 月　　第二回部門授業担当者委員会

9 月　　2019 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス

11 月　　2019 年度募集に伴う選考試験

12 月　　第三回部門授業担当者委員会
学内活動（期末成果報告会）

3 月　　FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

４．プログラムの活動

期末成果報告会

(1) 実　施　日：　2018 年 12 月 15 日(土) 10:00～
実 施 場 所：　中央大学　多摩キャンパス　3453、3454、3455 教室
実 施 内 容：　各ゼミによる年度活動報告

(2) 実　施　日：　2018 年 12 月 15 日(土) 16:30～
実 施 場 所：　中央大学　多摩キャンパス　3551 教室
実 施 内 容：　パネルディスカッション
テ　ー　マ：　私たちが SDGs に貢献できること
パネリスト：　大森　功一 氏（世界銀行東京事務所）
久保倉　健 氏（JICA 企画部国際援助協調企画室）
丸山　則治 氏（コニカミノルタ株式会社ヘルスケア事業本部）
伊藤　道雄 氏（特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター21）

５．これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先

国際協力機構（JICA）、日本国際協力センター（JICE）、海外産業人材育成協会（HIDA）、日本貿易保険、伊藤忠商事、日本郵船、全日本空輸、日本航空インターナショナル、ANA テレマート、シンガポール航空、エバー航空、東日本旅客鉄道、東海旅客鉄道、JTB 首都圏、三菱 UFJ 銀行、三菱 UFJ 信託銀行、三井住友銀行、みずほフィナンシャルグループ、横浜銀行、信金中央金庫、大和証券、岡三証券、石川島播磨重工業、キヤノン、日産自動車、NEC、日本 IBM、日立製作所、デンソー、ブリヂストン、清水建設、三井物産、大王製紙、中外製薬、船井総合研究所、アビームコンサルティング、日食、国分グループ本社、セブン‐イレブン・ジャパン、LIXIL、北海道新聞社、テレビ信州、コナミデジタルエンタテインメント、KDDI、AIU 高校生国際交流プログラム事務局、日本赤十字社、国家・地方公務員（厚生労働省、会計検査院、県庁、市役所など）、東京大学大学院農学生命科学研究科、東京大学大学院新領域創成科学研究科学科、一橋大学国際・公共政策大学院、一橋大学大学院社会学研究科総合社会学研究科、名古屋大学大学院国際協力研究科、大阪大学大学院高等司法研究科、慶應義塾大学法科大学院、早稲田大学大学院法務研究科、中央大学大学院（経済学研究科、商学研究科、文学研究科、総合政策研究科、公共政策研究科）など

６．演習教育活動

（１）小森谷　徳純（経済学部･准教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｃ

＜テーマ＞

グローバル経済環境における多国籍企業

＜授業の概要＞

本演習では経済学を用いて多国籍企業に関する様々なトピックをみていきます。現在のグローバル経済環境が多国籍企業にどのような変化を促すのか、あるいは多国籍企業が国々にどのような変化をもたらすのかなどがその例です。そして各トピックの中にどのような問題が存在しているのかを考えます。

その上で具体的な課題について研究を進めていくことになりますが、どのようなトピックの、どのような課題に挑戦するかは履修者の問題意識次第です。

どのような問題を考えるにしても何らかのツールが必要であり、本演習では経済学がそれになります。演習 A では考えるためのツールとして経済学（経済学入門、国際経済学）を学びながら、演習 B 以降で本格的な研究を行うために、多国籍企業に関してどのようなトピックがあるのかを知り､研究課題を見つけていきます｡もちろん履修者の熱意と努力があれば、演習 A においても独自の研究に着手することも可能です。

演習 C では、FLP プログラムでの学びの集大成として、多国籍企業に関する具体的な課題について研究（個人研究）を行い、論文を執筆していきます。

＜活動内容＞

本年度は結果的に演習 A の学生 2 名のみの参加となりましたので、考えるためのツールとしての経済学（経済学入門、国際経済学）を学ぶことに注力しました。また今後の研究のために、自分がどのようなトピックに関心があるのかを、学生それぞれが自覚するための機会をできるだけ多く設けました。なお 1 名の海外留学にともない、後期は参加者が 1 名のみとなりましたので、経済学部のゼミと積極的に交流しました。

（2）林　光洋（経済学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

＜授業の概要＞

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学に軸足を置きつつ、しかし研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・衛生・医療、ジェンダー、環境・エネルギー等の社会・環境面へも広げ、学際的に開発問題を扱っていきます。本演習は、1 年単位のゼミではなく、3 年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

(1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
(2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
(3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス
(4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、女性開発（ジェンダー）
(5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
(6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
(7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

＜活動内容＞

2018 年度は、開発経済学（2 冊）、社会開発、フェアトレードの分野のテキストを合計 4 冊使用して学習しました。5 月下旬からの 1 週間、11 月中旬の 1 週間を使い、中央大学（多摩キャンパス）の生協店舗でフェアトレード・フェアを実施したり、11 月上旬の白門祭ではフェアトレードカフェを出店したりして、実践的にフェアトレードについて学習し、中央大学のキャンパスを中心に普及、啓蒙・啓発にも努めました。後期には、4 班に分かれて、『フィリピンにおける交通渋滞緩和のためのインフラ整備 －ITS 技術を用いたアプローチ－』、『アジアの途上国における女子教育の実態と NGOs による問題解決のためのアプローチ －地理的・社会的・経済的要因に焦点を当てて－』、『貧困削減のためのマイクロファイナンス －展望と課題－』、『インドにおけるゴミ問題の現状と解決方法』という 4 編のグループ論文を執筆しました。それら研究の成果を FLP 国際協力プログラム期末成果報告会で発表しました。

下記の通り、外部から専門家を招いて特別授業を実施したり、外部で開催されたセミナー、講演会、ワークショップ等に参加したりして、開発分野の最新情報を吸収し、開発分野のネ

ットワークを形成するように努力しました。活動内容の一部については、最下段に記載したURL もご参照ください。

中央大学生協の店舗で、秋のフェアトレード・フェアを実施

【訪問授業等】

1）訪問授業（自主的に実施）

実　施　期　間：2018 年 10 月～12 月（下記「訪問リスト」を参照）

実　施　場　所：高校 4 校、中学校 4 校、小学校 2 校（下記「訪問リスト」を参照）

実施内容/成果：林ゼミ 4 年生が前年度に実施した海外現地調査（フィリピン）の経験や結果を材料として使用しながら、途上国の基礎的な状況、貧困の特徴、貧困に陥る要因、貧困解決の方法等について「国際協力セミナー」というテーマで高校生に対して参加型の授業/ワークショップを実施。授業時に高校生、中学生、小学生に対して質問票を配布し、開発教育の効果、開発教育で留意すべきこと等についての調査も実施。高校生、中学生、小学生に対する途上国の開発・国際協力の啓発推進や情報提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。さらに、開発教育の効果、開発教育を実施する際に求められていること、注意すべきこと等について学習。2 年生は、再来年度の準備も兼ねて、4 年生のサポート部隊として参加

訪問先リスト

訪問先	日時	対象学年	コマ数
神奈川県立 相模原高校	11月5日 8：35~13：50 11月6日 9：35~15：50	高校3年生	7コマ
中央大学高校	11月12日 14：00~15：50	高校1年生	2コマ
中央大学附属高校	11月14日 14：25~15：25	高校2年生	1コマ
中央大学杉並高校	11月16日 15：50~17：20	高校1~3年生	1コマ （放課後）
中央大学附属中学校	10月2日 8：45~11：35 10月3日 8：45~12：35	中学校1年生	4コマ
中央大学附属 横浜中学校	10月25日 8：45~11：35 10月26日 8：45~10：35	中学2年生	5コマ
品川女子学院 中等部	10月31日 14：30~15：20 11月21日 14：30~15：20	中学1年生	2コマ
稲城市立 稲城第一中学校	11月27日 8：50~15：26	中学2年生	4コマ
あきる野市立 多西小学校	11月26日 8：50~12：20	小学校6年生	3コマ
川崎市立 菅小学校	12月4日 10：45~12：15	小学校5年生	2コマ

2）模擬授業（白門祭期間のミニオープンキャンパス）

実　施　期　間：2018 年 11 月 3 日(土)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　3114 教室

実施内容/成果：林ゼミ 4 年生が前年度に実施した海外現地調査（フィリピン）の経験や結果を材料として用い、特にフィリピンの児童労働に焦点を当てて、ミニオープンキャンパスに参加してくれた高校生やその保護者に対して模擬授業を実施。途上国の児童労働の現状把握や解決策検討の機会提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。2 年生は、再来年度の準備も兼ねて、4 年生のサポート部隊として参加

【特別授業、セミナー、講演会等】

下記の特別授業、セミナー、講演会等を通じて、それぞれの分野について多くを学習

1) 日本の国際協力について学ぶ

実　施　期　間：2018 年 5 月 8 日(火)、11 月 13 日(火)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7202 教室、7102 教室、7709 教室

実施内容/成果：A&M コンサルタントの松本彰さんを招き、a) ベトナムとシエラレオネの経済状況と両国向けの日本の国際協力、b) ラオスの経済成長、行政改革、日本の協力について学習

2) フェアトレードについて学ぶ

実　施　期　間：2018 年 5 月 28 日(月)～6 月 1 日(金)、11 月 1 日(木)～4 日(日)、11 月 12 日(月)～16 日(金)、12 月 13 日(木)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　生協店舗、ペデ下 2 号館前、ヒルトップ 2 階 G スクエア

実施内容/成果：a) 5 月と 11 月の 2 回、中央大学生協の店舗でフェアトレード・フェアを、b) 11 月の白門祭でフェアトレード商品の販売会を、c) 12 月に講演会（Ben & Jerry’s を招いて）を、それぞれ開催し、実践的にフェアトレードを学習すると同時に、学内の学生、教職員にフェアトレードを普及、啓蒙・啓発

3) インドネシア経済の基礎的情報について学ぶ

実　施　期　間：2018 年 6 月 19 日(火)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7709 教室、2 号館研究所会議室 4

実施内容/成果：三菱 UFJ リースインドネシアの土本雅彦さん（林ゼミ OB、2010 年 3 月卒業）を招き、インドネシア経済の基礎について学習

4) サブサハラ・アフリカの農村地域における日本の技術協力プロジェクトについて学ぶ

実　施　期　間：2018 年 7 月 10 日(火)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7202 教室、7709 教室

実施内容/成果：JIN（開発コンサルタント会社）の中西政文さんを招き、北部ウガンダにおける生計向上支援プロジェクトについて学習

5) インドネシアの地域開発について学ぶ

実　施　期　間：2018 年 7 月 17 日(火)

講　　演　　者：松井 和久 氏（松井グローカル合同会社）

演　　題：インドネシアの地域開発：保健・衛生、教育・人的資源開発分野を中心に

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7406 教室

実施内容/成果：松井グローカルの松井和久さん（元アジア経済研究所）を招き、保健・衛生、教育・人的資源開発分野を中心に、インドネシアの地域開発の現状、動向について学習

6) ユニセフの児童労働に対する支援活動について学ぶ

実　施　期　間：2018 年 10 月 25 日(木)～26 日(金)、11 月 2 日(金)、11 月 8 日(木)～9 日(金)

実　施　場　所：多摩センター駅前、中央大学　多摩キャンパス　生協店舗、ヒルトップ2階Gスクエア

実施内容/成果：日本ユニセフ協会と連携して、a）多摩センター駅前での募金活動（10月25、26日）、b）高円承子さんを招いての講演会（外部に公開、白門祭期間中の11月2日）、c）生協店舗での募金活動（11月8、9日）をそれぞれ実施し、途上国の児童労働について学習。集まった10万円の寄付金は児童労働防止、教育分野の寄付に充当

7）国際協力に従事する人材に求められていることについて学ぶ

実　施　期　間：2018年11月20日(火)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　8301教室、7709教室

実施内容/成果：JICA人事部長の戸川正人さんを招き、国際協力にはどのような人材が求められていて、そのような人材になるためにはどのような能力をどのように身に着けていく必要があるのか、SDGs(持続可能な開発目標)を実施していくためにどのような人材が求められているのか等について学習

8）WFP（国連世界食糧計画）の食糧支援、緊急支援、SDGsへの貢献について学ぶ

実　施　期　間：2018年11月27日(火)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　8301教室

実施内容/成果：国連WFP（国連世界食糧計画）の山﨑頼良さんを招き、SDGsとWFPの関係、飢餓、国連WFPの組織と活動、国連/国連WFPで働くために必要なこと、飢餓/SDGsに対して私たちができること等について学習

9）JICAボランティア事業について学ぶ

実　施　期　間：2018年12月11日(火)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　3552教室

実施内容/成果：中央大学経済学部OB/林ゼミOBで青年海外協力隊の隊員として派遣された浅羽政良さんを招き、任地ウガンダでの農業とBOPビジネスに焦点を当てたコミュニティ開発の活動について学習。JICAの平林明日香さんも招き、青年海外協力隊をはじめとするJICAボランティア事業の職種、応募条件、応募方法等の仕組みについて学ぶ

10）教育分野のNGOの活動について学ぶ

実　施　期　間：2018年12月18日(火)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7102教室、7709教室

実施内容/成果：教育分野の国際NGO、AHHA Educationの吉川さやかさんを招き、AHHA Educationの本部があるカンボジアと主要な活動拠点の1つである東ティモールで行なったライフスキル教育について学ぶ

【参考URL】

1）訪問授業を実施

http://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2018/12/78323/

2) フェアトレード・フェアを実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2018/11/9864/
3) ユニセフ関連のイベントを実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2018/11/9913/
4) 特別授業（JICA）を実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2018/12/9969/
5) 特別授業（WFP）を実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/01/10141/
6) JICA ボランティアセミナーを実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2018/12/10024/

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

＜授業の概要＞

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学に軸足を置きつつ、しかし研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・衛生・医療、ジェンダー、環境・エネルギー等の社会・環境面へも広げ、学際的に開発問題を扱っていきます。本演習は、1 年単位のゼミではなく、3 年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

(1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
(2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
(3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス
(4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、女性開発（ジェンダー）
(5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
(6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
(7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

＜活動内容＞

2018 年度は、日本語のテキストとして『経済大国インドネシア：21 世紀の成長条件』（佐藤百合、2011 年)、『なぜ貧しい国はなくならないのか：正しい開発戦略を考える』（大塚啓二郎、2014 年)、『傲慢な援助』（イースタリー, W.、2009 年）を、英語のテキストとして *Protecting Poor and Vulnerable Households in Indonesia*（World Bank、2012 年）を輪読し、知識を獲得するとともに、英語文献・資料の使用に慣れるように努めました。また、林ゼミの中心的イベントであり、ほぼすべてのプロセス・作業を学生が行なう 3 年次の 1 年間の研究プロジェクトも実施しました。前年度末の 2018 年 2 月から本格的にスタートし、研究対象国・テーマを決め、経済学部等の奨学金に応募して資金を確保し、研究計画書を作成し、国内事前調査を行ない、訪問先のアポイントメントをとりつけ、ロジスティクスの手配をし、インドネシアでの海外現地調査（9 月初旬から 2 週間）を実施し、最終的に、2019 年 3 月、英語版および日本語版の本格的な研究論文を完成させました。

このプロジェクトでは、インドネシアの持続開発を全体のテーマに掲げて、1）住民組織による排水マネジメント、2）フランチャイズビジネス、3）小児期の予防接種、4）環境教育の

4 分野で研究を行ないました。外部から専門家を招いて特別授業を実施したり、外部で開催されたセミナー、講演会、ワークショップ等に参加したりして、研究に必要な知識や情報の獲得に努めました。また、現地調査実施後は、さまざまな機会（学生ゼミナール連合関東部会（インナー）討論大会、経済学部プレゼンテーション大会、FLP 国際協力プログラム期末成果報告会、etc.）を利用して研究成果を発表しました。活動内容の一部については、最下段に記載した URL もご参照ください。

UNICEF インドネシア事務所で、担当職員に対して質問する林ゼミ 3 年の学生たち

【海外現地調査】

インドネシア現地調査

実　施　期　間：2018 年 9 月 1 日(土)～15 日(土)

実　施　場　所：ジャカルタおよびその周辺（インドネシア）

実施内容/成果：インドネシアにおける、①「分散型排水処理プログラムである SANIMAS の実施主体の CBOs（住民組織）と他のステークホルダーの間の連携」、②「起業時の課題（資金、経営能力、市場情報）解決におけるフランチャイズビジネスの役割」、③「小児期の予防接種率向上における保護者の認知の役割」、そして④「インドネシアの環境教育プログラム、Adiwiyata Program の課題とステークホルダー間の連携」について研究。それぞれの分野における持続可能な開発に必要なことを学習

【訪問授業等】

1）訪問授業（自主的に実施）

実　施　期　間：2018 年 10 月～12 月（下記「訪問リスト」を参照）

実　施　場　所：高校 4 校、中学校 4 校、小学校 2 校（下記「訪問リスト」を参照）

実施内容/成果：林ゼミ 4 年生が前年度に実施した海外現地調査（フィリピン）の経験や結果を材料として使用しながら、途上国の基礎的な状況、貧困の特徴、貧困に陥る要因、貧困解決の方法等について「国際協力セミナー」というテーマで高校生に対して参加型の授業/ワークショップを実施。授業時に高校生、中学生、小学生に対して質問票を配布し、開発教育の効果、開発教育で留意すべきこと等についての調査も実施。高校生、中学生、小学生に対する途上国の開発・国際協力の啓発推進や情報提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。さらに、開発教育の効果、開発教育を実施する際に求められていること、注意すべきこと等について学習。3 年生は、次年度の準備も兼ねて、4 年生のサポート部隊として参加

訪問先リスト

訪問先	日時	対象学年	コマ数
神奈川県立 相模原高校	11月5日 8：35~13：50 11月6日 9：35~15：50	高校3年生	7コマ
中央大学高校	11月12日 14：00~15：50	高校1年生	2コマ
中央大学附属高校	11月14日 14：25~15：25	高校2年生	1コマ
中央大学杉並高校	11月16日 15：50~17：20	高校1~3年生	1コマ （放課後）
中央大学附属中学校	10月2日 8：45~11：35 10月3日 8：45~12：35	中学校1年生	4コマ
中央大学附属 横浜中学校	10月25日 8：45~11：35 10月26日 8：45~10：35	中学2年生	5コマ
品川女子学院 中等部	10月31日 14：30~15：20 11月21日 14：30~15：20	中学1年生	2コマ
稲城市立 稲城第一中学校	11月27日 8：50~15：26	中学2年生	4コマ
あきる野市立 多西小学校	11月26日 8：50~12：20	小学校6年生	3コマ
川崎市立 菅小学校	12月4日 10：45~12：15	小学校5年生	2コマ

2）模擬授業（白門祭期間のミニオープンキャンパス）

実　施　期　間：2018 年 11 月 3 日(土)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　3114 教室

実施内容/成果：林ゼミ 4 年生が前年度に実施した海外現地調査（フィリピン）の経験や結果を材料として用い、特にフィリピンの児童労働に焦点を当てて、ミニオープンキャンパスに参加してくれた高校生やその保護者に対して模擬授業を実施。途上国の児童労働の現状把握や解決策検討の機会提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。3 年生は、次年度の準備も兼ねて、4 年生のサポート部隊として参加

3）インドネシア国立ランポン大学学生の受け入れ、合同授業

実　施　期　間：2018 年 4 月 24 日(火)～26 日(木)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7303 教室、7406 教室、ヒルトップ 2 階 G スクエア等

実施内容/成果：インドネシア国立ランポン大学から中央大学に研修に来た 13 人の大学院生（同行の教員 1 人）の受け入れ、フルアテンド。林ゼミの 4 つのグループがそれぞれインドネシア研究プロジェクトの研究計画を報告し、その後、ランポン大学の学生との間で Q&A。日本の文化・食事（習字、射的、輪投げ、たこ焼き、etc.）の体験機会を提供。ランポン大学の大学院生（および教員）から、ゼミの学生たちは、インドネシアや研究プロジェクトに関連した多くの情報、ヒント、助言等を獲得

【特別授業、セミナー、講演会等】

下記の特別授業、セミナー、講演会等を通じて、それぞれの分野について多くを学習

1）途上国での現地調査の実施手法について学ぶ

実　施　期　間：2018 年度前期毎週木曜日（合計 12 回）

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7303 教室

実施内容/成果：途上国での現地調査の豊富な実践経験を有する専門家、社会開発国際調査研究センターの山田恭稔先生を招き、現地調査を含む開発分野の研究を行なう際、具体的に、準備をどのように行ない、現場で現地調査をどのように実施し、得られた結果をどのように論文としてまとめていったらいいのか、といったことについて学習

2）日本の国際協力について学ぶ

実　施　期　間：2018 年 5 月 8 日(火)、11 月 13 日(火)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7202 教室、7102 教室、7709 教室

実施内容/成果：A&M コンサルタントの松本彰さんを招き、a）ベトナムとシエラレオネの経済状況と両国向けの日本の国際協力、b）ラオスの経済成長、行政改革、日本の協力について学習

3）フェアトレードについて学ぶ

実　施　期　間：2018 年 5 月 28 日(月)～6 月 1 日(金)、11 月 1 日(木)～4 日(日)、11 月 12 日(月)～16 日(金)、12 月 13 日(木)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　生協店舗、ペデ下 2 号館前、ヒルトップ 2 階 G スクエア

実施内容/成果：a）5 月と 11 月の 2 回、中央大学生協の店舗でフェアトレード・フェアを、b）11 月の白門祭でフェアトレード商品の販売会を、c）12 月に講演会（Ben & Jerry’s を招いて）を、それぞれ開催し、実践的にフェアトレードを学習すると同時に、学内の学生、教職員にフェアトレードを普及、啓蒙・啓発

4）インドネシア経済の基礎的情報について学ぶ

実　施　期　間：2018 年 6 月 19 日(火)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7709 教室、2 号館研究所会議室 4

実施内容/成果：三菱 UFJ リースインドネシアの土本雅彦さん（林ゼミ OB、2010 年 3 月卒業）を招き、インドネシア経済の基礎について学習

5）サブサハラ・アフリカの農村地域における日本の技術協力プロジェクトについて学ぶ

実　施　期　間：2018 年 7 月 10 日(火)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7202 教室、7709 教室

実施内容/成果：JIN（開発コンサルタント会社）の中西政文さんを招き、北部ウガンダにおける生計向上支援プロジェクトについて学習

6）インドネシアの地域開発について学ぶ

実　施　期　間：2018 年 7 月 17 日(火)

講　　演　　者：松井 和久 氏（松井グローカル合同会社）

演　　題：インドネシアの地域開発：保健・衛生、教育・人的資源開発分野を中心に

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7406 教室

実施内容/成果：松井グローカルの松井和久さん（元アジア経済研究所）を招き、保健・衛生、教育・人的資源開発分野を中心に、インドネシアの地域開発の現状、動向について学習

7）ユニセフの児童労働に対する支援活動について学ぶ

実　施　期　間：2018 年 10 月 25 日(木)～26 日(金)、11 月 2 日(金)、11 月 8 日(木)～9 日(金)

実　施　場　所：多摩センター駅前、中央大学　多摩キャンパス　生協店舗、ヒルトップ 2 階 G スクエア

実施内容/成果：日本ユニセフ協会と連携して、a）多摩センター駅前での募金活動（10 月 25、26 日）、b）高円承子さんを招いての講演会（外部に公開、白門祭期間中の 11 月 2 日）、c）生協店舗での募金活動（11 月 8、9 日）をそれぞれ実施し、途上国の児童労働について学習。集まった 10 万円の寄付金は児童労働防止、教育分野の寄付に充当

8）国際協力に従事する人材に求められていることについて学ぶ

実　施　期　間：2018 年 11 月 20 日(火)
実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　8301 教室、7709 教室
実施内容/成果：JICA 人事部長の戸川正人さんを招き、国際協力にはどのような人材が求められていて、そのような人材になるためにはどのような能力をどのように身に着けていく必要があるのか、SDGs(持続可能な開発目標)を実施していくためにどのような人材が求められているのか等について学習

9）WFP（国連世界食糧計画）の食糧支援、緊急支援、SDGs への貢献について学ぶ
実　施　期　間：2018 年 11 月 27 日(火)
実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　8301 教室
実施内容/成果：国連 WFP（国連世界食糧計画）の山﨑頼良さんを招き、SDGs と WFP の関係、飢餓、国連 WFP の組織と活動、国連/国連 WFP で働くために必要なこと、飢餓/SDGs に対して私たちができること等について学習

10）JICA ボランティア事業について学ぶ
実　施　期　間：2018 年 12 月 11 日(火)
実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　3552 教室
実施内容/成果：中央大学経済学部 OB/林ゼミ OB で青年海外協力隊の隊員として派遣された浅羽政良さんを招き、任地ウガンダでの農業と BOP ビジネスに焦点を当てたコミュニティ開発の活動について学習。JICA の平林明日香さんも招き、青年海外協力隊をはじめとする JICA ボランティア事業の職種、応募条件、応募方法等の仕組みについて学ぶ

11）教育分野の NGO の活動について学ぶ
実　施　期　間：2018 年 12 月 18 日(火)
実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7102 教室、7709 教室
実施内容/成果：教育分野の国際 NGO、AHHA Education の吉川さやかさんを招き、AHHA Education の本部があるカンボジアと主要な活動拠点の 1 つである東ティモールで行なったライフスキル教育について学ぶ

12）インドネシアの環境教育について学ぶ
実　施　期　間：2019 年 1 月 19 日(土)
実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　2 号館 4 階会議室
実施内容/成果：青年海外協力隊の隊員として派遣された山口麗子さんを招き、任地インドネシアでの環境教育分野の活動について学ぶ

【その他】
下記の活動等を通じて、それぞれに関連する知識や情報を獲得

1）マイクロフランチャイズについて学ぶ
実　　施　　日：2018 年 8 月 14 日(火)
実　施　都　市：東京都港区

実　施　場　所：株式会社 DSM
実施内容/成果：株式会社 DSM を訪ね、同社が東南アジア地域で実施しているマイクロフランチャイズのフランチャイジーへの支援制度について学習

2) マイクロフランチャイズについて学ぶ
実　　施　　日：2018 年 8 月 22 日(水)
実　施　都　市：神奈川県川崎市
実　施　場　所：専修大学　生田キャンパス
実施内容/成果：専修大学商学部の小林守教授を訪ね、東南アジア地域の実施されているマイクロフランチャイズビジネスについて学習

3) インドネシアの持続可能な開発について学ぶ
実　　施　　日：2018 年 9 月 1 日(土)～15 日(土)
実　施　都　市：ジャカルタおよびその周辺（インドネシア）
実施内容/成果：①排水マネジメント班、②フランチャイズビジネス班、③保健班、④環境環境班の 4 班に分かれて現地調査を実施。排水マネジメント班は公共事業省、JICA、CBOs（住民組織）、NGOs、フランチャイズビジネス班はフランチャイズビジネスを行なうフランチャイザーおよびフランチャイジー、保健班は UNICEF、保健省、インドネシア大学、地域保健センター、環境教育班は環境林業省、地方政府、NGOs を訪問し、インタビュー・アンケート調査を実施。各班が設定した仮説の検証のために必要な情報を収集。文献調査では知ることのできなかったインドネシアの状況について学習

4) インドネシアの経済発展と地場企業の現状
実　　施　　日：2018 年 9 月 2 日(日)
講　　演　　者：土本　雅彦 氏（三菱 UFJ リースインドネシア）
演　　題：インドネシアの経済発展と地場企業の現状
実　施　都　市：ジャカルタ（インドネシア）
実　施　場　所：All Seasons Jakarta Thamrin
実施内容/成果：インドネシアおよびジャカルタの経済発展、直近の景気、ジャカルタのインフラ、地場企業、都市農村間の格差等について講演してもらい、インドネシアでビジネスに従事している人から同国の経済の概況を学習

【参考 URL】
1) 訪問授業を実施
http://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2018/12/78323/
2) ランポン大学を受け入れ
http://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2018/05/69655/
3) フェアトレード・フェアを実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2018/11/9864/

4) ユニセフ関連のイベントを実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2018/11/9913/
5) 特別授業（JICA）を実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2018/12/9969/
6) 特別授業（WFP）を実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/01/10141/
7) JICA ボランティアセミナーを実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2018/12/10024/

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

＜授業の概要＞

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学に軸足を置きつつ、しかし研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・衛生・医療、ジェンダー、環境・エネルギー等の社会・環境面へも広げ、学際的に開発問題を扱っていきます。本演習は、1 年単位のゼミではなく、3 年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

(1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
(2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
(3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス
(4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、女性開発（ジェンダー）
(5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
(6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
(7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

＜活動内容＞

2018 年度は、特に卒業論文の完成に向けて、研究計画書作りと幾度にもわたる論文の中間報告に時間を割きました。メンバー全員が卒業（修了）論文を書きあげました。卒業論文の作成に加えて、下記のように、外部から専門家を招いて特別授業を実施したり、外部で開催されたセミナー、講演会、ワークショップ等に参加したりして、研究に必要な知識や情報の獲得に努めました。

本年度は、下記の通り、2018 年 10 月から 12 月にかけて、高校 4 校、中学校 4 校、小学校 2 校に対して訪問授業を自主的に実施し、ゼミ学生がこれまで学んだり、経験したりした開発、国際協力関連のことをより若い世代に伝えるとともに、学生自身の知識の整理を行ないました。また、2018 年 8 月のオープンキャンパスにおいて、大学側からの要請に応え、2019 年度に新設予定の国際経営学部用模擬授業を英語で実施しました。加えて、前年までと同様、日本ユニセフ協会と連携して、講演会、募金活動を企画し、10 月から 11 月にかけて実施しました。

前年度までの活動で得た知識・経験、本年度の活動の結果は、訪問授業、オープンキャン

パスの模擬授業、FLP 国際協力プログラム期末成果報告会等を利用して発表しました。活動内容の一部については、最下段に記載した URL もご参照ください。

中央大学附属中学校で訪問授業を実施

【訪問授業等】

1）訪問授業（自主的に実施）

実　施　期　間：2018 年 10 月～12 月（下記「訪問リスト」を参照）

実　施　場　所：高校 4 校、中学校 4 校、小学校 2 校（下記「訪問リスト」を参照）

実施内容/成果：林ゼミ 4 年生が前年度に実施した海外現地調査（フィリピン）の経験や結果を材料として使用しながら、途上国の基礎的な状況、貧困の特徴、貧困に陥る要因、貧困解決の方法等について「国際協力セミナー」というテーマで高校生に対して参加型の授業/ワークショップを実施。授業時に高校生、中学生、小学生に対して質問票を配布し、開発教育の効果、開発教育で留意すべきこと等についての調査も実施。高校生、中学生、小学生に対する途上国の開発・国際協力の啓発推進や情報提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。さらに、開発教育の効果、開発教育を実施する際に求められていること、注意すべきこと等について学習

訪問先リスト

訪問先	日時	対象学年	コマ数
神奈川県立 相模原高校	11月5日 8：35~13：50 11月6日 9：35~15：50	高校3年生	7コマ
中央大学高校	11月12日 14：00~15：50	高校1年生	2コマ
中央大学附属高校	11月14日 14：25~15：25	高校2年生	1コマ
中央大学杉並高校	11月16日 15：50~17：20	高校1~3年生	1コマ （放課後）
中央大学附属中学校	10月2日 8：45~11：35 10月3日 8：45~12：35	中学校1年生	4コマ
中央大学附属 横浜中学校	10月25日 8：45~11：35 10月26日 8：45~10：35	中学2年生	5コマ
品川女子学院 中等部	10月31日 14：30~15：20 11月21日 14：30~15：20	中学1年生	2コマ
稲城市立 稲城第一中学校	11月27日 8：50~15：26	中学2年生	4コマ
あきる野市立 多西小学校	11月26日 8：50~12：20	小学校6年生	3コマ
川崎市立 菅小学校	12月4日 10：45~12：15	小学校5年生	2コマ

2）英語による模擬授業（オープンキャンパス）

実　施　期　間：2018 年 8 月 5 日(日)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　8308 教室

実施内容/成果：林ゼミ 4 年生が前年度に実施した海外現地調査（フィリピン）の経験や結果を中心に、ゼミでどのようなアカデミックな活動を行なっているのかについてすべて英語で説明。オープンキャンパスに参加してくれた高校生やその保護者に対して、多くの授業が英語で行なわれる国際経営学部 (2019 年度開設) のイメージを提供。ゼミ学生にとっては、知識の整理、英語での情報の伝えかたを学習

3）模擬授業（白門祭期間のミニオープンキャンパス）

実　施　期　間：2018 年 11 月 3 日(土)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　3114 教室

実施内容/成果：林ゼミ 4 年生が前年度に実施した海外現地調査（フィリピン）の経験や結果を材料として用い、特にフィリピンの児童労働に焦点を当てて、ミニオープンキャンパスに参加してくれた高校生やその保護者に対して模擬授業を実施。途上国の児童労働の現状把握や解決策検討の機会提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習

【特別授業、セミナー、講演会等】

下記の特別授業、セミナー、講演会等を通じて、それぞれの分野について多くを学習

1）日本の国際協力について学ぶ

実　施　期　間：2018 年 5 月 8 日(火)、11 月 13 日(火)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7202 教室、7102 教室、7709 教室

実施内容/成果：A&M コンサルタントの松本彰さんを招き、a）ベトナムとシエラレオネの経済状況と両国向けの日本の国際協力、b）ラオスの経済成長、行政改革、日本の協力について学習

2）フェアトレードについて学ぶ

実　施　期　間：2018 年 5 月 28 日(月)～6 月 1 日(金)、11 月 1 日(木)～4 日(日)、11 月 12 日(月)～16 日(金)、12 月 13 日(木)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　生協店舗、ペデ下 2 号館前、ヒルトップ 2 階 G スクエア

実施内容/成果：a）5 月と 11 月の 2 回、中央大学生協の店舗でフェアトレード・フェアを、b）11 月の白門祭でフェアトレード商品の販売会を、c）12 月に講演会（Ben & Jerry’s を招いて）を、それぞれ開催し、実践的にフェアトレードを学習すると同時に、学内の学生、教職員にフェアトレードを普及、啓蒙・啓発

3）インドネシア経済の基礎的情報について学ぶ

実　施　期　間：2018 年 6 月 19 日(火)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7709 教室、2 号館研究所会議室 4

実施内容/成果：三菱 UFJ リースインドネシアの土本雅彦さん（林ゼミ OB、2010 年 3 月卒業）を招き、インドネシア経済の基礎について学習

4）サブサハラ・アフリカの農村地域における日本の技術協力プロジェクトについて学ぶ

実　施　期　間：2018 年 7 月 10 日(火)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7202 教室、7709 教室

実施内容/成果：JIN（開発コンサルタント会社）の中西政文さんを招き、北部ウガンダにおける生計向上支援プロジェクトについて学習

5）インドネシアの地域開発について学ぶ

実　施　期　間：2018 年 7 月 17 日(火)

講　　演　　者：松井 和久 氏（松井グローカル合同会社）

演　　題：インドネシアの地域開発：保健・衛生、教育・人的資源開発分野を中

心に

実 施 場 所：中央大学　多摩キャンパス　7406 教室

実施内容/成果：松井グローカルの松井和久さん（元アジア経済研究所）を招き、保健・衛生、教育・人的資源開発分野を中心に、インドネシアの地域開発の現状、動向について学習

6）ユニセフの児童労働に対する支援活動について学ぶ

実 施 期 間：2018 年 10 月 25 日(木)～26 日(金)、11 月 2 日(金)、11 月 8 日(木)～9 日(金)

実 施 場 所：多摩センター駅前、中央大学　多摩キャンパス　生協店舗、ヒルトップ 2 階 G スクエア

実施内容/成果：日本ユニセフ協会と連携して、a）多摩センター駅前での募金活動（10 月 25、26 日）、b）高円承子さんを招いての講演会（外部に公開、白門祭期間中の 11 月 2 日）、c）生協店舗での募金活動（11 月 8、9 日）をそれぞれ実施し、途上国の児童労働について学習。集まった 10 万円の寄付金は児童労働防止、教育分野の寄付に充当

7）国際協力に従事する人材に求められていることについて学ぶ

実 施 期 間：2018 年 11 月 20 日(火)

実 施 場 所：中央大学　多摩キャンパス　8301 教室、7709 教室

実施内容/成果：JICA 人事部長の戸川正人さんを招き、国際協力にはどのような人材が求められていて、そのような人材になるためにはどのような能力をどのように身に着けていく必要があるのか、SDGs（持続可能な開発目標）を実施していくためにどのような人材が求められているのか等について学習

8）WFP（国連世界食糧計画）の食糧支援、緊急支援、SDGs への貢献について学ぶ

実 施 期 間：2018 年 11 月 27 日(火)

実 施 場 所：中央大学　多摩キャンパス　8301 教室

実施内容/成果：国連 WFP（国連世界食糧計画）の山﨑頼良さんを招き、SDGs と WFP の関係、飢餓、国連 WFP の組織と活動、国連/国連 WFP で働くために必要なこと、飢餓/SDGs に対して私たちができること等について学習

9）JICA ボランティア事業について学ぶ

実 施 期 間：2018 年 12 月 11 日(火)

実 施 場 所：中央大学　多摩キャンパス　3552 教室

実施内容/成果：中央大学経済学部 OB/林ゼミ OB で青年海外協力隊の隊員として派遣された浅羽政良さんを招き、任地ウガンダでの農業と BOP ビジネスに焦点を当てたコミュニティ開発の活動について学習。JICA の平林明日香さんも招き、青年海外協力隊をはじめとする JICA ボランティア事業の職種、応募条件、応募方法等の仕組みについて学ぶ

10）教育分野の NGO の活動について学ぶ

実 施 期 間：2018 年 12 月 18 日(火)

実　施　場　所：中央大学　多摩キャンパス　7102 教室、7709 教室
実施内容/成果：教育分野の国際 NGO、AHHA Education の吉川さやかさんを招き、AHHA Education の本部があるカンボジアと主要な活動拠点の 1 つである東ティモールで行なったライフスキル教育について学ぶ

【その他】
下記の活動等を通じて、それぞれに関連する知識や情報を獲得

1）マイクロファイナンスについて学ぶ
実　　施　　日：2018 年 4 月 2 日(月)
実　施　都　市：東京都文京区
実　施　場　所：特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター21
実施内容/成果：アジア・コミュニティ・センター21 を訪ね、前年度実施したマイクロファイナンスの研究に関連してフォローアップ調査を実施し、同分野の追加的情報、知識を獲得
2）日本の農村開発について学ぶ
実　　施　　日：2018 年 9 月 10 日(月)～13 日(木)
実　施　都　市：宮城県伊具郡
実　施　場　所：耕野まちづくりセンター・他
実施内容/成果：宮城県伊具郡の耕野まちづくりセンター等を訪ね、日本の農村開発の経験、手法を学び、途上国への移転の可能性を検討

【参考 URL】
1）訪問授業を実施
http://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2018/12/78323/
2）フェアトレード・フェアを実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2018/11/9864/
3）ユニセフ関連のイベントを実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2018/11/9913/
4）特別授業（JICA）を実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2018/12/9969/
5）特別授業（WFP）を実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/01/10141/
6）JICA ボランティアセミナーを実施
http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2018/12/10024/

（3）清水　武則（商学部・特任教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

モンゴルにおける観光産業発展の可能性（現地貢献型ゼミ）

＜授業の概要＞

本ゼミは途上国支援の実務経験を有する中大 OB で在モンゴル大使を務めた教員の指導の下に、開発途上国の具体的課題と解決方法を探求するもの。ゼミ員は、モンゴル等アジアの開発途上国の情報収集をネット等で行いモンゴル観光開発の現状と課題を分析する。また、卓上調査に加え、本ゼミでは、モンゴルにおける現地調査を実施する。モンゴル政府関係者やモンゴル国立大学などに対して調査結果を披露し学習の成果を共有することを目標にする。加えて、開発途上国で活躍する先輩 OB、OG、有名商社や金融、国際旅行で活躍する社会人や大使館員との面談や交流を行ったりしながら､その過程で学生のリサーチ力､対人関係能力、分析力、論理構成能力、プレゼンテーション能力を鍛え国際人として活躍する基礎を養成する。

＜活動内容＞

前期は、モンゴルについての講義、観光に関する基礎リサーチの発表（Visit Japan キャンペーン、アジア諸国の観光政策、専門家訪問等)、後期は、9 月のモンゴルでの現場調査に基づく調査結果の報告、ディスカッション、報告書の取りまとめを中心に活動した。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A
実 施 日：2018 年 7 月 3 日(火)
講 演 者：松村　みか 氏（開発コンサルタント・作家）
演　　題：二足のわらじ旅日記（開発コンサルタントと小説家の生活）
実施施設：中央大学　多摩キャンパス　5712 教室
実施内容：モンゴルの開発調査に従事し小説も出版した第一回城山三郎経済小説賞受賞者（中大 OG）から、モンゴルや自身の体験談を語っていただいた。
成　　果：女性の生き方の一つの選択肢を具体的に聴取でき参考になった。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 7 月 5 日(木)
実施都市：東京都千代田区
実施場所：株式会社ワールド航空サービス・株式会社たびりずむ
実施内容：日本旅行業協会（JATA）前会長と、新興の旅行会社の職員から、モンゴルを含めアウトバウンドの観光振興にどのようなアプローチをとっているかを直接聴取できた。
成　　果：両社とも戦略的な営業を行っていて、学生の旅行会社に対するイメージも大き

く変わった。旅行産業の社会的役割につき学んだ。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 9 月 4 日(火)～9 月 18 日(火)
実施都市：ウランバートル・カラコルム（モンゴル）
実施場所：モンゴル自然環境観光省・外務省・モンゴル国立大学・他
実施内容：①前期の調査結果を踏まえ、ゼミ員がモンゴル外務省で開催された日本モンゴルホラルダイ（国際会議)、モンゴル国立大学日本語学科、新モンゴル高校（日本への国費留学生数第一位）で発表した。②ヒアリングと調査結果の意見交換をモンゴル航空、政府観光省、ウランバートル観光省、外務省、国家統計局などを訪問し実施した。③世界遺産にも該当するカラコルム地域の突厥碑文などの現場視察を実施した。④モンゴルの有力旅行会社 2 社と HIS を訪問し旅行会社の視点を聴取した。⑤モンゴルに駐在する日本企業（三菱商事、KDDI）や JICA 調整員等との懇談の機会を設けた。⑥ホームステイを通じてモンゴル人との交流の機会も設けた。
成　　果：①ゼミ員はモンゴルにおける発表の準備過程や実際の発表を経て、プレゼンテーション能力と度胸がつき、精神面でも強くなった。外務省での発表については、現地紙やネットサイトでも取り上げられ中央大学の名前が初めてモンゴルマスコミにとりあげられた。②現場視察や多くの人々との意見交換や交流を経て、モンゴルに対する理解や関心が飛躍的に高められた。③政府関係者からは観光に関する政策や統計など貴重なデータが入手でき、また、最終報告書の提供を求められた。④日本企業や現地で活躍する日本人関係者との交流により海外における日本企業の活動振りを理解できた。

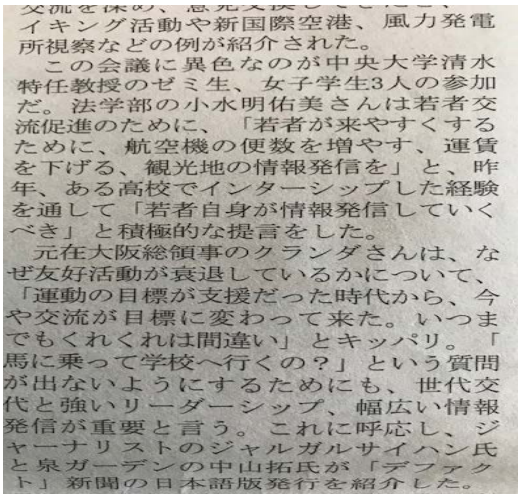
（参考：現地紙報道）
2018 年 9 月 13 日付モンゴル国営モンゴル通信日本語版のゼミ員に関する部分（抜粋）

モンゴル・日本友好諸団体、第2回クリルタイ開催
大切なのは時代のニーズ、若者の参加と情報発信の強化を

10日、モンゴル外務省においてモンゴル・日本関係促進協会（フレルバータル会長）主催による、両国の友好諸団体が一堂に集い、「友好運動のこれまでと今後」をテーマに話し合う、「第2回クリルタイ（大会議）」を開催した。1999年に第1回クリルタイを開催して以来、実に19年ぶりの集いだ。モンゴルからは主催者D.ソドノム名誉会長以下、来賓、各友好諸団体などの30名。日本からは日本・モンゴル親善協会：柳澤徳次会長、公益社団法人日本・モンゴル協会：窪田新一理事長、日本・モンゴル「虹の会」：藤本幹子会長、中央大学：清水武則前駐モンゴル日本国特命全権大使など10の友好諸団体と8の国際機関の代表、及び河内志郎モンゴル文化大使、HSP宇佐美博幸代表らが参加した。

ソソフバラム俳優・演出家の司会進行で、冒頭に高岡正人駐モンゴル日本国特命全権大使が、日本の自然災害に対するモンゴル国民の支援に謝意を表した後、①ビジネス②観光③教育の3分野に着目し、モンゴルの優秀な人材による発展と、人と人との交流に今後の期待を寄せた。次にモンゴル・日本議員連盟ボルド副会長が友好運動の歴史を4期に区分し、国交樹立後の急速な友好進展から現在の活動減速に言及し、会員に若者を入れる、政府の支援、ハルハ河80周年関係国の協力、モ・日の情報交換、民間交流促進の方策など具体的な提案を示した。

2頁に続く



交流を深め、意見交換をした。
イキング活動や新国際空港、風力発電所視察などの例が紹介された。
この会議に異色なのが中央大学清水特任教授のゼミ生、女子学生3人の参加だ。法学部の小水明佑美さんは若者交流促進のために、「若者が来やすくするために、航空機の便数を増やす、運賃を下げる、観光地の情報発信を」と、昨年、ある高校でインターンシップした経験を通して「若者自身が情報発信していくべき」と積極的な提言をした。
元在大阪総領事のクランダさんは、なぜ友好活動が衰退しているかについて、「運動の目標が支援だった時代から、今や交流が目標に変わって来た。いつまでもくれくれは間違い」とキッパリ。「馬に乗って学校へ行くの？」という質問が出ないようにするためにも、世代交代と強いリーダーシップ、幅広い情報発信が重要と言う。これに呼応し、ジャーナリストのジャルガルサイハン氏と泉ガーデンの中山拓氏が「デファクト」新聞の日本語版発行を紹介した。

2018 年 9 月 30 日付インターネットニュースサイト gogo.mn の記事を大阪外大生が日本語で発信（抜粋）

（モンゴル語版サイトでは、2019 年 2 月 7 日現在、2,465 人が“いいね”を押してくれた。）

清水武則氏:モンゴルへの日本人観光客が減っているのは、飛行機の値段が上がっていることと関連している

2018年09月25日　観光 清水武則 モンゴル研究 モンゴル

9月の記事投稿がここに来て多くなりました。
昨日FACEBOOKを見ていると、日本について詳しいモンゴル人の数人が、日本に関するモンゴルのニュースをシェアしていたので、これは訳さないといけないと思い訳すことにしました。
この清水武則という方は2011年から2016年まで在モンゴル大使館の特命全権大使をされていたそうです。すごい人です。最近モンゴルで活躍する日本人を見つける機会が増えましたが、本当にどの方も素晴らしく、到底自分は足元にも及ばないということを痛感させられます。しかし次世代のモンゴルと日本を繋げる日本人になるため、日々努力をしないといけないなと、改めて思わされます。頑張ります。画像はすべて元の記事から引用したものです。
Өнгидэр фэйсбоок дээр Японы тухай сайн мэдэх байгаа монголчууд энэ хүүдэсыг share хийж байгаад би японоороо орчуулаад дахиад бичнэ. Энд хуулсан зураг энэ вэб сайтаас татсан юм.

日本からモンゴルで特命全権大使として働かれていた清水武則氏は、退官されてからもモンゴル人にとって必要な仕事をされていました。

清水氏は日本の中央大学で国際関係論だけでなく、モンゴルの歴史や文化、政治、モンゴルの経済発展といった分野で教鞭をとり、学生と共に「モンゴルの経済発展：モンゴルにおける観光の発展」という課題について研究をされています。我々は彼とその学生と共に、観光という

一清水さんと来られた学生たちはモンゴルに来て、どれだけ満足しているか聞いていただけませんか。若者の目には何が映るのでしょう

研究で清水氏とやってきた中央大学中国語学科の学生 西尾くるみ氏と共に

私の隣に座っている彼女は中央大学中国語学科で学ぶ西野くるみです。最終的に彼女はグルを気に入ったようです。彼女がグルという言葉を使ったことに私は驚きました。なぜなら私が若いころは「グル」を「パオ」と言っていたからです。しかし今日の日本の若者は「グル」と直接言っているのです。

（4）武石　智香子（商学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

日本文化紹介英語プレゼンおよび近代社会の共通課題（サステナビリティ）

＜授業の概要＞

武石ゼミにおける「国際協力」の定義である「地球規模課題（SDGs）に対して、国境を越えて持続可能な協力をし、持続可能な解決に取り組むこと。」をアメリカの大学生とともに考えるため、A 生は国外実態調査としてボストンに赴き、下記の 5 つの課題を達成した。

課題 1　日本が世界の環境・社会の持続可能性（サステナビリティ）について貢献できることについて、ボストン地域にある大学で英語によるプレゼンを行う。
課題 2　ボストンの大学生と、文化・文明理解に資するディスカッションを行う。
課題 3　ボストンの大学生と討論ができるように、社会科学の古典を読んで準備をする。
課題 4　ボストン地域にある大学の学生と 1 対 1 のペアを組み SDGs プロジェクトを実施。
課題 5　各自英語で Term Paper を書き、実態調査報告書を整える。

＜活動内容＞

FLP 演習武石ゼミ A 生は、秋学期に上記課題 1～3 を達成するため、春学期から準備を行った。ボストン実態調査後は課題 4 を実施、Term Paper として成果を英語でまとめて学生報告書を作成した。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

実 施 日：2018 年 10 月 28 日(日)～11 月 4 日(日)
実施都市：ボストン（アメリカ）
実施内容：下記のとおり

・10/29(月)　昼：Brandeis 大学 キャンパスツアー
14:00-14:50　ペアリングプロジェクト
16:00　プレゼン（Environment, Education)、学生交流会
夜：ゼミ（ダグラス）

Brandeis 大学の学生たちと

Brandeis 大学でのプレゼンを終えて

・10/30(火)　午前中：勉強
　　15:30-18:15　Boston 大学 Equality 班発表

Boston 大学授業 1 日目

・10/31(水)　10:00-11:00　Harvard 大学@ウィリアムジェームズホール
　　14:30-17:15　Boston 大学 社会学

Harvard 大学でダグラスについて討論

Boston 大学授業 2 日目

・11/1(木)　午前：MIT 見学
・11/2(金)　13:30　Brandeis 大学の学生とボストン市内で合流
　　20:00-21:00　Brandeis 生の案内でボストンシンフォニー見学
　　ハイドン、マーラーのコンサート

10/31　Harvard 大学から Boston 大学へ移動中に Boston Red Sox 優勝パレードに遭遇

シンフォニーの舞台裏に興味津々

成　　果：上記の機会から各学生が学び取った成果については、英語の Term Paper として学生報告書にまとめられた。

実 施 日：2019 年 1 月 17 日(木)
講 演 者：エアーズ　由希子 氏（書道家・武道家）
演　　題：ロンドンから見た日本と異文化理解について
実施施設：中央大学　多摩キャンパス　5601 教室
実施内容：ロンドンで書道家・武道家として日本文化を紹介している活動について
成　　果：依頼内容の演題テーマ以外にも、ロンドンでの日本のニュースでは把握できない Brexit への人々の反応などについて話が及び、ご準備頂いたプレゼンを離れて活発な双方向コミュニケーションが行われた。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

Diversity and Decision Making

＜授業の概要＞

地球規模課題の解決には、異なる文化的・社会的背景を持つ人々の間での意思決定が成立することが不可欠である。A 生において国内の問題であっても意思決定が非常に難しいことを学んだ、その問題意識を土台にして、2018 年度の B 生のテーマを日本の外国人労働者受入と海外における移民受入政策と定め、オーストラリアで実態調査を行った。

課題 1（春学期）テーマを定め、移民受入問題について日本語・英語文献を読み、国内における見学調査を実施。
課題 2（9 月中旬）オーストラリアにて国外実態調査を実施。
課題 3（秋学期）英語論文（Term Paper）を提出。

＜活動内容＞

FLP 演習武石ゼミ B 生は、春学期の前半で今年度のテーマと調査について議論を重ね、日本の外国人労働者受入について学ぶために神奈川県横浜市泉区のいちょう団地と海外における移民受入政策について学ぶためにオーストラリアで調査を行うことを決めた。文献調査、見学調査、実態調査等の活動からの自らの学びの成果について各自 Term Paper として英語でまとめ、報告書とした。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

実 施 日：2018 年 7 月 22 日(日)
実施都市：神奈川県横浜市
実施場所：いちょう団地
実施内容：外国出身者の多い自治会のあり方についてヒアリング
成　　果：地域内の小学校ではすでに外国出身者が半数を越えているいちょう団地において、長年自治会を中心として進めてきた共生のための活動について、自治会長・副会長のヒアリングを行った。

実 施 日：2018 年 9 月 1 日(土)～9 月 7 日(金)
実施都市：メルボルン・シドニー（オーストラリア）
実施場所：メルボルン大学・他
実施内容：移民との共生に関わる組織への訪問および大学生との討論
成　　果：移民・難民が直面する困難をサポートする機関や日本人学校は、学生自ら発見・アポ取りを行い、見学調査やヒアリング調査を行った。メルボルンとシドニーで大学生と交流をして「多文化社会」について発表、意見交換を行った。

9 月 1 日に日本を出発し、2 日にオーストラリアに入国した。メルボルン初日の 9 月 2 日(日)の午後はメルボルン移民博物館を見学、夜は「食」を通して難民をサポートするため無償で食事を提供している Long Street Coffee を見学しつつ、夕食をとった。

9 月 3 日は、inTouch を訪問してヒアリング調査、午後はメルボルン大学にてプレゼンと学生交流会を実施した。

<<<

InTouch CEO Michal Morris 氏とインタービュー後に撮影した写真。

ABOUT

inTouch は1984年に設立された移民や難民の家族暴力に対する多文化主義を推進する機関。難民、移民に対し、様々なコミュニティを使いながらアプローチをかけて支援を行う。25の対応言語による通訳サービスも実施。

課題②への示唆

「文化の力を尊重することによって女性はエンパワーされて立ち上がることができる」という代表の方のお話が印象的。

Copyright © Takeishi Seminar B 2018 All Rights Reserved

<<<

大石先生とディスカッションの後で撮影した集合写真

ABOUT

メルボルン大学（英語: The University of Melbourne）は、オーストラリア連邦ビクトリア州メルボルンに所在する州立総合大学。1853年に設立され、2005年5月に創立150周年を迎えたメルボルン大学は、各種の世界大学ランキングで常に最優秀な大学として評価される世界有数の名門大学である。

課題③への示唆

オーストラリアは頻繁に移民受け入れの成功例として挙げられるが、未だに移民への差別が存在することに驚いた。

Copyright © Takeishi Seminar B 2018 All Rights Reserved

9 月 4 日は FairWork を訪問してヒアリングを行った後、シドニーに移動した。

<<<

Fair work 職員Jolanka Juhasz氏
とインタビュー後の集合写真

ABOUT

移民の労働問題を主として、公正な労働環境の実現に取り組む監査法人。主に20人以下のスモールビジネスを対象として監査を展開し、不当な雇用を防ぐキャンペーンを行っている。

課題③への示唆

オーストラリアでは移民が雇用/労働側の双方で労働問題が発生している。原因は差別だけでなく法的な知識不足によるケースも多いという。

Copyright © Takeishi Seminar B 2018 All Rights Reserved

9 月 5 日は、午前には日本人コースと現地コースの 2 コースを持つシドニー日本人学校を訪問し、見学と生徒へのヒアリングを行わせて頂いた。午後はシドニー工科大学でキャンパスツアーと日豪交流に関する講義を受け、その後、学生プレゼンを実施して、現地学生と交流した。

<<<

学校見学を終え、井川校長と
大塚教頭と集合写真

ABOUT

シドニー日本人学校（Sydney Japanese International School）は、「国際学級」と「日本人学級」を併設するインターナショナルスクール。
日本語と英語の飛び交う国際的な環境の中で、バイリンガル教育を行う。

課題②への示唆

英語と日本語が曖昧な状態で教養を学ぶとどれも全て中途半端になってしまう懸念があり、払拭する方法を模索している。

Copyright © Takeishi Seminar B 2018 All Rights Reserved

PRESRNTATION @ UTS

“Immigrants and Promotion of Multiculturalism In Japan” という題で日本の移民に関する課題とその施策をプレゼン。
建設的な議論ができた。

Copyright © Takeishi Seminar B 2018 All Rights Reserved

実 施 日：2018 年 10 月 7 日(日)
実施場所：いちょう団地
実施内容：自治会のお祭りで見学調査を実施
成　　果：自治会長・副会長からお祭りの見学を勧められ、見学調査を行った。

research
いちょう祭り
ICHO FESTIVAL

いちょう団地連合自治会が１０月に開催する地域の祭事。今年度は１０月６，７日に開催され、弊ゼミは７日に参加させていただいた。

参加する地域住民も出店も多国籍であり、タイ料理や中国料理など、様々な国の料理が楽しめる。

また祭事の一環に「多文化共生交流会」という項目があり、母国の舞踊やカラオケなど異文化に触れる機会が多く組み込まれていた。

(右) ラオスの民族舞踊を踊るゼミ生。地域住民も多様な民族が加わり終始笑顔をうかがわせながら異文化交流を楽しんでいた。文化の壁を超えて民族間で交流する現場に立会い、自分たちも参加できたことは感慨深い瞬間であった。

(左) 中華料理の露店。小籠包などの本格的な中華料理が安価で楽しめる。

Copyright © Takeishi Seminar B 2018 All Rights Reserved

実 施 日：2019 年 1 月 17 日(木)
講 演 者：エアーズ　由希子 氏（書道家・武道家）
演　　題：多民族社会・英国の移民受け入れと差別問題および対策
実施施設：中央大学　多摩キャンパス　5601 教室
実施内容：英国への移民の直面する困難に関する双方向ディスカッション
成　　果：現地感覚に関し、実体験に基づく貴重なお話を聞き活発な質疑応答があった。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

求心力・持続可能性・多様性のあるまちづくり

＜授業の概要＞

課題 1（春学期）外国人から見た日本の「まち」を分析するための調査票設計

課題 2（8 月下旬）（インバウンド・人口問題）データ収集（国内実態調査）

課題 3（8 月下旬）フィードバック（国内見学調査）

課題 4（秋学期）これまで積み上げてきた調査を英語で発表（国外見学調査）

＜活動内容＞

2 年次に米国ハーバード大学を訪れて、現地学生に自らの「最大の問題」について問われた C 生たちはその際に深く考えさせられたのであるが、その後、日本の少子高齢化を世界の先進的課題､それに対する取組を世界と共有すべき先進的試みと位置付けることに繋がった。3 年次には人口減少に苦しむ宮城県を訪れ、3 年次末にはポートランド、4 年次に徳島県における地域活性化の先進的取組を調査した。そして最終的に、地方における地域活性化をアジア共通の課題とし、都市への人口集中という共通の課題を抱え、将来的に少子高齢化が予測されるカンボジアを 12 月に訪れ、成果を発表した。

【ポートランド市調査】(2017 年度末)

FLP 演習武石ゼミ C 生の 2018 年度の活動は、2017 年度成果報告会後から準備を始めていた。2017 年度 2 月に米国オレゴン州において、魅力度 No.1 の街であるポートランド市他において自発的な見学調査を実施するとともに、ポートランド州立大学やオレゴン大学の学生を訪れ、現地学生の授業に参加して討論をするとともに、日本の地方の魅力について調査票調査に回答を求めた。

【徳島県調査】

調査の結果、インバウンドの観光客と、人口増加は、地域活性化策ではあるものの必ずしも直結するものではなく、それぞれがある程度独立した要因であることがわかった。そこで阿波踊り等へのインバウンド観光策と、サテライトオフィスを通じた人口増加を図っている徳島県に、2018 年 8 月 14 日(火)～8 月 19 日(日)に実態調査を実施した。

8 月 14 日、15 日には民泊に宿泊して阿波踊りを観光に来た外国人に調査票調査、ヒアリング調査を行った。その結果を 8 月 16 日にまとめ、8 月 17 日の徳島県庁訪問時に発表するとともに、国際的施策の担当者にヒアリングを行った。午後には徳島県美波町を訪れ、サテライトオフィスを展開している「あわえ」の担当者に古民家や使われなくなった公共施設等を利用したサテライトオフィス等を案内して見学させて頂くとともに、美波町へのインバウンド移住者の店の集まる街並みも見学させて頂いた。また、美波町における産学官連携の地域活性化策についても講義を受けることが出来た。8 月 18 日には徳島県神山町でサテライトオフィスを展開しているグリーンバレーの講義を受け、見学をした。海の美波町と山の神山町

では風土も異なり、それぞれが特色を生かし、それぞれのアプローチでサテライトオフィスを展開していることがわかった。

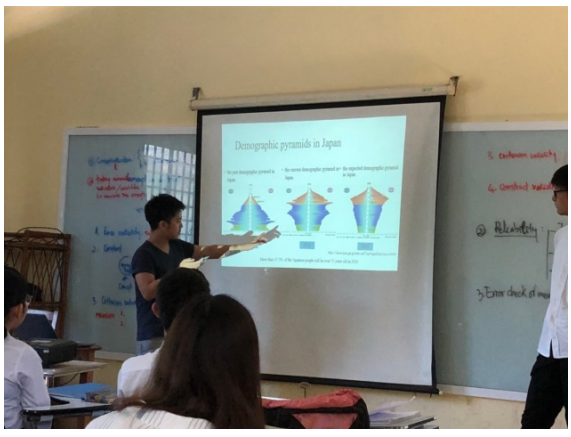
【宮城県調査】

上記の国内外における調査の結果について、8 月 19 日の夜遅くに東京に戻ってから 22 日までの数日の間にパワポにまとめ上げ、22 日からは、昨年度、被災地における少子高齢化の実態調査に訪れた東北に結果をフィードバックするために再度訪れた。8 月 23 日には大郷町役場、8 月 24 日には七ヶ浜町役場において国内外の地域活性化策に関する発表を行った。大郷町役場では職員研修の場として多くの職員が学生のプレゼンの場に参加をして下さり、活発な質疑応答も行われた。

宮城県大郷町役場研修にて学生が発表

【カンボジア調査】

これまでの調査結果をまとめた英語プレゼンを王立プノンペン大学の学生に発表し、3 つの学生チームに分かれて各グループに FLP 演習 C 生 1 人が入りカンボジア学生たちと英語で討論を行う形のグループディスカッションを行った。



王立プノンペン大学の授業にてプレゼン

1 グループにつき中大生 1 人の討論

＜実態調査・見学調査＞

実 施 日：2018 年 8 月 14 日(火)～8 月 19 日(日)
実施都市：徳島県徳島市
実施場所：徳島県庁観光政策課
実施内容：徳島県の国際的な観光施策について担当者ヒアリング
成　　果：徳島県が職員を長期の海外派遣で研修を行うなどして国際的に育成し、海外イベントなどにも参加して、徳島県へのインバウンド政策を進めていることについて、担当者から詳しくお話を伺うことが出来た。

実 施 日：2018 年 8 月 18 日(土)
講 演 者：竹内　和啓 氏（NPO 法人グリーンバレー）
演　　題：神山のまちづくりや創造的過疎について
実施都市：徳島県名西郡神山町
実施施設：神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックス
実施内容：サテライトオフィスを通じた地域活性化について
成　　果：神山町に、サテライトオフィスへの誘致を通じて先進的な企業が集まってきた経緯について、他大学の教授・学生などとともにレクチャーを受けた。

実 施 日：2018 年 8 月 18 日(土)
講 演 者：隅田　徹 氏（株式会社プラットイーズ・株式会社えんがわ）
演　　題：サテライトレクチャー
実施都市：徳島県名西郡神山町
実施施設：神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックス
実施内容：IT 企業の地方におけるサテライトオフィス展開について
成　　果：Wi-Fi 環境の整備された神山町において、大量の画像・映像コンテンツを含む仕事の成果をやり取り・保管することのメリット、アイデア・クラッシャーの壁をどのように乗り越えて新しいアイデアを実現したか等について貴重なお話をお伺いすることが出来た。

実 施 日：2018 年 8 月 22 日(水)～8 月 24 日(金)
実施都市：宮城県内
実施場所：七ヶ浜町役場・大郷町役場・他
実施内容：昨年度の実態調査のフォローアップ
成　　果：昨年度の実態調査で少子高齢化問題における地域の課題についてお話をお伺いした七ヶ浜町役場・大郷町役場で、ポートランドと徳島県の調査結果をフィードバックするプレゼンを行った。

実 施 日：2018 年 11 月 30 日(金)～12 月 5 日(水)
実施都市：プノンペン（カンボジア）

実施場所：王立プノンペン大学

実施内容：同大学 International Studies の授業でプレゼン・討論を行う

成　　果：見学調査ということもあり、11 月 30 日から 12 月 2 日までは、カンボジアの歴史と文化に触れる活動を行った。12 月 3 日と 4 日には王立プノンペン大学の International Studies の授業に 3 コマ以上参加させて頂き、これまでの成果発表とそれに関するグループディスカッションを行った。カンボジアの調査合宿の行程は授業から学生交流、王立プノンペン大学の学生とも一緒に巡った歴史・文化遺産の視察まで、すべて学生主導でアレンジし、実行した。

（５）中迫　俊逸（商学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ

＜テーマ＞

ビジネス・コミュニケーションとその関連分野の研究

＜授業の概要＞

本演習においては、(1) 異文化コミュニケーションの理論と実践の研究 (2) 海外研修及び (3) ビジネス英語のトレーニングを行います。ビジネス・コミュニケーションの研究においては、受講生による個人発表を行ってもらいます。海外研修では、マレーシアに行き、日系企業や現地企業等でインタビューを行います。インタビュー項目は各種文献等を通じて作成し､インタビュー相手に事前に送付するのでかなり早い段階から準備を行うことになります。また､研修後は報告書の作成と FLP 国際協力期末成果報告会で口頭発表を行ってもらいます。ビジネス英語のトレーニングとしては、ほぼ毎回の講義で音声教材とほぼ同時に話させ、平常点をつけます。

＜活動内容＞

中迫ゼミは､「授業の概要」に沿って授業が行われた。海外実態調査においても例年通りの成果を上げることができたと確信している。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A

実 施 日：2018 年 9 月 11 日(火)～9 月 16 日(日)

実施都市：ケダ州（マレーシア）

実施場所：ウタラマレーシア大学 (UUM)・他

実施内容：マレーシアでは、マレーシアの国立大学である Universiti Utara Malaysia (UUM)、マレーシアを代表する自動車会社であるプロトン社を訪問した。UUM においては、UUM の教職員及び学部学生と大学院生の前で、日本からの参加学生による日本文化のプレゼンテーションが英語で 4 つ行われた。また、引率者の中迫が「Negotiation and International Business」というタイトルで講演を行った。UUM では学生同士の活発な交流がこれ以外にも行われた。プロトン社においては、マレーシアにおける自動車産業の実態、プロトン社のビジネス活動等に関して、約 2 時間の講義（質疑応答を含む）を受けた。なお、講義の言語は 90%以上が英語であった。また、講義後には約 1.5 時間、プロトン社の見学をさせていただいた。

成　　果：学生達は、英語によるコミュニケーションの重要性をさらに強く認識させることができた。事前学習は十分に行ってから各訪問先を訪問した。秋学期ではさらに事後学習を行い、学習成果を学生達に文書でまとめさせる指導を行った。

（6）平澤　敦（商学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

企業・産業の国際比較～グローバル思考養成のために

＜授業の概要＞

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

＜活動内容＞

平澤敦ゼミ（A）は、成果報告会での研究発表を目標に、2つのグループに分かれてそれぞれの研究テーマにつき調査ならびにディスカッションを重ねた。

研究テーマは、1つはスポーツビジネス関連で、他はSNSマーケティング関連である。

・『世界陸上のマーケティング戦略―将来開催される世界陸上日本大会に向けて―』

・『Instagramはインバウンド観光を促進するツールとなり得るか』

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B

実 施 日：2018年4月14日(土)～4月15日(日)

実施都市：山梨県笛吹市

実施場所：石和温泉

実施内容：演習AおよびBの学生との間での意見交換ならびに研究テーマの研究発表

成　　果：教員からは研究テーマや研究手法についての解説を行い、それを踏まえたうえでの研究テーマの選定につき、議論を重ねた。
参考文献の収集方法やその引用形式、パワーポイントの作成につきゼミ生間で共有した。

対象演習：A

実 施 日：2018年10月25日(木)

実施都市：東京都渋谷区

実施場所：渋谷東急REIホテル

実施内容：JOCの岩上祐子氏へのヒアリング

成　　果：スポーツビジネス班が事前に岩上氏に送付した質問表をもとにヒアリング調査を行い、研究に有益な示唆を得ることができた。

対象演習：A

実 施 日：2018年11月6日(火)～11月10日(土)

実施都市：ソウル（韓国）

実施場所：日本政府観光局ソウル事務所・他
実施内容：ヒアリング調査
成　　果：両グループともに有益なアドバイスを得ることができ、また街頭アンケート調査においても好意的な回答を頂くことができた。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

企業・産業の国際比較分析～ケーススタディを中心として

＜授業の概要＞

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

＜活動内容＞

平澤敦ゼミ（B）は、成果報告会での研究発表を目標に、3つのグループに分かれてそれぞれの研究テーマにつき調査ならびにディスカッションを重ねた。

研究テーマは、アジアの航空市場関連、コンテンツ・ファイナンス関連、観光マーケティング関連である。

・『ASEAN 単一航空市場で激変するアジア―アジアのエアラインが競争を勝ち抜くには―』
・『日本映画の成長戦略―国際共同製作に焦点を当てて―』
・『訪日中国人観光客の購買促進―お土産産業に焦点を当てて―』

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B
実 施 日：2018年4月14日(土)～4月15日(日)
実施都市：山梨県笛吹市
実施場所：石和温泉
実施内容：演習AおよびBの学生との間での意見交換ならびに研究テーマの研究発表
成　　果：教員からは研究テーマや研究手法についての解説を行い、それを踏まえたうえでの研究テーマの選定につき、議論を重ねた。
参考文献の収集方法やその引用形式、パワーポイントの作成につきゼミ生間で共有した。

対象演習：B
実 施 日：2018年11月18日(日)～11月23日(金)
実施都市：香港（中国）
実施場所：JETRO香港事務所・他
実施内容：JETRO 香港事務所でのレクチャー・質疑応答、香港市立大学での学生との研究テーマについてのディスカッション
成　　果：JETRO では、研究テーマに関する香港を含むアジア市場の概況について理解することができた。
香港市立大学では、アジア研究をメインにしている同大学の学生（すでに交換留学等で訪日、日本体験あり）と、小職のゼミ生の研究テーマにつき活発なデ

ィスカッションを行うことができ、研究に有益な意見等を得ることができた。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

企業・産業の国際比較分析～ケーススタディを中心として

＜授業の概要＞

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回 2 グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

＜活動内容＞

平澤敦ゼミ（C）は、就職活動等の影響もあり、国内にてマーケティング関連の国際比較につき海外文献を用いて共同で行うことにした。

研究テーマは、『情報過多による購買の阻害―日本とアメリカとの比較を中心として―』とし、 消費者庁やアメリカの民間の調査会社が公表しているデータ等を参考に、情報疲労が国際的に問題になっているのか、商品に関する情報が多すぎることが購買行動の阻害要因になっているのか否かにつき研究論文を作成した。

（7）新原　道信（文学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

惑星規模の問題解決と異文化理解と異文化間コミュニケーションに基づくコミュニティ形成のための国際フィールドワーク

＜授業の概要＞

本演習では、開発・発展の諸問題についての社会学を基礎として、イタリア・日本などを中心とした世界の諸地域でフィールドワークを行ってきた経験から、学生のみなさんに「異文化理解と異文化間コミュニケーション」の方法を伝えていきます。ゼミ生は、3 年間一貫のプログラムで、以下のような内容を修得していってもらいます。(1)社会学的な現代社会論（惑星社会論）を学び、地球規模の諸問題、「途上国」や 3.11 以降の日本の都市・地域問題など、グローバル社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの「私生活」とどう関わっているのかを理解します。(2)それと同時に、調査研究の方法、すなわち〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、海外のフィールドで、出会った現実をちゃんと感じ考えるための「国際フィールドワーク」の方法を学んでいきます。(3)こうして身につけた社会認識の力と国際フィールドワークの力を確かなものとするため、実際にフィールドに出てフィールドワークを行なったり、コミュニティ形成のためのプロジェクト（「立川プロジェクト」）に参加したり、さらには、海外実態調査（国際フィールドワーク）にむけて準備をすすめていきます。(4)海外実態調査は、テーマとリサーチ・クエスチョンの設定・計画立案・実施も含めてゼミ生中心に実行していきます。(5)フィールドワークの成果を報告会で発表し、さらに BC 生となると、独自のテーマと調査研究にもとづき、論文を執筆・完成させます。

＜活動内容＞

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4 つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢 70 名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか――〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロか

ら、ゼミ生皆で話し合って方針を決めてきました。

そうして、4 ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、山梨県笛吹市でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク――一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、台湾調査にむけての準備を整えました。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C
実 施 日：2018 年 8 月 22 日(水)～8 月 24 日(金)
実施都市：山梨県笛吹市
実施場所：笛吹市役所・他
実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。
成　　果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめ、国際ゼミとしての知見については、来年度に予定されている台湾のフィールドと比較し、国際プログラムの報告会で報告しました。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2018 年 9 月 5 日(水)～9 月 7 日(金)
実施都市：山梨県笛吹市
実施場所：モンデ酒蔵・他
実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。
成　　果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめ、国際ゼミとしての知見については、来年度に予定されている台湾のフィールドと比較し、国際プログラムの報告会で報告しました。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

惑星規模の問題解決と異文化理解と異文化間コミュニケーションに基づくコミュニティ形成のための国際フィールドワーク

＜授業の概要＞

本演習では、開発・発展の諸問題についての社会学を基礎として、イタリア・日本などを中心とした世界の諸地域でフィールドワークを行ってきた経験から、学生のみなさんに「異文化理解と異文化間コミュニケーション」の方法を伝えていきます。ゼミ生は、3 年間一貫のプログラムで、以下のような内容を修得していってもらいます。(1)社会学的な現代社会論（惑星社会論）を学び、地球規模の諸問題、「途上国」や 3.11 以降の日本の都市・地域問題など、グローバル社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの「私生活」とどう関わっているのかを理解します。(2)それと同時に、調査研究の方法、すなわち〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、海外のフィールドで、出会った現実をちゃんと感じ考えるための「国際フィールドワーク」の方法を学んでいきます。(3)こうして身につけた社会認識の力と国際フィールドワークの力を確かなものとするため、実際にフィールドに出てフィールドワークを行なったり、コミュニティ形成のためのプロジェクト（「立川プロジェクト」）に参加したり、さらには、海外実態調査（国際フィールドワーク）にむけて準備をすすめていきます。(4)海外実態調査は、テーマとリサーチ・クエスチョンの設定・計画立案・実施も含めてゼミ生中心に実行していきます。(5)フィールドワークの成果を報告会で発表し、さらに BC 生となると、独自のテーマと調査研究にもとづき、論文を執筆・完成させます。

＜活動内容＞

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4 つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢 70 名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか――〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合って方針を決めてきました。

そうして、4 ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、山梨県笛吹市でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク――一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、台湾調査にむけての準備を整えました。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C
実 施 日：2018 年 8 月 22 日(水)～8 月 24 日(金)
実施都市：山梨県笛吹市
実施場所：笛吹市役所・他
実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。
成　　果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめ、国際ゼミとしての知見については、来年度に予定されている台湾のフィールドと比較し、国際プログラムの報告会で報告しました。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2018 年 9 月 5 日(水)～9 月 7 日(金)
実施都市：山梨県笛吹市
実施場所：モンデ酒蔵・他
実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。
成　　果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめ、国際ゼミとしての知見については、来年度に予定されている台湾のフィールドと比較し、国際プログラムの報告会で報告しました。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

惑星規模の問題解決と異文化理解と異文化間コミュニケーションに基づくコミュニティ形成のための国際フィールドワーク

＜授業の概要＞

本演習では、開発・発展の諸問題についての社会学を基礎として、イタリア・日本などを中心とした世界の諸地域でフィールドワークを行ってきた経験から、学生のみなさんに「異文化理解と異文化間コミュニケーション」の方法を伝えていきます。ゼミ生は、3 年間一貫のプログラムで、以下のような内容を修得していってもらいます。(1)社会学的な現代社会論（惑星社会論）を学び、地球規模の諸問題、「途上国」や 3.11 以降の日本の都市・地域問題など、グローバル社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの「私生活」とどう関わっているのかを理解します。(2)それと同時に、調査研究の方法、すなわち〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、海外のフィールドで、出会った現実をちゃんと感じ考えるための「国際フィールドワーク」の方法を学んでいきます。(3)こうして身につけた社会認識の力と国際フィールドワークの力を確かなものとするため、実際にフィールドに出てフィールドワークを行なったり、コミュニティ形成のためのプロジェクト（「立川プロジェクト」）に参加したり、さらには、海外実態調査（国際フィールドワーク）にむけて準備をすすめていきます。(4)海外実態調査は、テーマとリサーチ・クエスチョンの設定・計画立案・実施も含めてゼミ生中心に実行していきます。(5)フィールドワークの成果を報告会で発表し、さらに BC 生となると、独自のテーマと調査研究にもとづき、論文を執筆・完成させます。

＜活動内容＞

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4 つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢 70 名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか――〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合って方針を決めてきました。

そうして、4 ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、山梨県笛吹市でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク――一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、台湾調査にむけての準備を整えました。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C
実 施 日：2018 年 8 月 22 日(水)～8 月 24 日(金)
実施都市：山梨県笛吹市
実施場所：笛吹市役所・他
実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。
成　　果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめ、国際ゼミとしての知見については、来年度に予定されている台湾のフィールドと比較し、国際プログラムの報告会で報告しました。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2018 年 9 月 5 日(水)～9 月 7 日(金)
実施都市：山梨県笛吹市
実施場所：モンデ酒蔵・他
実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。
成　　果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめ、国際ゼミとしての知見については、来年度に予定されている台湾のフィールドと比較し、国際プログラムの報告会で報告しました。

（8）野宮　大志郎（文学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

世界に働きかける：グローバルな市民社会活動の創造

＜授業の概要＞

社会は、その中に住む個人を強制しある特定の方向に仕向ける力を持つ。戦争での兵隊志願者はその最たる現れであろう。しかし、個人はその「社会の力」にだまって従うばかりではない。自分の権利や考えに基づき、時には社会の力に抗しても行動する主体さらには社会変革を担うエージェンシーとなりうる。そうしたエージェンシーとしての個人が集まることで市民社会が成立する。

本演習では、社会の構造的力から観察を始め、その力に対抗するもの、変革をめざすものとしてのエージェンシーをまず理解する。次に、市民社会概念について理解し、かつ実際にそれがどの様に現れるかを学ぶ。最後に、市民社会の現代的現れであるグローバル市民社会についていくつかの事例を観察して学ぶ。

本演習の最終的な目標は、たとえ小さなことでも自ら社会に対して働きかけ、社会に資する行動や理解を創り出していく人を育てることである。

＜活動内容＞

2018 年度、FLP 野宮ゼミは、ベトナム社会の市民の活動を知ることを目的として調査研究を行った。前期は、ベトナム社会について文献を探し文献購読を中心に授業を進めた。後期にはいり、10 月は 11 月に予定されている社会調査に向けて、調査対象の選定と調査アポイントメント取りなど、調査準備活動を行った。11 月初旬、ベトナム中部の都市、ダナンで調査を行った。その後 11 月、12 月には調査活動を元に各班でのプレゼン作成を行った。1 月には、論文執筆のための学習をして各自の論文執筆に当たった。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：B・C

実 施 日：2018 年 11 月 5 日(月)～11 月 12 日(月)

実施都市：ダナン（ベトナム）

実施場所：佐川急便ベトナム有限会社・他

実施内容：・11 月 5 日(月)：ベトナムへ移動。夜、通訳・道案内人と調査打ち合わせ。
・11 月 6 日(火)：午前中、調査出発準備、午後から調査実施。夜、反省会。
・11 月 7 日(水)～9 日(金)：3 日間全日調査活動。夜、反省会。
・11 月 10 日(土)：野宮ゼミ全員で、フエ研修
・11 月 11 日(日)：全日やり残し調査。夕方、飛行場へ。日本へ移動。
・11 月 12 日(月)：帰国

成　　果：FLP に関しては、二つの調査班で大きな成果を上げることができた。一つは、ストリートベンダー班、もう一つは、移住労働者班である。ストリートベンダー班は、

現地でストリートベンダーが集まる市場やストリートに赴き､4 日間でおよそ 40 人からインタビューデータを集め、そのデータを元に「ストリートベンダーになるまでの過程」を、1980 年から今日に至るまで、それぞれの年代でストリートベンダー産業に参入する理由の違いに着目しながら分析した。

移住労働者班は、ダナンという中部大都市に地方から人々が集まり仕事につく様に着目した。移住の背後にどういった理由・事情・条件があるのか探ることが目的だった。ここでも労働定着センターなどの職業斡旋機関や移住労働者自身からインタビューデータを取り、集積して、分析を行った。

いずれの調査も、発展の途上にあるベトナム社会の特質をつかもうとする努力であり、調査をしてデータを得るのみならず、異国の地を自らの足で歩き、目で見て、人の話を聞き、理解しようとする態度を身につけることができたと確信する。

（9）伊藤　晋（全学連携教育機構・特任教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

開発問題と国際協力の基本的理解と研究

＜授業の概要＞

本演習では、開発途上国の抱える様々な問題、及びその解決に向けた多様な国際協力についての基本的な理解を深め、国際協力の成果とその望ましいあり方について研究します。

前期では、開発途上国が直面する主要な開発問題、国際協力の体制、国際協力の歴史的展開、国際協力の主要な支援アプローチについて研究し、後期では、主要地域における事例研究等を行うとともに、グループ論文を作成します。また、開発理論・戦略・潮流等関連事項については、随時紹介・議論します。

演習では、具体的な開発プロジェクトの事例研究も行うことで、実践的なアプローチや手法を学ぶとともに、映像教材等を用いて国際協力の実態・課題も検証します。

＜活動内容＞

2018年度の伊藤Aゼミでは､前期には開発経済学､国際協力の基本的な理解を深めるため、大塚啓二郎『なぜ貧しい国はなくならないのか』(2014年)、D.ヒューム『貧しい人を助ける理由　遠くのあの子とあなたのつながり』(2017 年)、下村恭民他編『国際協力　第 3 版』(2016年) をテキストとして、輪読を実施しました。後期には、外国人技能実習制度の現状と課題に関するグループ論文を作成するとともに、A.バナジー、E.デュフロ『貧乏人の経済学ーもういちど貧困問題を根っこから考える』(2012年) をテキストとして輪読しました。

また、国際協力においては、援助から如何に民間ビジネスに橋渡しするかが重要、との観点から、「40億人のためのビジネスアイディアコンテスト」(主催：アイ･シー･ネット株式会社)、及び「日経ソーシャルビジネスコンテスト」にゼミとして応募しました。また、SDGsに関する理解を深めるため､「持続可能な開発目標 (SDGs) 学生フォトコンテスト2018」(主催：国連広報センター他) に従い、ゼミ内でフォトコンテストを実施するとともに、「大学 SDGs ACTION! AWARDS」(主催：朝日新聞社) にゼミとして応募しました。

＜国外実態調査＞

対象演習：A・B

実 施 日：2018年9月2日(日)～9月7日(金)

実施都市：マニラ（フィリピン）

訪問機関：アジア開発銀行本部、世界銀行フィリピン事務所、ユニセフ・フィリピン事務所､フィリピン教育省､フィリピン国家経済開発庁､Bahay Tuluyan､Child Hope､NPO法人ユニカセ、特定非営利法人ソルト・パヤタス、アテネオ・デ・マニラ大学教育学部、アテネオ・デ・マニラ大学付属高校、リサール州カシグラハン地区の公立高校・他

実施内容：就学率・修了率とも伸びていないフィリピンの中等教育における課題と改善点

について研究

成　　果：フィリピンの中等教育の現状と課題について、多角的に検証することで、背景にある貧困問題や宗教等について理解するとともに、フィリピン政府・国際開発機関・NGO 等による解決策とその限界について、調査を実施しました。これらを踏まえ、問題解決に向けた提言を行いました。

マニラ市におけるストリートチルドレン向けの路上教育見学

＜特別授業＞

1）フィリピン・ミンダナオ平和構築に係る JICA の取り組みと課題

実　　施　　日：2018 年 10 月 25 日(木)

実　施　場　所：中央大学 多摩キャンパス

実施内容/成果：フィリピン・ミンダナオ島における平和構築に関し、現地において長年関与する JICA の落合直之氏を招き、国際的な紛争の趨勢、ODA による平和構築、ミンダナオ問題の本質、JICA によるミンダナオ問題への取組み、今後の課題等についてご講演頂くとともに、意見交換を実施しました。

2）国際協力 NGO の活動とその評価

実　　施　　日：2018 年 12 月 21 日(金)

実　施　場　所：中央大学 多摩キャンパス

実施内容/成果：長年国際協力 NGO の運営に携わり（特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会元事務局長他)、一般社団法人参加型評価センター代表理事として NGO 等の評価の第一人者である田中博氏を招き、途上国開発における NGO の役割、参加型開発とは、ネパールの森林保全の現状と課題等についてご講演頂くとともに、意見交換を実施しました。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

国外実態調査を通じた開発問題の研究と国際協力の検証

＜授業の概要＞

本演習では、演習 A で培った国際協力に関する基本的な理解を踏まえ、国外実態調査を通じ、開発途上国の抱える様々な開発問題についての理解を深め、国際協力に関する具体的な事例、方法論を学びつつ、国際協力の成果とその望ましいあり方について研究します。

前期では、開発問題全般及び国際協力の歴史的展開についてレビューを行いつつ、国外実態調査対象国の政治、経済、主要開発課題、実施されている国際協力等について、様々な角度から考察します。後期は、国外実態調査を踏まえ、より明確になった問題意識に基づき、実態調査対象国の各開発課題について、①歴史的な変遷、②域内近隣諸国や他地域等との比較分析、③国際協力が果たした／果たしている役割等の観点も織り交ぜつつ、分析を行います。また、開発理論・戦略・潮流等関連事項については、各開発課題の分析過程で随時紹介・議論します。

演習では、具体的な開発プロジェクトの事例研究も行うことで、実践的なアプローチや手法を学ぶとともに、映像教材等を用いて国際協力の実態・課題も検証します。

＜活動内容＞

2018 年度の伊藤 B ゼミでは、夏季休暇期間に実施するフィリピンでの国外実態調査の準備として、フィリピンの開発課題を概観するため、『フィリピン-急成長する若き「大国」』(井出穣治、2017 年)、及び世界銀行の報告書”Philippines economic update: investing in the future”、及び”Making growth work for the poor: a poverty assessment for the Philippines”を輪読しました。その後、テーマをフィリピンの中等教育を決定した後、研究計画書を作成するとともに、関連の先行研究及び調査研究レポートの精読を中心に各種の準備学習・作業を行うとともに、訪問先のアポイントメントを取り付け、ロジスティクスの手配をし、フィリピンでの国外実態調査を実施しました。後期では、調査結果の取り纏めや、更なる文献研究等を行い、グループ論文を執筆しました。

また、国際協力においては、援助から如何に民間ビジネスに橋渡しするかが重要、との観点から、「40 億人のためのビジネスアイディアコンテスト」(主催：アイ･シー･ネット株式会社)、及び「日経ソーシャルビジネスコンテスト」にゼミとして応募しました。また、SDGs に関する理解を深めるため、「持続可能な開発目標 (SDGs) 学生フォトコンテスト 2018」(主催：国連広報センター他) に従い、ゼミ内でフォトコンテストを実施するとともに、「大学 SDGs ACTION! AWARDS」(主催：朝日新聞社) にゼミとして応募しました。

＜国外実態調査＞

対象演習：A・B

実 施 日：2018 年 9 月 2 日(日)～9 月 7 日(金)

実施都市：マニラ（フィリピン）

訪問機関：アジア開発銀行本部、世界銀行フィリピン事務所、ユニセフ・フィリピン事務所、フィリピン教育省、フィリピン国家経済開発庁、Bahay Tuluyan、Child Hope、NPO 法人ユニカセ、特定非営利法人ソルト・パヤタス、アテネオ・デ・マニラ大学教育学部、アテネオ・デ・マニラ大学付属高校、リサール州カシグラハン地区の公立高校・他

実施内容：就学率・修了率とも伸びていないフィリピンの中等教育における課題と改善点について研究

成 果：フィリピンの中等教育の現状と課題について、多角的に検証することで、背景にある貧困問題や宗教等について理解するとともに、フィリピン政府・国際開発機関・NGO 等による解決策とその限界について、調査を実施しました。これらを踏まえ、問題解決に向けた提言を行いました。

マニラ市における NGO からの聞き取り調査

＜特別授業＞

1）フィリピン・ミンダナオ平和構築に係る JICA の取り組みと課題

実 施 日：2018 年 10 月 25 日(木)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス

実施内容/成果：フィリピン・ミンダナオ島における平和構築に関し、現地において長年関与する JICA の落合直之氏を招き、国際的な紛争の趨勢、ODA による平和構築、ミンダナオ問題の本質、JICA によるミンダナオ問題へ

の取組み、今後の課題等についてご講演頂くとともに、意見交換を実施しました。

2）国際協力 NGO の活動とその評価

実　　施　　日：2018 年 12 月 21 日(金)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス

実施内容/成果：長年国際協力 NGO の運営に携わり（特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会元事務局長他)、一般社団法人参加型評価センター代表理事として NGO 等の評価の第一人者である田中博氏を招き、途上国開発における NGO の役割、参加型開発とは、ネパールの森林保全の現状と課題等についてご講演頂くとともに、意見交換を実施しました。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

国際協力に関する問題意識の深化と先鋭化

＜授業の概要＞

本演習では、演習 A、B で培った国際協力に関する基本的な理解を踏まえ、開発途上国の抱える様々な開発問題に対する国際協力に関し、新たな潮流や国際協力の成果とその望ましいあり方について研究しつつ、各自の問題意識に基づき、修了論文を作成します。

演習では、具体的な開発プロジェクトの事例研究も行うことで、実践的なアプローチや手法を学ぶとともに、映像教材等を用いて国際協力の実態・課題も検証します。

＜活動内容＞

2018 年度の伊藤 C ゼミは、前期では、修了論文のテーマ設定の準備作業を行いつつ、開発経済学、国際協力、フィリピン経済等に関する文献の輪読や国際開発に関する主要なテーマ等について討論を行いました。後期では、前期に続き、開発経済学、国際協力、フィリピン経済等に関する文献の輪読や国際開発に関する主要なテーマ等について討論を行うとともに、修了論文の進捗に応じ中間発表を行い、修了論文を完成させました。

また、国際協力においては、援助から如何に民間ビジネスに橋渡しするかが重要、との観点から、「40 億人のためのビジネスアイディアコンテスト」（主催：アイ・シー・ネット株式会社）、及び「日経ソーシャルビジネスコンテスト」にゼミとして応募しました。また、SDGs に関する理解を深めるため、「持続可能な開発目標（SDGs）学生フォトコンテスト 2018」（主催：国連広報センター他）に従い、ゼミ内でフォトコンテストを実施するとともに、「大学 SDGs ACTION! AWARDS」（主催：朝日新聞社）にゼミとして応募しました。

＜特別授業＞

1）フィリピン・ミンダナオ平和構築に係る JICA の取り組みと課題

実　施　日：2018 年 10 月 25 日(木)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス

実施内容/成果：フィリピン・ミンダナオ島における平和構築に関し、現地において長年関与する JICA の落合直之氏を招き、国際的な紛争の趨勢、ODA による平和構築、ミンダナオ問題の本質、JICA によるミンダナオ問題への取組み、今後の課題等についてご講演頂くとともに、意見交換を実施しました。

2）国際協力 NGO の活動とその評価

実　施　日：2018 年 12 月 21 日(金)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス

実施内容/成果：長年国際協力 NGO の運営に携わり（特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会元事務局長他）、一般社団法人参加型評価センター代表理事とし

てNGO等の評価の第一人者である田中博氏を招き、途上国開発におけるNGOの役割、参加型開発とは、ネパールの森林保全の現状と課題等についてご講演頂くとともに、意見交換を実施しました。

（１０）稲葉　誠（全学連携教育機構・客員教授）

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

開発途上国における農漁村社会の持続的地域開発並びにコミュニテイ開発

＜授業の概要＞

多くの開発途上国では農漁村部に多数の人口が分布し、経済の基幹である第一次産業を支えています。農漁村部住民の生活水準は一般的に低く、生計の多くは農林水産業、即ち森・水・土地といった自然環境に依存していると言っても過言ではありません。社会経済開発の二極化が進むなか、途上国では引き続き農漁村地域の貧困問題が、発展の進む新興国でも都市と地方の地域格差が拡大し、農漁村部での社会経済開発の在り方が大きな課題となっています。近年の経済のグローバル化は、市場を通じて途上国の第一次産業にも大きな影響を与え、地球規模の気候変動は、自然環境に依存する農漁村住民の生計に影響を及ぼしています。これは必ずしも途上国に限定されているわけではなく、先進国においても同様ですが、途上国においては不十分なセーフティーネットや社会インフラの未整備から、影響がより深刻となっている状況です。本授業では、講師自身が現在実際に途上国諸国で行っている農業・農村開発、コミュニテイ開発やフードバリューチェーン形成による産業振興といった様々な技術指導や調査等の内容・模様をリアルタイムにゼミ学生に紹介し、それらを教材として途上国における農業・農村開発、コミュニテイ開発の課題、特に社会経済開発事業の持続性に必要な要点等について議論・学習しました。具体的事例として今年度紹介した国はインドネシア、ラオス、ベトナム、ミャンマー、ルワンダ、ボリビアなどです。特に最近日本企業の進出が著しいインドネシア、ベトナム、ラオス、ミャンマーなどASEAN諸国については、従来のODA事業に加え、その数倍規模の民間投資及び企業活動が行われている現況を紹介し、途上国の社会経済開発事業における民間企業の役割、期待等についても議論しました。更に経済発展と同時に深刻化している地域間格差、貧困増大、環境問題などの課題についても実際の事例を題材として議論・学習しました。また援助や公共事業など、ドナーや行政主導による社会経済開発事業の課題について議論し、持続的社会経済開発のための住民主導型事業、住民と行政が一体となった協働型開発事業について議論・学習しました。

＜活動内容＞

稲葉ゼミでは、現在インドネシア国南東スラウェシ州ワカトビ県で実施されているJICA草の根技術プロジェクト「地域に根差した環境保全型観光開発推進プロジェクト;(特活）沖縄環境クラブ実施」とも連携し、住民主導型コミュニテイベースドツーリズム振興事業による持続的地域開発の在り方について学ぶと共に、現地プロジェクト活動の更なる改善に資するため、日本の若者の視点からのツーリズムポイント、体験型ツーリズム内容、住民グループが生産する土産物、文化・習慣保存活動などを評価・議論し、環境保全活動とも調和する地域振興活動の在り方や住民の所得向上活動、文化習慣保存活動等について現地住民グループ、活動実施NGO等に報告しました。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：C

実 施 日：2018 年 8 月 26 日(日)～2018 年 9 月 2 日(日)

実施都市：南スラウェシ州マカッサル市・南東スラウェシ州ワカトビ県（インドネシア）

実施場所：JICA 草の根技術協力プロジェクト・在マカッサル領事事務所・他

実施内容：現地実態調査研修のテーマは本演習の内容に沿った形でゼミ生自身によって決定され、研修先は現在に至るまで数多くの ODA/NGO プロジェクトが実施され、日本の民間企業進出の著しい反面、地域格差も拡大しているインドネシアを選び、その中でも経済発展に伴い都市部と地方との地域格差が拡大している東部インドネシア地域を対象として取り上げました。同地域は 1990 年代後半からのアジア経済危機、スハルト体制崩壊後の社会経済混乱の中で、日本政府が世界銀行など他ドナー等と連携/協調して、民主化支援、地方分権化支援を積極的・継続的に実施している地域であり、インドネシア国内でも貧困率の高い地域での社会経済開発事業の在り方を調査・学習しました。マカッサル市では在マカッサル日本領事事務所長や現地 NGO 関係者らと面談し、社会経済開発に係る日本政府の貢献や東部インドネシア地域開発の諸課題について学びました。ワカトビ県では持続的住民主導型開発の一つとして沖縄の NGO が実施しているエコツーリズム振興プロジェクトを訪問しました。同プロジェクト活動の視察と県開発責任者らとの討論と共に、現地住民グループが行っている様々なエコツーリズム振興活動を視察・意見交換し、日本の若者観光客としての視点から活動を観察・評価を行い、コミュニテイベースドツーリズム振興のための各種提案を行いました。

（マカッサル市での現地 NGO との意見交換）

（ワカトビ県での体験型ツアーの参加）

成 果：JICA 専門家、外交官、現地 NGO 関係者らから、途上国での日本の貢献と課題についての具体的説明を聞き、今後の日本の貢献、特にゼミ学生自身の将来の国際貢献の可能性についてのイメージや理解を深めました。またワカトビ県行政関係者、沖縄 NGO や現地住民グループ等との討議により、住民と行政とが一体となって実施する地域開発、コミュニテイベースドツーリズム振興について学

ぶと共に、外国人、特に若者の視点からの魅力ある観光開発/地域振興に必要な活動、事項等について現地関係者らと議論し提案を行うことにより、開発途上国における地域開発、住民主導型開発等についての関心を高めました。帰国後はワカトビ県を事例としてコミュニテイベースドツーリズムなど観光開発による持続的地域開発、コミュニテイ開発の在り方、課題等を議論しました。

（１１）佐々木　弘世（全学連携教育機構・客員教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

国際協力論入門

＜授業の概要＞

本演習では開発途上国の抱える諸問題（貧困、教育、保健衛生、ガバナンス、環境、紛争等）に関し、講義や関連する様々な文献・レポートの輪読等を基にその基本的な構造についての理解を深めることを目標とする。更に第二次世界大戦終結後こうした開発途上国に対し国連・国際金融機関及び先進諸国がどの様な開発戦略を採用してきたのかについてその当時の国際関係（東西冷戦構造等）も十分に視野に入れながら分析し、そうした各戦略の有効性とその限界についても可能な限り取り上げその理解を深めるよう努力する。

＜活動内容＞

2018 年度の本ゼミでは関連の文献講読や視聴覚教材を利用してのグループ・ワークやプレゼンテーションを踏まえながら全員参加によるディスカッションを主な活動にした。こうした活動により当ゼミの当初の目標である「開発とは何か？」、「開発途上国とはどの様な国なのか？」、「国際協力は誰のために、何故行うのか？」といった問いにゼミ員各自が自らの考えを､自らの言葉で説明することが可能となるよう全員で学習を深めることができた｡更に、開発途上国の開発問題や国際協力の現状や課題についての主要な書籍を毎月課題図書として選定し、ゼミ員各自が読後の感想及びゼミ全体で共有すべき事項等を纏めた「課題図書レポート」を作成・提出し、同レポートを基にゼミでの全体討議を適宜実施した。

上記記載の活動に加え、⑴　　外部講師を招聘して最新の国際協力の動向等に関する講話、⑵国際協力に関連する機関等の訪問や同施設を利用しての課外学習を実施することにより国際協力に対する総合的・包括的な理解の促進にも努めた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 5 月 18 日(金)

講 演 者：佐藤　渉 氏（JICA 本部社会基盤平和構築部運輸交通情報通信グループ課長）

内　　容：2001 年から 2015 年までの間開発途上国の貧困問題の解消を主な目標として実施された「ミレニアム開発目標(MDGs)」の成果と課題を踏まえ新たに 2016 年より国際社会全体でその取り組みが開始されている「持続可能な開発目標(SDGs)」を具体化するために必要となる開発途上国の持続可能なインフラ整備を支援する JICA の基本戦略及びその実施について様々な具体例の説明を受け、その後自由討論を行った。

成　　果：SDGs と開発途上国の経済社会開発に必要となるインフラ整備の関係性についての知識を深めるよい機会となった。また ODA の実施機関である JICA の同分野

での支援戦略の概要や具体的なプロジェクトの実施に関する説明によりその現状と様々な課題についても自由討議を通じて理解を深めることが出来た。

見学調査

対象演習：A

実 施 日：2018 年 6 月 9 日(土)

実施都市：東京都新宿区

実施場所：JICA 地球ひろば

実施内容：開発途上国が抱える様々な課題について映像資料を含め様々な媒体を通じてその理解を促進するために設けられている JICA 地球ひろば・開発途上国体験ゾーンを訪問し貧困問題･難民問題･地球温暖化問題等についての理解を深めた。その後 JICA 事業の一つである青年海外協力隊員の活動内容や現地で遭遇した諸問題等について開発途上国から帰国したばかりの隊員から経験談を聞き、その後自由討議を行った。

成　　果：開発途上国が抱える様々な開発課題についてこれまでの文献資料を通じた学習ではなく映像資料や展示資料によりそうした課題の総合的な理解を深めることが出来た。また青年海外協力隊員の体験談を聞くことでボランティア活動の実際についても知識を深めるよい機会となった。

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 10 月 26 日(金)

講 演 者：森本　晴美 氏（三井住友海上火災保険株式会社経営企画部サステナビリティ推進室課長）

山口　彩子 氏（三井住友海上火災保険株式会社経営企画部サステナビリティ推進室課長）

内　　容：2016 年からスタートしている「持続可能な開発目標(SDGs)」の重要な担い手の一つである民間企業による SDGs 達成への貢献について同社の経営戦略や日常の企業活動との関係性についての説明を受けた。特に現在世界中の民間企業が掲げるようになっている CSV 活動（Creating Shared Value）や企業と投資家との関係性を考える上で重要な ESG（Environment・Social・Governance）投資の実際について同社の豊富な活動事例の解説があり、その後自由討議を行った。

成　　果：近年国際協力のより効果的な実施について民間企業のビジネス活動を通じた貢献への期待が極めて大きくなっているが、我が国の金融関連企業の中でいち早く SDGs への貢献をその経営理念の中に取り入れ全社を挙げて取り組みの強化を図っている三井住友海上火災保険株式会社の具体的な例は今後の国際協力のより効果的な実施を考える上で極めて示唆に富む内容であり、また受講生にとっては国際協力が様々な主体によって担われている事を理解し併せて将来の各自のキャリア形成を考える上で大変貴重な場となった。

合同合宿

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 11 月 10 日(土)～11 月 11 日(日)

実施都市：埼玉県小鹿野町

実施場所：梁山泊

実施内容：年末に予定されている FLP 成果報告会に向け、A・B・C の各ゼミ生が夫々のグループワークの進捗状況及び取り纏め内容及び報告事項等について各々プレゼンテーションを行い、参加者全体でその内容に関する自由討議を行った。

成　　果：各ゼミでのグループワークの内容に関し、様々な観点からのコメント・意見が出され期末成果報告会での発表により一層の質的向上を図る絶好の機会となった。また併せて A・B・C ゼミ生間の相互交流及び相互のネットワーク形成を促進することが出来た。

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実 施 日：2019 年 1 月 25 日(金)

講 演 者：岩崎　理恵 氏（JICA 本部アフリカ部アフリカ第四課参事役・中央大学卒業生）

演　　題：JICA の対アフリカ支援戦略の現状と課題

実施内容：近年の世界的な資源価格の高騰により著しい経済成長を記録する一部の国が出始める中で依然として深刻な貧困問題や難民問題に苦しめられている多くのアフリカ諸国に対する効果的な国際協力の在り方とは何かについて豊富なアフリカでの勤務経験を有する講師から現場での経験に基づいた具体的な協力事業の進め方及びアフリカ地域において共通する協力効果を阻害する諸要因についての説明があり、その後自由討議を行った。

成　　果：歴史的・社会的・自然条件等が馴染み深いアジア地域とは大きく異なるアフリカ地域での国際協力実施上の難しさや国際協力において協力対象国に対する歴史・宗教・文化的な背景を含めたより包括的な理解の有無がその協力実施に伴う効果の発現を大きく左右することを講師のアフリカでの体験談を通じて良く学ぶことが出来た。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

国際協力論研究―海外実態調査による実証的研究―

＜授業の概要＞

これまで日本の ODA の協力が集中的に供与され、また過去に世界銀行による「東アジアの奇跡」レポート等によりその目覚しい経済社会発展が大きく取り上げられた東南アジア地域での現地実態調査を実施する。現地調査においては現地の住民が直面していた、或いは直面している多くの開発課題についての構造やその複雑さを直接確認し、そうした開発課題の解消に向け先方政府や地域住民等と共に実施されてきた国際協力プロジェクトの支援現場や関連する支援機関(NGO 等)を訪問し国際協力により達成された具体的な成果とその限界等について分析し理解する。

＜活動内容＞

2018 年度の本ゼミでは、前期では夏季休暇期間に実施するインドネシア（ジャカルタ市）での現地調査を効果・効率的に実施するために必要となる関連の先行研究及び調査研究レポートの精読を中心に各種の準備学習・作業を実施した。現地調査を実施した後の後期では、グループ毎に調査結果の取り纏めや必要に応じ参考文献の精読、国内での有識者に対するインタビュー調査等の追加調査を実施し最終報告書の取り纏めを行った。

上記の B ゼミ独自の活動に加え下記の様な、⑴外部講師を招聘しての最新の国際協力の動向等に関する講話、⑵国際協力に関連する施設等の訪問や同施設を利用しての課外学習、等を実施することにより国際協力に対する総合的・包括的な理解の促進にも努めた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 5 月 18 日(金)

講 演 者：佐藤　渉 氏（JICA 本部社会基盤平和構築部運輸交通情報通信グループ課長）

内　　容：2001 年から 2015 年までの間開発途上国の貧困問題の解消を主な目標として実施された「ミレニアム開発目標(MDGs)」の成果と課題を踏まえ新たに 2016 年より国際社会全体でその取り組みが開始されている「持続可能な開発目標(SDGs)」を具体化するために必要となる開発途上国の持続可能なインフラ整備を支援する JICA の基本戦略及びその実施について様々な具体例の説明を受け、その後自由討論を行った。

成　　果：SDGs と開発途上国の経済社会開発に必要となるインフラ整備の関係性についての知識を深めるよい機会となった。また ODA の実施機関である JICA の同分野での支援戦略の概要や具体的なプロジェクトの実施に関する説明によりその現状と様々な課題についても自由討議を通じて理解を深めることが出来た。

訪問調査

対象演習：B

実 施 日：2018 年 7 月 31 日(火)

実施都市：東京都新宿区

実施場所：JICA 本部

内　　容：8 月に実施予定のインドネシアでの現地実態調査の準備作業の一環としてインドネシアを中心とする東南アジア地域全体のジェンダー（女性の自立支援、人身売買等を含む)問題に詳しい田中由美子先生(城西国際大学大学院教授・JICA シニアジェンダーアドバイザー）を訪問し、インドネシアにおけるジェンダー問題の現状や同国で強大な影響力を持つイスラム教が女性の自立支援等にどの様な影響を及ぼしているのか？等についてゼミ生によるインタビュー調査を行った。

成　　果：インドネシアでの豊富な調査経験を有する講師からジェンダー問題に対する基本的な視座について極めて示唆に富む説明があり、同国で実施された当該分野での最新の世論調査や国際機関による調査結果について詳細な解説とデーターの提供があり現地調査を進めるにあたって極めて有益かつ貴重な訪問調査となった。

現地実態調査

対象演習：B

実 施 日：2018 年 8 月 7 日(火)～8 月 12 日(日)

実施都市：ジャカルタ・他（インドネシア）

実施施設：JICA インドネシア事務所・インドネシア大学経済学部・インドネシア法務省知的財産保護局・インドネシア公共事業省水資源総局・NGO(Family Business Venture Capital)・ジャカルタ白門会・他

実施内容：近年東南アジア地域の中核として著しい経済・社会発展を見せるインドネシアを訪問し同国の経済・社会開発の現状とその課題を理解するための現地調査を実施した。同国滞在中にはインドネシア大学経済学部学生との討議・交流やジャカルタ近郊の女性を対象として職業訓練と資金提供により小規模な店舗の立ち上げ及び経営を支援し女性の自立化支援に貢献している現地の NGO を訪問し同国において大きな問題となっている経済格差是正の為のマイクロファイナンスの役割とその更なる可能性と課題について調査を行った。また併せて気候変動対策として JICA が実施しているインドネシア全国を対象とした水資源総合管理計画や日系企業等が現地で操業する上で大きな障壁となっている知的財産権保護に関する法制度支援の現状について夫々の分野で活躍中の JICA 専門家を訪問し現状及び今後の課題等についてインタビュー調査を行った。

成　　果：上記の様な関連機関・関係者・プロジェクト現場の訪問及び面談を通じ ASEAN の主要国の一つであるインドネシアでの経済・社会開発の現状や広大な国土を擁し、極めて多様な民族・宗教・言語・文化・自然を抱える同国で今後拡大し

続ける地域格差・経済格差を是正しながら国家としての統一と安定した経済・社会発展をいかに進めて行くのか、そのために早急に解決すべき課題とその様な課題解決に期待される国際協力の果たすべき役割について詳細に調査することができた。また、インドネシア大学での現地大学生との交流を通じ先方の高い英語能力と国際関係に関する幅広い見識に触れ大いに触発された。

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 10 月 26 日(金)

講 演 者：森本　晴美 氏（三井住友海上火災保険株式会社経営企画部サステナビリティ推進室課長）

山口　彩子 氏（三井住友海上火災保険株式会社経営企画部サステナビリティ推進室課長）

内　　容：2016 年からスタートしている「持続可能な開発目標(SDGs)」の重要な担い手の一つである民間企業による SDGs 達成への貢献について同社の経営戦略や日常の企業活動との関係性についての説明を受けた。特に現在世界中の民間企業が掲げるようになっている CSV 活動（Creating Shared Value）や企業と投資家との関係性を考える上で重要な ESG（Environment・Social・Governance）投資の実際について同社の豊富な活動事例の解説があり、その後自由討議を行った。

成　　果：近年国際協力のより効果的な実施について民間企業のビジネス活動を通じた貢献への期待が極めて大きくなっているが、我が国の金融関連企業の中でいち早く SDGs への貢献をその経営理念の中に取り入れ全社を挙げて取り組みの強化を図っている三井住友海上火災保険株式会社の具体的な例は今後の国際協力のより効果的な実施を考える上で極めて示唆に富む内容であり、また受講生にとっては国際協力が様々な主体によって担われている事を理解し併せて将来の各自のキャリア形成を考える上で大変貴重な場となった。

合同合宿

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 11 月 10 日(土)～11 月 11 日(日)

実施都市：埼玉県小鹿野町

実施場所：梁山泊

実施内容：年末に予定されている FLP 成果報告会に向け、A・B・C の各ゼミ生が夫々のグループワークの進捗状況及び取り纏め内容及び報告事項等について各々プレゼンテーションを行い、参加者全体でその内容に関する自由討議を行った。

成　　果：各ゼミでのグループワークの内容に関し、様々な観点からのコメント・意見が出され期末成果報告会での発表により一層の質的向上を図る絶好の機会となった。また併せて A・B・C ゼミ生間の相互交流及び相互のネットワーク形成を促進することが出来た。

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実 施 日：2019 年 1 月 25 日(金)

講 演 者：岩崎　理恵 氏（JICA 本部アフリカ部アフリカ第四課参事役・中央大学卒業生）

演　　題：JICA の対アフリカ支援戦略の現状と課題

実施内容：近年の世界的な資源価格の高騰により著しい経済成長を記録する一部の国が出始める中で依然として深刻な貧困問題や難民問題に苦しめられている多くのアフリカ諸国に対する効果的な国際協力の在り方とは何かについて豊富なアフリカでの勤務経験を有する講師から現場での経験に基づいた具体的な協力事業の進め方及びアフリカ地域において共通する協力効果を阻害する諸要因についての説明があり、その後自由討議を行った。

成　　果：歴史的・社会的・自然条件等が馴染み深いアジア地域とは大きく異なるアフリカ地域での国際協力実施上の難しさや国際協力において協力対象国に対する歴史・宗教・文化的な背景を含めたより包括的な理解の有無がその協力実施に伴う効果の発現を大きく左右することを講師のアフリカでの体験談を通じて良く学ぶことが出来た。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

国際協力論（上級）

＜授業の概要＞

これまで履修してきた「演習 A」及び「演習 B」での学習を十分に踏まえながら、各人が開発途上国の開発問題や国際協力の在り方等に関する個別のテーマを設定し最終論文の形で取り纏めることを目指す。

＜活動内容＞

2018 年度のゼミでは、前期では各ゼミ生が FLP でのこれまでの学習を通じて深めた国際協力における関心領域やそこでの問題意識を取り纏めた事項をゼミにおいて発表しつつ夫々の最終論文のテーマ設定の準備作業を行った。併せて国際協力の現状を取り上げた文献の輪読や国際開発支援に関する最新のテーマ等について自由討議を行った。後期では激動する国際情勢や新たな開発潮流等について取り纏められた論文及びレポートの輪読やゼミ生による各自の論文作成の進捗に応じた中間発表と全体討議を行いながら最終論文を完成させた。

上記の C ゼミ独自の学習に加え、⑴外部講師を招聘しての最新の国際協力の動向等に関する講話、⑵国際協力に関連する機関等の訪問や同施設を利用しての課外学習、等を実施することにより国際協力に対する総合的・包括的な理解にも努めた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 5 月 18 日(金)

講 演 者：佐藤　渉 氏（JICA 本部社会基盤平和構築部運輸交通情報通信グループ課長）

内　　容：2001 年から 2015 年までの間開発途上国の貧困問題の解消を主な目標として実施された「ミレニアム開発目標(MDGs)」の成果と課題を踏まえ新たに 2016 年より国際社会全体でその取り組みが開始されている「持続可能な開発目標(SDGs)」を具体化するために必要となる開発途上国の持続可能なインフラ整備を支援する JICA の基本戦略及びその実施について様々な具体例の説明を受け、その後自由討論を行った。

成　　果：SDGs と開発途上国の経済社会開発に必要となるインフラ整備の関係性についての知識を深めるよい機会となった。また ODA の実施機関である JICA の同分野での支援戦略の概要や具体的なプロジェクトの実施に関する説明によりその現状と様々な課題についても自由討議を通じて理解を深めることが出来た。

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 10 月 26 日(金)
講 演 者：森本　晴美 氏（三井住友海上火災保険株式会社経営企画部サステナビリティ推進室課長）
山口　彩子 氏（三井住友海上火災保険株式会社経営企画部サステナビリティ推進室課長）
内　　容：2016 年からスタートしている「持続可能な開発目標(SDGs)」の重要な担い手の一つである民間企業による SDGs 達成への貢献について同社の経営戦略や日常の企業活動との関係性についての説明を受けた。特に現在世界中の民間企業が掲げるようになっている CSV 活動（Creating Shared Value）や企業と投資家との関係性を考える上で重要な ESG（Environment・Social・Governance）投資の実際について同社の豊富な活動事例の解説があり、その後自由討議を行った。
成　　果：近年国際協力のより効果的な実施について民間企業のビジネス活動を通じた貢献への期待が極めて大きくなっているが、我が国の金融関連企業の中でいち早く SDGs への貢献をその経営理念の中に取り入れ全社を挙げて取り組みの強化を図っている三井住友海上火災保険株式会社の具体的な例は今後の国際協力のより効果的な実施を考える上で極めて示唆に富む内容であり、また受講生にとっては国際協力が様々な主体によって担われている事を理解し併せて将来の各自のキャリア形成を考える上で大変貴重な場となった。

合同合宿
対象演習：A・B・C
実 施 日：2018 年 11 月 10 日(土)～11 月 11 日(日)
実施都市：埼玉県小鹿野町
実施場所：梁山泊
実施内容：年末に予定されている FLP 成果報告会に向け、A・B・C の各ゼミ生が夫々のグループワークの進捗状況及び取り纏め内容及び報告事項等について各々プレゼンテーションを行い、参加者全体でその内容に関する自由討議を行った。
成　　果：各ゼミでのグループワークの内容に関し、様々な観点からのコメント・意見が出され期末成果報告会での発表により一層の質的向上を図る絶好の機会となった。また併せて A・B・C ゼミ生間の相互交流及び相互のネットワーク形成を促進することが出来た。

講演会（合同ゼミ）
対象演習：A・B・C
実 施 日：2019 年 1 月 25 日(金)
講 演 者：岩崎　理恵 氏（JICA 本部アフリカ部アフリカ第四課参事役・中央大学卒業生）
演　　題：JICA の対アフリカ支援戦略の現状と課題
実施内容：近年の世界的な資源価格の高騰により著しい経済成長を記録する一部の国が出始める中で依然として深刻な貧困問題や難民問題に苦しめられている多くのア

フリカ諸国に対する効果的な国際協力の在り方とは何かについて豊富なアフリカでの勤務経験を有する講師から現場での経験に基づいた具体的な協力事業の進め方及びアフリカ地域において共通する協力効果を阻害する諸要因についての説明があり、その後自由討議を行った。

成　　果：歴史的・社会的・自然条件等が馴染み深いアジア地域とは大きく異なるアフリカ地域での国際協力実施上の難しさや国際協力において協力対象国に対する歴史・宗教・文化的な背景を含めたより包括的な理解の有無がその協力実施に伴う効果の発現を大きく左右することを講師のアフリカでの体験談を通じて良く学ぶことが出来た。

Ⅳ．スポーツ・健康科学プログラム

１．設置の趣旨と教育の目的

少子高齢化社会の到来のみならず、高度テクノロジー化と IT 化にともない、心身の健康の維持増進がこれまで以上に重要になっています。そして、スポーツ・健康科学の発展と普及は、21 世紀の日本社会にとって不可欠なものとなっています。今日我が国の健康問題の多くは、運動不足や情報横溢と密接にかかわるライフスタイルの変化や生活文化に起因しています。そのような中で、特にスポーツや運動活動に求められる期待値は大きく、それらを取り入れた日常生活の質的向上の取り組みが随所で見られるようになっています。近年、地域コミュニティにおけるスポーツ基盤の整備や生涯スポーツの機会の提供が進んでいます。他方、ボーダーレス化や商業化が急速に進み、レジャー・イヴェント・プロスポーツ・メディア等のスポーツ関連領域は巨大な市場を形成しています。このことは同時に、スポーツを媒介とした国際交流や国際貢献の可能性がさらに大きくなっていることを意味します。

このような状況を背景に、「スポーツ・健康科学プログラム」は学際的な性格を持つスポーツ科学と健康科学を基盤とし、スポーツや健康にまつわる問題を健康・医療・文化・ビジネス・サービス・行政等との関連の中で多面的かつ総合的に考察し、この分野に寄与できる人材の育成を目的としています。

本プログラムでは、従来の体育ないしはスポーツ講義・実技という枠組みではない多様なアプローチが可能になり、総合的かつ体系的な能力が養成されます。つまり、各学部におけるそれぞれの専門科目を履修しながら、当プログラムのスポーツ・健康科学の領域の中で各人が興味をもつ分野を深めていくことができます。そこでは、本プログラム独自に開講する演習科目を通じて専門的な研究を行います。

スポーツや健康に関わる社会的ニーズの増大と多様化によって、それに対応できる資質を備えた人材が今後さらに求められます。これまで教員の養成を主眼としてきたいわゆる教育・体育系学部とは異なり、本プログラムが社会の幅広い領域にマルチスペシャリストを送り出すことの意義は大きいのです。

２．2018 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
1	村井　剛	法学部	11	11	10	単独（A）/合併（B・C）
2	中谷　康司	経済学部	1	1	－	合併（A・B）
3	小峯　力	理工学部	7	16	11	単独（A・B・C）
4	加納　樹里	文学部	11	9	8	単独（A）/合併（B・C）
5	布目　靖則	文学部	5	1	－	単独（A・B）
6	森　正明	文学部	－	－	1	単独（C）
7	小林　勉	総合政策学部	6	6	5	単独（A・B・C）
合計			41	44	35	

３．プログラムスケジュール

4 月　　履修ガイダンス
　　第一回部門授業担当者委員会

6 月　　2019 年度募集に伴う総合ガイダンス

7 月　　第二回部門授業担当者委員会

9 月　　2019 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス

11 月　　2019 年度募集に伴う選考試験
　　学外活動（オリエンテーション・筑波大学）

12 月　　第三回部門授業担当者委員会
　　学内活動（期末成果報告会）

3 月　　FLP 修了発表
　　FLP 修了証書授与

４．プログラムの活動

①オリエンテーション

実 施 日： 2018 年 11 月 17 日(土) ～11 月 18 日(日)
実施都市： 茨城県つくば市
実施場所： 筑波大学
実施内容： スポーツ健康科学の最新理論・研究動向の学習、特別講演および施設見学
講演者 1： 遠藤　卓郎 氏（中央大学法学部兼任講師）
テ ー マ： 気功で知る体の使い方
講演者 2： 永嶋　秀敏 氏（中央大学文学部兼任講師）
テ ー マ： 身体活動と睡眠の関係について
講演者 3： 渡邉　仁 氏（筑波大学体育系助教）
テ ー マ： ASE の基礎理論、ASE の実践、ディブリーフィング、チームビルドへの展開

②期末成果報告会

実 施 日： 2018 年 12 月 15 日(土) 13:00～
実施場所： 中央大学　多摩キャンパス　6204 教室
実施内容： 各ゼミによる年度活動報告

５．これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先

電通、TBS テレビ、J リーグフォト、日刊スポーツ新聞西日本、ゴールドウィン、ランナーズ、琉球スポーツキングダム、川崎フロンターレ、楽天野球団、山形新聞社、三菱 UFJ 銀行、みずほフィナンシャルグループ、三井住友銀行、静岡銀行、山梨中央銀行、足利銀行、川崎信用金庫、大和証券、住友生命、三井住友海上火災保険、損害保険ジャパン、丸紅、日立製作所、富士重工、小松製作所、神戸製鋼所、大林組、キリンビール、サッポロビール、ロッテ、富士通、富士ゼロックス、ヤマト運輸、佐川急便、日本通運、東日本旅客鉄道、近畿日本ツーリスト、JTB コーポレートセールス、星野リゾート、東京テアトル、KDDI、NTT コミュニケーションズ、リクルートコミュニケーションズ、コクヨ、テルモ、セブン‐イレブン・ジャパン、日本公文教育研究会、休暇村協会、中央大学、警視庁、地方公務員（東京都庁など)、東京学芸大学大学院、順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻など

６．演習教育活動

（１）村井　剛（法学部・准教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

スポーツ心理（認知・行動）部分を知る

＜授業の概要＞

スポーツの技能と学習、心理的効果、心理的適応、動機づけ（モチベーション）、競技心理について、文献や実態を確認しながら理解を進めていきます。スポーツ愛好者、競技者、指導者、それぞれの立場からスポーツ心理を学んでいけるよう授業展開は計画します。

また、中央大学のスポーツ振興を目的として、体育連盟の運動部のプロモーション方策の検討、モチベーションビデオの作成を予定しています。

＜活動内容＞

メイン活動として、春学期はスポーツに関する心理、認知的な側面に関する文献の情報収集や実態の把握を中心に展開した。

秋学期に入り、B・C 生がメインに活動している調査、研究対象の見学、手伝い、データ収集、データ分析を担う形で作業も一部担った。

対象は体育連盟の女子バレーボール部、軟式野球部、アイスホッケー部の心理的側面の情報フィードバック、観客動員のための振興事業であった。

具体的には女子バレーボール部については心理的競技能力に関する情報収集とフィードバック、個人目標設定についてのフィードバック、軟式野球部についてはプレパフォーマンスルーティンに関するデータ収集とフィードバックを実施した。アイスホッケー部には観客動員を高めるために SNS による情報発信、ポスター配布、チケット配布や観戦状況のデータ収集も実施した。

C 生と共に、箱根駅伝予選会、箱根駅伝本戦も観戦し、身近に体育連盟を感じつつ、ゼミを通して部へどのように貢献していくかを考えるきっかけを得た。

特にモチベーションビデオ作製過程においては、駅伝主将をゼミへ定期的に招く形で部の内部状況を確認したり、ニーズをヒアリングしたり、競技スポーツ現場との密なつながりも形作ることができたため、B 生以降の活動への動機付けとして、またゼミ活動を自分ごとで取り組むための責任感も生むきっかけづくりのできた１年間であったと感じている。

見学調査においては上級生との合同合宿も実現し、学年を超えた交流と、強固な連携体制の構築ができた。冬季に予定している実態調査においては、調査に加えて 2019 年度の活動計画を固めることも目的としており、4 月前から様々な動きをスムーズに実行できる予定である。

＜見学調査＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 9 月 3 日(月)～9 月 6 日(木)

実施都市：沖縄県渡嘉敷村
実施場所：国立沖縄青少年交流の家
実施内容：マリンスポーツ体験が心身に及ぼす影響について
成　　果：アミラーゼ測定と質問紙調査によって効果測定を実施できた。

＜実態調査＞
対象演習：A・B・C
実 施 日：2019 年 2 月 27 日(水)～3 月 1 日(金)
実施都市：新潟県南魚沼市
実施場所：舞子スノーリゾート
実施内容：スノースポーツ活動時の唾液アミラーゼ活性に関する調査
成　　果：緊張時の唾液アミラーゼ活性について、先行研究結果を追認する成果を得ることができた。

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

スポーツ心理（認知・行動）部分を知る

＜授業の概要＞

スポーツの技能と学習、心理的効果、心理的適応、動機づけ（モチベーション）、競技心理について、文献や実態を確認しながら理解を進めた。スポーツ愛好者、競技者、指導者、それぞれの立場からスポーツ心理を学んでいけるよう授業展開は配慮した。

また、中央大学のスポーツ振興を目的として、体育連盟の運動部のプロモーション方策の検討、モチベーションビデオを作製した。

＜活動内容＞

メイン活動として、体育連盟の陸上駅伝ブロックのモチベーションビデオ作製支援事業を実施。併せて女子バレーボール部、軟式野球部、アイスホッケー部の心理的側面の情報フィードバック、観客動員のための振興事業も実施した。

＜見学調査＞

対象演習：C
実 施 日：2018 年 5 月 24 日(木)
実施都市：神奈川県相模原市
実施場所：相模原ギオンスタジアム
実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集
成　　果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：B・C
実 施 日：2018 年 5 月 25 日(金)・27 日(日)
実施都市：神奈川県相模原市
実施場所：相模原ギオンスタジアム
実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集
成　　果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：B・C
実 施 日：2018 年 6 月 30 日(土)
実施都市：埼玉県さいたま市
実施場所：浦和駒場スタジアム
実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集
成　　果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：B・C

実 施 日：2018 年 8 月 27 日(月)
実施都市：山形県上山市
実施場所：蔵王坊平アスリートヴィレッジ
実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集
成　　果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2018 年 9 月 3 日(月)～9 月 6 日(木)
実施都市：沖縄県渡嘉敷村
実施場所：国立沖縄青少年交流の家
実施内容：マリンスポーツ体験が心身に及ぼす影響について
成　　果：アミラーゼ測定と質問紙調査によって効果測定を実施できた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 10 月 20 日(土)
実施都市：神奈川県横浜市
実施場所：日本体育大学　健志台キャンパス　陸上競技場
実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集
成　　果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：B・C
実 施 日：2018 年 11 月 18 日(日)
実施都市：埼玉県上尾市
実施場所：上尾運動公園陸上競技場
実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集
成　　果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：B・C
実 施 日：2018 年 11 月 24 日(土)
実施都市：神奈川県横浜市
実施場所：慶應義塾大学　日吉キャンパス　陸上競技場
実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集
成　　果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：C
実 施 日：2018 年 11 月 24 日(土)
実施都市：東京都町田市
実施場所：法政大学　多摩キャンパス　陸上競技場
実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集

成　　果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

＜実態調査＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2019 年 2 月 27 日(水)～3 月 1 日(金)

実施都市：新潟県南魚沼市

実施場所：舞子スノーリゾート

実施内容：スノースポーツ活動時の唾液アミラーゼ活性に関する調査

成　　果：緊張時の唾液アミラーゼ活性について、先行研究結果を追認する成果を得ることができた。

（2）中谷　康司（経済学部・助教）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ

＜テーマ＞

身体感（観）と身体論

＜授業の概要＞

運動を成立させるためには、体を動かすための身体能力が重要です。しかし、一方で同じくらい外界や身体の状況を捉えるための感覚能力も重要になってきます。そのような身体感覚、身体感（観）といったものは自分たちの受けた教育・社会の考え方に知らず知らずのうちに左右されており、その影響は軽視できません。本演習では、運動について感覚を重視した視点から検討していきます。実技を通して身体感覚を再検討するとともに、運動に必要なシステムについて医学的な知識を学び、また身体についての捉え方（考え方）の基礎になっている思想的背景も検討していきます。担当教員の専門分野が東洋的な実技に立脚しているため、皆さんの地盤である東洋（日本を含む）を中心に検討を進めますが、西洋と東洋との異同を探ることを通して、各自の身体感（観）を浮き彫りにできると良いと思います。

本年度は、生理学的な知識を深めるとともに、それに関連した測定計画を立案し、実際の感覚と計測装置によって測定される客観的なデータを比較することを通して、自分たちの心身についての理解を深めます。

＜活動内容＞

本年度の中谷ゼミでは、前期に『よくわかる生理学の基礎（第２版)』（メディカル・サイエンス・インターナショナル）を通して、主に神経系や脳、心臓血管系、呼吸器系、代謝など、今後の実験に必要と考えられる生理学上の基礎知識を学習した。また、実験の計画・実施の方法などリサーチメソッドを学び、実際に実験のプロセスを体験することを通して、実験の実施にどのような注意や準備が必要かを修得した。

後期には、前期に学習した知識と実験方法を活かして、自分たちでテーマを決めて実験を立案、実施した。テーマは「自転車エルゴメーター課題による気分および脳血流と代謝系の変化」とした。測定項目として、気分の評価には気分プロフィールテストを用い、脳血流は近赤外分光法（NIRS）による総ヘモグロビン量の変化から推定し、その他、血中酸素濃度、心拍数、血糖値、血中乳酸値、血中ケトン体値などを測定した。様々な条件で実験を繰り返す中から、自転車エルゴメーターの負荷の強度や強度を上げる速度と脳血流の変化や気分改善の傾向において、1 つの可能性を見出すことが出来た。今後は、これまでに実施した予備実験で得られた仮説を立証するための実験を積み重ねていくことを目標としている。

これらの活動に加え、下記の見学調査および講演会（レクチャー）を通じて、専門的に実施される研究活動の施設やプロセスにも理解を深めた。これらの成果の一部は、実験データも含めて、スポーツ・健康科学プログラムの期末成果報告会において発表した。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B

実 施 日：2018 年 6 月 28 日(木)
実施都市：東京都世田谷区
実施場所：東京都医学総合研究所
実施内容：研究室および様々な実験設備の見学を実施した。
成　　果：専門の研究施設において、研究を実施する一連の設備を見学することによって、実際の研究のフローや必要となる研究施設など、実験・研究のイメージが構築できたとともに、研究専門職のライフスタイルや仕事に対する姿勢などを身近に体感することによって、研究者という職業についての認識を深めることが出来た。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 6 月 28 日(木)
講 演 者：平井　志伸 氏（東京都医学総合研究所）
演　　題：遺伝的脆弱性と食環境の組み合わせによる精神疾患発症モデルマウスの作成
実施都市：東京都世田谷区
実施場所：東京都医学総合研究所
実施内容：演題についての一般的な知識や研究の意義、最新の研究成果、またそこから将来的に期待できる社会的な恩恵について示唆を受けた。
成　　果：第一線の研究者から講義を受けることでテーマに関連する知識について体系だった深い理解が得られると共に、最新の研究成果を享受することが出来た。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 6 月 28 日(木)
講 演 者：岡戸　晴生 氏（東京都医学総合研究所）
演　　題：脳発達に必要な転写抑制因子 RP58
実施都市：東京都世田谷区
実施場所：東京都医学総合研究所
実施内容：演題についての一般的な知識や研究の意義、最新の研究成果、またそこから将来的に期待できる社会的な恩恵について示唆を受けた。
成　　果：第一線の研究者から講義を受けることでテーマに関連する知識について体系だった深い理解が得られると共に、最新の研究成果を享受することが出来た。

研究設備の見学

講演（レクチャー）を受ける様子

（3）小峯　力（理工学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

1）大学スポーツ振興（Sport for All）

2）スポーツと生命教育（Lifesaving）

＜授業の概要＞

東京オリンピック・パラリンピックに向け、大学スポーツ振興（戦略）について、その可能性を学際的に希究し、発表していく。

また、救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、スポーツに於ける安全（リスクマネジメント）を研究する。

＜活動内容＞

小峯ゼミは、ヒューマン・ウエルネスを骨子とし、特に 2020 東京オリンピック・パラリンピックに関連した実践を展開した。まず、オリンピック・パラリンピックでの救急救命ボランティアの参加に向けて、日本ライフセービング協会主催の BLS（Basic Life Support）講習会に参加し、資格を取得した。講習会を通してゼミ生は、BLS を「知っている」ではなく「実践できる」という自信を身につけ、もしもの時には周囲の人を自分が救うという使命感が芽生えた。

講習会を通して、オリンピック・パラリンピックにおけるボランティアの大多数を占めることが予想される大学生の BLS に関する知識を把握する必要があると考え、本学の学生を対象に、救命技術や AED に関する知識の度合いについてアンケート調査を実施した。調査は、Google フォームを用いて行い、学生 229 名（男性 96 名、女性 133 名）が対象となった。調査内容は、性別などのデモグラフィックデータ、BLS の手順などの知識に関する内容、それに傷病者に対して BLS を実施できるかなどの意識に関する内容で構成された。回答を整理した結果、講習会の参加回数が多い場合、BLS に関する正答率が他と比べ高いものの、全体的に正答率が低いことが明らかとなった。したがって、オリンピック・パラリンピックのボランティアとして大多数を占め得る大学生において BLS の理解を深める実践の展開が必要であると考えられた。

さらに、オリンピック パラリンピックをみすえ、BLS、スポーツ振興について議論を展開した。具体的には、ゼミ生の興味に応じて、3 つのグループを編成した。その一つであるスポーツ振興（中大スポーツ）では、オリンピック・パラリンピック開催に合わせ、本学のスポーツを盛り上げることを目的とし、オリンピック競技であり、2019 年に W 杯が日本で開催されるラグビー部を対象とした活動を行った。関係者へのヒアリング調査、実際に試合を観戦し、中大生の応援が少ないこと、他大学の応援に比べて盛り上がりに欠けることが課題として挙げられた。

来年度は上記の課題解決に向けた活動を行いつつ、東京オリンピック・パラリンピックの準備を通じて、救急救命（生命尊厳）とスポーツ振興を普及・啓発していく所存にある。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 9 月 18 日(火)～9 月 19 日(水)

実施都市：千葉県南房総市富浦町

実施場所：中央大学　富浦臨海寮

実施内容：講義、ライフセービングの実践を通して、人命救助の実際、及び仲間との救助・救援構築をもって防災力を高め、合宿生活による「仲間意識」を深める。

成　　果：ライフセービングの実践を通して、救助の際の細かい声かけや助け方、レスキューボードの使い方など、実際の救急救命の現場に求められる高度な技術や高い身体能力、救助の難しさを認識した。さらに事故が起きてから救助するのではなく、事故を未然に防ぐ予防こそが重要で、それを可能にする救急システムこそがライフセービングの本質であることを学んだ。講義やグループワーク、それにレクリエーションを通して、共感力の重要性を理解するとともに、お互いが共感し合うことで一体感が高まり、それぞれの個性がさらに磨かれることを学んだ。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

1）大学スポーツ振興（Sport for All）

2）スポーツと生命教育（Lifesaving）

＜授業の概要＞

東京オリンピック・パラリンピックに向け、大学スポーツ振興（戦略）について、その可能性を学際的に希究し、発表していく。

また、救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、スポーツに於ける安全（リスクマネジメント）を研究する。

＜活動内容＞

小峯ゼミは、ヒューマン・ウエルネスを骨子とし、特に2020東京オリンピック・パラリンピックに関連した実践を展開した。まず、オリンピック・パラリンピックでの救急救命ボランティアの参加に向けて、日本ライフセービング協会主催のBLS（Basic Life Support）講習会に参加し、資格を取得した。講習会を通してゼミ生は、BLS を「知っている」ではなく「実践できる」という自信を身につけ、もしもの時には周囲の人を自分が救うという使命感が芽生えた。

講習会を通して、オリンピック・パラリンピックにおけるボランティアの大多数を占めることが予想される大学生のBLSに関する知識を把握する必要があると考え、本学の学生を対象に、救命技術やAEDに関する知識の度合いについてアンケート調査を実施した。調査は、Google フォームを用いて行い、学生229名（男性96名、女性133名）が対象となった。調査内容は、性別などのデモグラフィックデータ、BLS の手順などの知識に関する内容、それに傷病者に対してBLSを実施できるかなどの意識に関する内容で構成された。回答を整理した結果、講習会の参加回数が多い場合、BLS に関する正答率が他と比べ高いものの、全体的に正答率が低いことが明らかとなった。したがって、オリンピック・パラリンピックのボランティアとして大多数を占め得る大学生においてBLSの理解を深める実践の展開が必要であると考えられた。

さらに、オリンピック パラリンピックをみすえ、BLS、スポーツ振興について議論を展開した。具体的には、ゼミ生の興味に応じて、3 つのグループを編成した。その一つであるスポーツ振興（中大スポーツ）では、オリンピック・パラリンピック開催に合わせ、本学のスポーツを盛り上げることを目的とし、オリンピック競技であり、2019年にW杯が日本で開催されるラグビー部を対象とした活動を行った。関係者へのヒアリング調査、実際に試合を観戦し、中大生の応援が少ないこと、他大学の応援に比べて盛り上がりに欠けることが課題として挙げられた。

来年度は上記の課題解決に向けた活動を行いつつ、東京オリンピック・パラリンピックの準備を通じて、救急救命（生命尊厳）とスポーツ振興を普及・啓発していく所存にある。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 9 月 18 日(火)～9 月 19 日(水)

実施都市：千葉県南房総市富浦町

実施場所：中央大学　富浦臨海寮

実施内容：講義、ライフセービングの実践を通して、人命救助の実際、及び仲間との救助・救援構築をもって防災力を高め、合宿生活による「仲間意識」を深める。

成　　果：ライフセービングの実践を通して、救助の際の細かい声かけや助け方、レスキューボードの使い方など、実際の救急救命の現場に求められる高度な技術や高い身体能力、救助の難しさを認識した。さらに事故が起きてから救助するのではなく、事故を未然に防ぐ予防こそが重要で、それを可能にする救急システムこそがライフセービングの本質であることを学んだ。講義やグループワーク、それにレクリエーションを通して、共感力の重要性を理解するとともに、お互いが共感し合うことで一体感が高まり、それぞれの個性がさらに磨かれることを学んだ。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

1）大学スポーツ振興（Sport for All）

2）スポーツと生命教育（Lifesaving）

＜授業の概要＞

東京オリンピック・パラリンピックに向け、大学スポーツ振興（戦略）について、その可能性を学際的に希究し、発表していく。

また、救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、スポーツに於ける安全（リスクマネジメント）を研究する。

＜活動内容＞

小峯ゼミは、ヒューマン・ウエルネスを骨子とし、特に2020東京オリンピック・パラリンピックに関連した実践を展開した。まず、オリンピック・パラリンピックでの救急救命ボランティアの参加に向けて、日本ライフセービング協会主催のBLS（Basic Life Support）講習会に参加し、資格を取得した。講習会を通してゼミ生は、BLS を「知っている」ではなく「実践できる」という自信を身につけ、もしもの時には周囲の人を自分が救うという使命感が芽生えた。

講習会を通して、オリンピック・パラリンピックにおけるボランティアの大多数を占めることが予想される大学生のBLSに関する知識を把握する必要があると考え、本学の学生を対象に、救命技術やAEDに関する知識の度合いについてアンケート調査を実施した。調査は、Google フォームを用いて行い、学生229名（男性96名、女性133名）が対象となった。調査内容は、性別などのデモグラフィックデータ、BLS の手順などの知識に関する内容、それに傷病者に対してBLSを実施できるかなどの意識に関する内容で構成された。回答を整理した結果、講習会の参加回数が多い場合、BLS に関する正答率が他と比べ高いものの、全体的に正答率が低いことが明らかとなった。したがって、オリンピック・パラリンピックのボランティアとして大多数を占め得る大学生においてBLSの理解を深める実践の展開が必要であると考えられた。

さらに、オリンピック パラリンピックをみすえ、BLS、スポーツ振興について議論を展開した。具体的には、ゼミ生の興味に応じて、3 つのグループを編成した。その一つであるスポーツ振興（中大スポーツ）では、オリンピック・パラリンピック開催に合わせ、本学のスポーツを盛り上げることを目的とし、オリンピック競技であり、2019年にW杯が日本で開催されるラグビー部を対象とした活動を行った。関係者へのヒアリング調査、実際に試合を観戦し、中大生の応援が少ないこと、他大学の応援に比べて盛り上がりに欠けることが課題として挙げられた。

来年度は上記の課題解決に向けた活動を行いつつ、東京オリンピック・パラリンピックの準備を通じて、救急救命（生命尊厳）とスポーツ振興を普及・啓発していく所存にある。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 9 月 18 日(火)～9 月 19 日(水)

実施都市：千葉県南房総市富浦町

実施場所：中央大学　富浦臨海寮

実施内容：講義、ライフセービングの実践を通して、人命救助の実際、及び仲間との救助・救援構築をもって防災力を高め、合宿生活による「仲間意識」を深める。

成　　果：ライフセービングの実践を通して、救助の際の細かい声かけや助け方、レスキューボードの使い方など、実際の救急救命の現場に求められる高度な技術や高い身体能力、救助の難しさを認識した。さらに事故が起きてから救助するのではなく、事故を未然に防ぐ予防こそが重要で、それを可能にする救急システムこそがライフセービングの本質であることを学んだ。講義やグループワーク、それにレクリエーションを通して、共感力の重要性を理解するとともに、お互いが共感し合うことで一体感が高まり、それぞれの個性がさらに磨かれることを学んだ。

（4）加納　樹里（文学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

身体活動とコンディショニング

＜授業の概要＞

前期教室授業は、スポーツ医・科学の基本を理解するために必要な課題や文献を、教員が提示して履修生が内容をまとめ、発表・討論を行う形で展開した。

後期からは、各自の興味、関心領域に応じて、B/C ゼミに参加することも認め、自身で関連する領域の資料を提示して発表・討論を行った。

＜活動内容＞

文献抄読では、主に以下のテキストを用いた。

・「これからの健康とスポーツの科学」講談社

・「サッカー医学テキスト」金原出版

・「子どものこころとからだを強くする」市村出版

・「トレーニング指導者テキスト」ベースボールマガジン社

教室外の活動としては、下記の見学調査の他、FLP スポーツ・健康科学プログラムの A 生を対象とした全体オリエンテーション合宿を実施し、全員が参加した。今まで体験したことのない領域での貴重な知験を積むことができ、今後この手法を学習し、自らが志願する子どもの身体活動サポートへ還元したいと希望する学生も出てきた。サッカーの医科学を学習するグループでは、後期、実技授業の協力を得て、GPS を用いた活動量の分析を行った。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 9 月 18 日(火)～9 月 20 日(木)

実施都市：福島県耶麻郡猪苗代町

実施場所：檜原湖

実施内容：A/B/C 合同で実施し、上級生の調査内容を聞いたり、相互の関心領域を確認し、共同でできることがないかを検討した。またゼミ生同士の交流をはかった。

成　　果：後期の共同作業が円滑に進められた。アウトドア活動を体験し、非競争的スポーツの可能性についても理解を深めることができた。ゼミに参加した学生同士は非常に仲が良くなり、今後の授業展開にもプラスの効果をもたらした。

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 9 月 18 日(火)

講 演 者：竹鼻　快 氏（株式会社 AC 福島ユナイテッド）

演　　題：スポーツを通した復興のビジョン

実施都市：福島県耶麻郡猪苗代町

実施施設：レイクサイドホテル みなとや
実施内容：競技団体でありながらも、地域の特性を考慮し、独自の視点でクラブとしての生き残りとアイデンティティーの確立を目指す、ユニークなクラブチームのノウハウを伺うことができた。
成　　果：直ぐにでも同クラブに就職したいと売り込む学生が出て来る程、感銘深く、興味深い内容を聴講することができた。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2019 年 1 月 8 日(火)
講 演 者：石原　智美 氏（株式会社 FiNC Technologies）
演　　題：アスリートの栄養サポート～貧血対応を中心として～
実施施設：中央大学　多摩キャンパス　3206 教室
実施内容：ゼミ教室にて PPT による基本的な栄養サポートのレクチャーを受け、その後各自が日頃から疑問に思っていることなどを中心に、Q&A を実施した。
成　　果：実際に貧血で悩むゼミ生を含めて、具体的なアドバイスを得ることができた。また、今後の一部部会への栄養サポート計画についても話し合うことができた。

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

身体活動とコンディショニング

＜授業の概要＞

B/C 生は各自が設定したテーマについての文献や調査結果を持ち寄り、抄読（紹介）、質疑応答の形式で教室授業を行った。後期からは一部 A 生（任意参加）も合流し、類似するテーマについてアドバイスをし、今後の共同作業について話し合った。一部では共同作業（測定等）を行った。

＜活動内容＞

今期より修了要件の履修単位数が減少したため、C 生は必ずゼミ論を提出することを義務として、ゼミ論をまとめた(具体的な内容はゼミ論集を参照)。

教室外の活動としては、下記の見学調査の他にゼミ生が自主的に参加した「運動部活動に関するパネルディスカッション」があり、その成果をゼミに生かしてもらった。

また、サッカーの医科学を学習するグループでは、実技授業の協力を得て、GPS を用いた活動量の分析を行った。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C
実 施 日：2018 年 9 月 18 日(火)～9 月 20 日(木)
実施都市：福島県耶麻郡猪苗代町
実施場所：檜原湖
実施内容：A/B/C 合同で実施し、上級生の調査内容を聞いたり、相互の関心領域を確認し、共同でできることがないかを検討した。またゼミ生同士の交流をはかった。
成　　果：後期の共同作業が円滑に進められた。アウトドア活動を体験し、非競争的スポーツの可能性についても理解を深めることができた。ゼミに参加した学生同士は非常に仲が良くなり、今後の授業展開にもプラスの効果をもたらした。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2018 年 9 月 18 日(火)
講 演 者：竹鼻　快 氏（株式会社 AC 福島ユナイテッド）
演　　題：スポーツを通した復興のビジョン
実施都市：福島県耶麻郡猪苗代町
実施施設：レイクサイドホテル みなとや
実施内容：競技団体でありながらも、地域の特性を考慮し、独自の視点でクラブとしての生き残りとアイデンティティーの確立を目指す、ユニークなクラブチームのノウハウを伺うことができた。

成　　果：直ぐにでも同クラブに就職したいと売り込む学生が出て来る程、感銘深く、興味深い内容を聴講することができた。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2019 年 1 月 8 日(火)
講 演 者：石原　智美 氏（株式会社 FiNC Technologies）
演　　題：アスリートの栄養サポート～貧血対応を中心として～
実施施設：中央大学　多摩キャンパス　3206 教室
実施内容：ゼミ教室にて PPT による基本的な栄養サポートのレクチャーを受け、その後各自が日頃から疑問に思っていることなどを中心に、Q&A を実施した。
成　　果：実際に貧血で悩むゼミ生を含めて、具体的なアドバイスを得ることができた。また、今後の一部部会への栄養サポート計画についても話し合うことができた。

（写真：ゼミ合宿：野外活動体験セーリング）

（5）布目　靖則（文学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

野外教育および自然体験学習の理論と実践について学習する。また、野外活動の安全管理、野外活動を通した安全教育の可能性について探る。関連領域の資格取得に挑戦する。

＜授業の概要＞

自然レクリエーションの中から「登山（無雪期）」や「スキー」を取り上げ、その運動特性や心理的効果、プログラム展開の手法、安全管理、内外の動向等について学習する。また、野外における活動主体の立場から環境問題に関する理解も深める。

＜活動内容＞

・自己紹介、ガイダンス
・10 分間プレゼン（アウトドアスポーツに関する新聞報道から）
・英語文献の購読
・テント設営
・地図とコンパス
・アウトドアクッキング
・山行食の基本
・スポーツ映画鑑賞（サッカーW 杯関連）
・見学調査について
・スキーの内在危険性
・リスクマネジメントの理論と実践
・バランス系トレーニングの理論と実践
・期末成果報告会の準備
・実態調査について
・その他

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 8 月 7 日(火)～8 月 10 日(金)
実施都市：福島県檜枝岐村
実施場所：尾瀬国立公園周辺
実施内容：尾瀬国立公園周辺山域におけるトレッキングの実践とトレッカーの環境意識についての聞き取り調査を行った。
成　　果：初中級の登山技術を習得するとともにトレッカーの環境意識について聞き取りを行った。そして、その成果の一部を期末成果報告会にて発表した。

対象演習：A・B

実 施 日：2018 年 9 月 18 日(火)～9 月 19 日(水)
実施都市：東京都奥多摩町
実施場所：氷川キャンプ場
実施内容：都市近郊キャンプ場の利用状況と施設管理者の安全対策について見学を行った。
成　　果：都市近郊にあって比較的交通の便が良い河川敷キャンプ場の利用実態および施設管理者の安全対策（特に増水や遊泳の問題）について見学を行った。成果の一部は期末成果報告会にて発表した。

対象演習：A
実 施 日：2019 年 2 月 4 日(月)～2 月 9 日(土)
実施都市：新潟県妙高市
実施場所：赤倉観光スキー場
実施内容：赤倉観光スキー場において、「スノースポーツ安全基準」がどのように利用者に周知されているかについて、スキー場管理者および市政担当者から聞き取り調査を行った。また、スキーの安全教育について、実践を通して学習した。
成　　果：アウトドア活動に必要不可欠な安全管理のあり方について、実際にスキー場を訪問し、聞き取り調査や検分を行うことができた。スキー資格の取得については、参加者全員が全日本スキー連盟の級別テスト 3 級レベルをクリアすることができた。

妙高山麓の雪原を XC スキーしていて見かけた動物の足跡

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

野外教育および自然体験学習の理論と実践について学習する。また、野外活動の安全管理、野外活動を通した安全教育の可能性について探る。関連領域の資格取得に挑戦する。

＜授業の概要＞

自然レクリエーション、とりわけ野外教育の理論について学習するとともに、その実践能力を高める。

＜活動内容＞

・野外教育における安全管理
・キャンプと環境教育
・自然レクリエーションのルール
・ツーリズム
・アンケート調査法
・キャンプと冒険教育
・自然レクリエーションのマナー
・リゾート開発と自然保護
・自然レクリエーションと事故、判例
・その他

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 8 月 7 日(火)～8 月 10 日(金)
実施都市：福島県檜枝岐村
実施場所：尾瀬国立公園周辺
実施内容：尾瀬国立公園周辺山域におけるトレッキングの実践とトレッカーの環境意識についての聞き取り調査を行った。
成　　果：初中級の登山技術を習得するとともにトレッカーの環境意識について聞き取りを行った。そして、その成果の一部を期末成果報告会にて発表した。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 9 月 18 日(火)～9 月 19 日(水)
実施都市：東京都奥多摩町
実施場所：氷川キャンプ場
実施内容：都市近郊キャンプ場の利用状況と施設管理者の安全対策について見学を行った。
成　　果：都市近郊にあって比較的交通の便が良い河川敷キャンプ場の利用実態および施設管理者の安全対策（特に増水や遊泳の問題）について見学を行った。成果の一部は期末成果報告会にて発表した。

（6）森　正明（文学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

大学スポーツ、中大スポーツ振興

＜授業の概要＞

大学運動部やスポーツ同好会の組織、大学スポーツのマネジメント（競技力向上や地域スポーツクラブ育成のための事例–早稲田方式、立命館方式、関大方式等)、大学スポーツ応援文化の醸成とクラブ文化の醸成など。

＜活動内容＞

2018 年度は、ゼミ生 1 名のため FLP 他のゼミ生や関連部会の協力を得て、7 月の「モノレールクラシコ」の実施に全力を注いだ。

何よりも体育会関連学生の関心やそれ以外の学生の動員をメインテーマにして 3 年間活動を繰り広げてきたので、その集大成として取り組んだ。

本学硬式野球部、明星大学硬式野球部の協力も得てこれまで以上の事前準備も整い、広報態勢も磐石であった。

しかしながら、前日からの大雨、当日の雨が残りグランド不良で中止となった。

こうした状況を想定した広報(緊急連絡態勢)も完璧だったので何の問題もなく終了した。

後期は、文学部の「現代社会とスポーツ」の特に体育連盟学生とともに各々の部会の「クラブ化」「学生動員への工夫」などをテーマに具体的な、取り組み（案）を作成し、討議プレゼンを実施した。

期末交流会での報告、ゼミ活動のまとめレポートを提出して終了した。

（7）小林　勉（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

＜授業の概要＞

Ｊリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

＜活動内容＞

小林ゼミは、北海道根室管内での現地調査をもとに、急増する外国人観光客をターゲットとしたスポーツ・ツーリズム・「根室ランチウェイ」構想の政策提言を行った。また、小林ゼミＢ生を中心としたＪリーグ公式戦のプロデュース活動のサポート活動を展開し、次年度に控える本格的なプロデュース活動の基盤づくりを行った。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 4 月 12 日(木)～4 月 16 日(月)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：イオン秋田中央店
実施内容：9 月開催の小林ゼミプロデュースのＪリーグ公式戦の PR 活動と市民の意識調査
成　　果：数百名という単位の秋田市民を対象に、当該活動の PR 活動と研究課題に関連する意識調査を実施することができた。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 9 月 13 日(木)～9 月 16 日(日)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田・他
実施内容：小林ゼミによるＪリーグ公式戦のプロデュース活動
成　　果：各関係機関と連携しながら、秋田でのＪリーグ公式戦プロデュースを成功裏に終えることができた。一連の活動は、スポーツを通じた社会開発の事例として、

また産官学連携の取り組みとしても秋田県内で大きく注目され、秋田県内の各メディアでも紹介された。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

＜授業の概要＞

Ｊリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

＜活動内容＞

小林ゼミは、秋田でもＪリーグ公式戦のプロデュース活動へ向け、各ステークホルダーたちと連携しつつ、全国でも珍しい大学研究室によるＪリーグ公式戦のプロデュースを行った。当該活動は単なるイベント企画にとどまらず、Ｊリーグというプラットフォームの活用可能性について多方面から検討される契機ともなり、その一連の活動はＪリーグチェアマンから関心を寄せられるなど、地域貢献活動の一つとして秋田県内外にて認知度を高めつつある。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 4 月 12 日(木)～4 月 16 日(月)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：イオン秋田中央店
実施内容：9 月開催の小林ゼミプロデュースのＪリーグ公式戦の PR 活動と市民の意識調査に関するアンケートの実施。
成　　果：数百名という単位の秋田市民を対象に、当該活動の PR 活動と研究課題に関連する意識調査を実施することができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 6 月 9 日(土)～6 月 11 日(月)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田・他
実施内容：Ｊリーグ公式戦のプロデュース活動の準備
成　　果：ホームゲームプロデュースへ向け、民間企業及びスポーツ組織など、各ステークホルダーとの連携を深めることができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 6 月 30 日(土)～7 月 2 日(月)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田・他
実施内容：J リーグ公式戦のプロデュース活動の準備
成　　果：ホームゲームプロデュースへ向け、民間企業及びスポーツ組織など、各ステークホルダーとの連携を深めることができた。

対象演習：B・C
実 施 日：2018 年 7 月 10 日(火)～7 月 12 日(木)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田
実施内容：J リーグ公式戦のプロデュース活動の準備
成　　果：ホームゲームプロデュースへ向け、民間企業及びスポーツ組織など、各ステークホルダーとの連携を深めることができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 8 月 5 日(日)～8 月 11 日(土)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田
実施内容：J リーグ公式戦のプロデュース活動の準備
成　　果：ホームゲームプロデュースへ向け、民間企業及びスポーツ組織など、各ステークホルダーとの連携を深めることができた。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

＜授業の概要＞

Ｊリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

＜活動内容＞

小林ゼミは、秋田でもＪリーグ公式戦のプロデュース活動へ向け、各ステークホルダーたちと連携しつつ、全国でも珍しい大学研究室によるＪリーグ公式戦のプロデュースを行った。当該活動は単なるイベント企画にとどまらず、Ｊリーグというプラットフォームの活用可能性について多方面から検討する契機ともなり、その一連の活動はＪリーグチェアマンから関心を寄せられるなど、地域貢献活動の一つとして秋田県内外にて認知度を高めつつある。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：B・C
実 施 日：2018 年 7 月 10 日(火)～7 月 12 日(木)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田
実施内容：Ｊリーグ公式戦のプロデュース活動の準備
成　　果：ホームゲームプロデュースへ向け、民間企業及びスポーツ組織など、各ステークホルダーとの連携を深めることができた。

対象演習：C
実 施 日：2018 年 9 月 13 日(木)～9 月 16 日(日)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：あきぎんスタジアム・他
実施内容：秋田でのＪリーグ公式戦のホームゲームプロデュースを行った。
成　　果：プロデュースの中心となるB生に対して、前年度の経験とネットワークを生かし多方面の支援活動を行い、円滑な業務遂行を展開した。一連の成果は秋田県

内の各種メディアでも紹介され、スポーツによる地域活性化の可能性について広く情報発信をすることができた。

対象演習：C
実 施 日：2018 年 9 月 14 日(金)～9 月 15 日(土)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：あきぎんスタジアム
実施内容：秋田での J リーグ公式戦のホームゲームプロデュースを行った。
成　　果：プロデュースの中心となる B 生に対して、前年度の経験とネットワークを生かし多方面の支援活動を行い、円滑な業務遂行を展開した。一連の成果は秋田県内の各種メディアでも紹介され、スポーツによる地域活性化の可能性について広く情報発信をすることができた。

Ⅴ．地域・公共マネジメントプログラム

１．設置の趣旨と教育の目的

2000 年 4 月に地方分権一括法が施行され、地方自治体は国から権限を委譲されるとともに自己管理・自己責任のもとに政策の立案・運営を求められることになりました。

また、東日本大震災や福島原発事故など複合的な災害に見舞われ、被災地を中心として多くの地域の人々の生活が脅かされている現状があります。

このような状況の中で、2014 年には、「まち・ひと・しごと創生法」が成立し、少子高齢化への対応や東京圏への人口集中の是正を推進することが明示され、2018 年の「改正地域再生法」では、企業の東京からの移転や市町村の商店街活性化、空き店舗活用の支援などが盛り込まれました。

しかし、それでもなお、それぞれの地域は、非常に複雑かつ多様化した様々な問題を抱えています。少子高齢化の進行と福祉、地場産業や商店街の衰退、地域の環境、治安、教育に関する問題、市町村合併や財政赤字の拡大、そして安全・安心な生活の場の喪失など公共的な重要課題が山積し、住民の不安・不満が高まっています。このような状況に対処するには、行政だけでなく、地域の人々も、「新しい公共」という考え方で、独自に創造的な戦略をもって取り組む素地ができつつあります。様々に複合する課題を抱えた地域を目の当たりにして、市民による健全なまちづくり・コミュニティづくりへの参画がますます高まっているのです。

このような状況のなか、地域社会において学際的かつ総合的な取り組みにより、多様な社会的課題の解決策を策定するなど、公共マネジメントの政策形成を担える有能な人材の養成が強く求められています。

これらの社会的要請を鑑み、それぞれの地域における諸問題に対して、学際的総合的にアプローチを進め、これを解決する高度な専門的解決能力を有する人材の養成を目的とした教育演習活動を本プログラムでは展開しております。2018 年度は、プログラム全体イベントとして、北海道根室エリア（根室市・別海町・中標津町・標津町・羅臼町）をケーススタディとし当地にてフィールドワークを実施の上、行政や市の関係者との間で実地見聞と調査を元に中間報告を行い、多摩校舎にも関係者をお招きして最終報告発表を行いました。

本プログラムでは、公務員志望の学生だけでなく、政界やNPOでの活動を通じて地域の社会問題に積極的に関与し、問題解決に取り組んでいきたいという志の高い学生、商店街や都市の建設・インフラ整備など民間企業においても都市計画・都市運営に積極的に関与したいなど地域問題に対して高い学習意識を持っている学生のニーズにも積極的に応えていきます。

２．2018 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
1	工藤　裕子	法学部	10	10	6	合併（A・B・C）
2	山﨑　朗	経済学部	7	6	2	単独（A・B・C）
3	斯波　照雄	商学部	－	11	8	合併（B・C）
4	根本　忠宣	商学部	7	5	5	合併（A・B）/単独（C）
5	御船　洋	商学部	－	14	15	単独（B・C）
6	植野　妙実子	理工学部	－	4	5	合併（B・C）
7	天田　城介	文学部	12	6	－	単独（A・B）
8	新原　道信	文学部	14	12	2	単独（A・B・C）
9	黒田　絵美子	総合政策学部	8	11	6	単独（A・B・C）
10	小林　勉	総合政策学部	5	5	4	単独（A・B・C）
11	関　有一	総合政策学部	10	－	－	単独（A）
12	堤　和通	総合政策学部	8	5	2	合併（A・B・C）
13	細野　助博	総合政策学部	－	5	8	合併（B・C）
合計			81	94	63	

３．プログラムスケジュール

4 月　　履修ガイダンス
第一回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
第二回部門授業担当者委員会

6 月　　2019 年度募集に伴う総合ガイダンス

7 月　　第三回部門授業担当者委員会

9 月　　2019 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
学外活動（サマースクール・根室エリア）

11 月　　2019 年度募集に伴う選考試験

12 月　　第四回部門授業担当者委員会
学内活動（サマースクール成果報告会・期末成果報告会）

3 月　　FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

４．プログラムの活動

①サマースクール

実 施 日： 2018 年 9 月 17 日(月)～9 月 20 日(木)
実施都市： 北海道根室エリア（根室市・別海町・中標津町・標津町・羅臼町）
実施場所： 根室市役所・他
実施内容： 現地調査と政策提言（市役所及び町役場・他企業及び外部団体へのヒアリング）

②サマースクール成果報告会・期末成果報告会

実 施 日： 2018 年 12 月 15 日(土) 12:30～
実施場所： 中央大学　多摩キャンパス　8103 教室
実施内容： サマースクール参加ゼミによる成果報告
各ゼミによる年度活動報告

５．これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先

法務省、厚生労働省、国土交通省、特許庁、参議院事務局、東京国税局、裁判所事務官、東京都庁、京都府庁、千葉県庁、埼玉県庁、神奈川県庁、岐阜県庁、長野県庁、新潟県庁、山梨県庁、岩手県庁、板橋区役所、江東区役所、江戸川区役所、大田区役所、北区役所、渋谷区役所、千代田区役所、練馬区役所、港区役所、多摩市役所、昭島市役所、羽村市役所、町田市役所、三鷹市役所、武蔵野市役所、渋川市役所、蕨市役所、川崎市役所、小田原市役所、相模原市役所、横浜市役所、宇都宮市役所、韮崎市役所、松本市役所、名古屋市役所、鈴鹿市役所、堺市役所、神戸市役所、福島県警察本部、都市再生機構、四国電力、沖縄電力、日本銀行、みずほフィナンシャルグループ、岩手銀行、北越銀行、山梨中央銀行、多摩信用金庫、横浜信用金庫、明治安田生命、SMBC 日興証券、日本総合研究所、ベネッセコーポレーション、マイナビ、明治乳業、鈴与、日立パワーソリューションズ、伊藤忠丸紅鉄鋼、本田技研工業、ヤンマー、ダイキン工業、NEC ソリューションイノベータ、インテリジェンス、電通九州、東急コミュニティー、京成電鉄、西日本鉄道、舞浜リゾートライン、イトーヨーカ堂、セブン‐イレブン・ジャパン、東京大学大学院法学政治学研究科、早稲田大学大学院法務研究科、中央大学大学院（法学研究科、文学研究科、公共政策研究科）など

６．演習教育活動

（１）工藤　裕子（法学部･教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

地域資源を活かした地域経営を考える：そのための地域資源の再発見・再評価、マネジメント

＜授業の概要＞

少子高齢化や地方分権化の中でさまざまな問題に直面している地域経営について、その地域に特有の資源（人材、財源、歴史文化、政治、地勢など）をいかに再発見し、再評価するか、さらにそれらをいかにマネジメントするか、を世界、特に大陸ヨーロッパ諸国の事例および日本の事例を通じて検討、考察する。地域経営の問題点について、文献およびフィールド調査で整理、理解したうえ、主に関係者へのヒアリングを通して日本のベストプラクティスを分析し、また海外事例の収集、調査を行う。過疎地域の再生事例として、中部イタリアの中山間都市にてワークショップ、研修を行うことを演習の一環とする他、日本の地方自治体でのフィールド調査も実施する。事例として扱うのは主に、諸資源が限定されている中小都市であり、大都市あるいは大都市圏における戦略等は対象としない。

＜活動内容＞

演習 A は、春学期冒頭に社会科学の調査方法、プレゼンテーションの仕方、レポートの書き方等を学んだ後、国内実態調査（静岡県掛川市）を実施した。実態調査のための事前学習、調査テーマの決定、訪問先の選定、主要質問事項の確定などを行い、実態調査時にはヒアリング・インタビューを実施し、調査後の追加質問などを実施したうえ、春学期末に政策提言のプレゼンテーションを行い、また夏休みには個人レポートを作成した。春学期の後半はまた、サマースクールの準備をも実施した。秋学期は、海外実態調査の準備作業を進めつつ、サマースクールの最終報告、報告書作成などの日程に合わせ、サマースクールのまとめの作業も進めた。サマースクールについては、観光政策に関する政策提言を行ったうえ、報告書を作成した。秋学期後半は海外実態調査の準備を中心に実施し、春休みに海外実態調査（イタリア、エミリア＝ロマーニャ州）を実施する。

演習 B については、春学期は前年度末春休み中に実施したイタリア研修の報告書作成の作業および各人の関心テーマを踏まえた卒論テーマの選定を中心に個人研究発表と討論を進めた。春学期の後半はまた、夏休みに実施する演習 B のみの国内実態調査の準備を行った。演習 A 時に実施した海外実態調査を踏まえ、それぞれが関心を持つテーマを持ち寄り、演習 B 全体として調査するテーマの決定、訪問先の選定、訪問先機関との調整などを行い、夏休みに演習 B としての国内実態調査（北海道）を実施した。秋学期にはこの研究成果をゼミで発表したうえ、卒論のテーマを選定し、個人による研究発表を行った。春学期に作成した海外実態調査の報告、国内実態調査の報告、各人の研究テーマについてのレポートを含む B 生の一年間の活動記録をまとめた報告書を作成した。

演習Cについては、春学期にそれぞれの卒論のテーマを最終決定したうえ、執筆計画を作成、夏休みから秋学期にかけて論文を執筆、完成させた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A
実 施 日：2018年6月2日(土)～6月3日(日)
実施都市：静岡県掛川市
実施場所：掛川市役所
実施内容：掛川市の生涯学習活動、市民と行政の協働、企業の役割、農業振興、福祉政策、観光政策および観光まちづくり、交通政策、中心市街地の活性化についてなどヒアリングおよび調査
成　　果：掛川市の生涯学習活動の成果、行政と市民との協働のあり方などを学んだ他、中心市街地におけるまち歩きを通して、商店街の活性化等について調査した。市役所の関係者、コミュニティ活動に従事している人々、企業経営者等へのヒアリングを通して、現地調査、ヒアリングを中心とする社会調査の方法を学んだ。また、事前調査、事後のフォローアップの方法、そしてそれらを政策提言としてまとめ、プレゼンテーションおよびレポートにまとめる、という一連の作業の進め方についてマスターした。

対象演習：A
実 施 日：2018年9月17日(月)～9月20日(木)
実施都市：北海道根室市
実施内容：サマースクール
成　　果：サマースクールへの参加は、演習Aとしては二回目の社会調査であったため、ヒアリングの手法がかなり身に付き、そのため、事後のフォローアップについても自主的に実施した。政策提言のために必要な事項および資料を追加調査することができた。テーマとしては交通の利便性に関する諸課題を克服するための観光政策について研究、発表した。

対象演習：B
実 施 日：2018年9月18日(火)～9月20日(木)
実施都市：北海道札幌市
実施場所：小樽あんかけ焼きそば親衛隊・さっぽろオータムフェスト実行委員会・札幌市保健福祉局高齢者福祉部･札幌市役所まちづくり政策局政策企画部政策推進課･北海道庁地域創生局地域戦略課・総務省北海道総合通信局情報通信部情報通信振興課・北海道庁総合政策部情報統計局情報政策課
実施内容：ヒアリング
成　　果：演習A時に実施したイタリア研修を受けて、災害対策、ICTの活用、食を通じた地域振興、観光まちづくりなどが研究のテーマとして選択され、これらすべ

てについて調査が可能な都市を探した結果、最終的に北海道札幌市が調査対象に選ばれた。この実態調査においては、調査対象へのコンタクトからはじまり、調査の設計、ヒアリングの実施、事後のフォローアップ、政策提言のまとめ、報告書の作成までに一連の作業を自分たちだけで行うことができた。

対象演習：A
実 施 日：2019 年 2 月 23 日(土)～3 月 6 日(水)
実施都市：チヴィテッラ・ディ・ロマーニャ・他（イタリア）
実施施設：ファッジョーリ農場・他
実施内容：EUのプロジェクト等でもよく知られるアグリツーリズム農場であるファッジョーリ農場を拠点とし、小規模自治体および私企業、大学、組合等の活動が活発なエミリア＝ロマーニャ地域の地域振興政策について、地方自治体、地域振興に関係する組合や公社、および企業家へのヒアリングおよび体験学習を通じて、調査した。
成　　果：海外においてもヒアリング、インタビューを行い、本格的な調査が実施できた。特に、日本では限界集落と呼ばれるような地域においても、地産地消、観光、アグリツーリズム、スローフードなどによって活性化することが可能であることを知ることができた。地域振興政策に関連し、イタリアの商業活動について複数の市役所に対してヒアリングを行ったほか、諸政策による地域振興およびコミュニティの活性化について、複数の市役所等に対してヒアリングを行った。地元企業、組合組織、団体などを訪れヒアリングを行った他、伝統産業や農業のブランド化などを実施している企業や個人のもとで体験学習を行った。

（2）山﨑　朗（経済学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

地域のグローバル化、プレミアム化による地域創生

＜授業の概要＞

インバウンド、輸出、輸入代替、高度外国人人材の活用および地域資源による地域創生

＜活動内容＞

山﨑ゼミ演習 A では、主に山﨑朗著『地域創生のデザイン』、『地域創生のプレミアム戦略』を輪読して行く中で、地方創生についての知見を広めた。また、日本の地方や海外のプレミアム、インバウンドに関する事例研究も積極的に行い、FLP サマースクール in 根室に向けた準備を進めた。その後、サマースクール in 根室では、北海道標津町で実施したヒアリング調査や体験型観光を通して、標津町内ではなぜインバウンド観光が厳しいのか、体感することができた。そして、標津町でどういった手法を取り入れれば、1 人でも多くの観光客が訪れてもらえるのかについて、ゼミ生同士で議論し合い、中間報告会に向けて準備を進めた。サマースクールを終えてからは、サマースクールでの反省や、期末報告会に向けたパワーポイント、報告書の作成を行った。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A

実 施 日：2018 年 9 月 4 日(火)～9 月 5 日(水)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：国民生活センター

実施内容：FLP サマースクール in 根室に向けて、研究テーマの設定やヒアリング内容の検討を実施した。また、担当教員による地ビールに関するレクチャーを実施し、地域創生の理解を深めた。さらに、KJ 法を活用し、ゼミ生同士で様々な切り口からインバウンド観光に関する知恵を出し合った。

成　　果：標津町での質問内容が決定したことで、標津町役場の方にも事前に連絡できたため、スムーズにサマースクールに臨むことができた。また、ゼミ生同士の団結力が増し、より効率よく報告会に向けての準備を進めることができた。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

地域創生の新しいデザイン

＜授業の概要＞

新しい地域間格差についての認識を深め、その格差是正に向けての新しい地域創生政策や「非空間的政策」の活用策について学習する。

＜活動内容＞

山﨑ゼミ演習 B では、実態調査をもとに論文を作成した。前期は、サマースクールへの準備として「地域創生のデザイン」、「地域創生のプレミアム戦略」を輪読し、理解を深めた。サマースクールで訪れた根室地区では、ナショナルトラスト活動である知床 100 平方メートル運動について調査した。後期は、「自然や文化を活かした魅力ある地域づくり」をテーマに懸賞論文へ応募した。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B（サマースクール）

実 施 日：2018 年 9 月 17(月)～9 月 20 日(木)

実施都市：北海道根室エリア（標津町）

実施場所：標津町役場・他

実施内容：ナショナルトラスト活動による保全地の観光活用

成　　果：論文作成

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

人口減少・知識経済化・国際化時代の地域創生

＜授業の概要＞

これまでに学習してきた、インバウンド地方創生、グローバル地域創生、クリエイティブ地域創生、プレミアム地域創生などのなかで、興味のある課題、テーマを選び、各人が自主的に調査・研究し、その成果を卒業論文としてまとめる。また、適切な懸賞論文の募集があった場合には、懸賞論文に応募する。

＜活動内容＞

山﨑ゼミ演習 C では、地域創生に関する新たな取り組み事例や地域創生に生かせそうな事例や論文の執筆に関する統計データ、資料を収集し、それらについて研究を行った。また、研究の成果を生かして、みずほ学術振興財団第 60 回懸賞論文に応募した。なお、本ゼミで昨年度作成した論文は、みずほ学術振興財団第 59 回懸賞論文において佳作を受賞している。

地域創生において“雇用の創出”は重要である。しかし、持続的かつ大きな発展を見込める事業を生み出すことは容易ではなく、人口減少に悩む多くの自治体が頭を悩ませている。

今後大きな雇用を生み出すのは、どのような企業なのであろうか。この問題について検討することは、地域創生に対する示唆となり得ると考え、今後成長していく企業の特性や条件についての考察を、みずほ学術財団の懸賞論文の「明治 150 年：日本経済の過去・現在・未来」という論文のなかでまとめることとした。

執筆した懸賞論文の要旨は以下のとおりである。

日本は、イギリスやドイツよりも遅れて資本主義化した先進国である。そのため、資本集約的な当時の先端産業については、イギリスでみられたような自発的、自律的な企業の誕生ではなく、政府による上からの意図的な企業創出が行われ、その後それらの官営企業が民間企業へと転換した。戦前、戦後、そして近年に至るまで、三菱、住友、三井などの財閥系企業が日本経済の中枢を握ったのは、そのこととも関連している。

しかし、バブル経済崩壊以降、三井住友銀行などのような、以前では考えられなかった財閥系企業間の合併が行われるようになり、また財閥の名称をはずす企業も現れている。さらに、日本経済の中枢を担う企業は、財閥系企業から、ソフトバンク、楽天、ユニクロ、メルカリなどの新興企業へと移行しつつある。とりわけ、現代の社会では情報技術の発達が著しく、IT 関係の企業が急成長を遂げている。また、この情報技術の進化は、企業や組織に所属せずに一人でも働くことを可能にさせ、フリーランスの人口やテレワークを推進する企業が増加した。

財閥や大企業に就職すれば「生涯安泰」という風潮はなくなりつつある。日本経済を引率していた企業の多くは、欧米の技術を模倣し、性能を向上することで利益を上げてきた。しかし、その役割はアジア地域の企業に交代し始めている。むしろ、価格競争の面で日本企業は不利な状態となり、対抗すればするほど、悪循環を招く状況となっている。日本の企業組織や働き方は今、転換期を迎えているのである。

本論文は、明治 150 年間の日本の企業システムに焦点を当て、日本企業の形態の変遷を概観しつつ、未来の企業や社会の在り方、さらなる技術革新によって、日本の企業システムの未来や将来の働き方がどのようにシフトしていくのかについて考察した。

（3）斯波　照雄（商学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

比較都市史研究

＜演習のスケジュール＞

2018 年度前期には、3 年生(FLP 演習 B)は 2 年次春休みの姫路市合宿において行った市役所でのヒアリング内容、収集したデータ、資料の整理を行い、それらを分析して、姫路市の概要、工業、商業ならびに中心市街地、観光についての各レポートをまとめた。レポートを仕上げていく過程では、各自のまとめている内容についての口頭発表を行い、グループ毎に修正を繰り返しながら、12 月に総括をまとめて全体報告書を作成した。1 月には姫路市のこれからの発展に向けての政策提言、展望を加え、姫路市についての冊子『共同研究報告書』を完成させた。

4 年生(FLP 演習 C)は、前期には 3 年生が春休みに調査合宿を行った姫路市に関するテーマ別レポート作成に助言し、協力するとともに、各ゼミ生はそれぞれ研究対象とする都市ならびにテーマを決定し、資料収集を開始した。後期には各自が設定したテーマに基づいて収集した資料を分析し、論文作成に向けた口頭発表を行った。口頭発表した内容を文章化し修正を繰り返して、最終的に 1 月に FLP ゼミの卒業論文集を完成させた。

＜活動内容（学内・学外・講演会等）＞

演習 B、C ともに個人指導を基本として、作成過程において随時口頭発表を行いながら文章にまとめ、添削、修正を繰り返し、それぞれテーマ別のレポート、論文をまとめた。

2018 年度 FLP 演習 B ゼミ生は、前年度 2 月に国内実態調査を行った姫路市についての報告書冊子『中央大学 FLP 斯波ゼミ共同研究報告書―姫路市について―』を作成した。

2018 年度 FLP 演習 C ゼミ生は、姫路市における産業構造、観光ならびに中心市街地活性化に関する実態調査に向けての準備過程、調査合宿に際し、合宿に参加してゼミ B 生に助言、協力した。それとともにゼミ生それぞれが研究対象に決定した都市について各自卒業論文を完成させ、『2018 年度 FLP 斯波ゼミ卒業論文集』を作成した。

（4）根本　忠宣（商学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ

＜テーマ＞

地域における雇用創出について考える

＜授業の概要＞

地域における雇用の場に着目して、地域発展を支えるための雇用創出の可能性について徹底的に考える。具体的には、以下の点に着目して学習を深めていく。

【共通】

●自己雇用の場としての商店
●地域経済における中小企業の役割
●創業の場としての地域
●地域経済発展におけるイノベーションの役割
●地域コミュニティとソーシャルビジネス
●地域経済の発展を支えるインフラとしての金融、行政

【A 生】

・サマースクールへの参加と報告書の作成
・橋本商店街活性化プロジェクトへの参加

【B 生】

・伊東市並びに橋本商店街活性化プロジェクトへの参加と提案企画書の作成
・ゼミ交流会への参加と報告書の作成

＜活動内容＞

根本ゼミは、授業内の演習活動ではまちづくりに関する本や論文を輪読し、まちづくりに関する知識を深めた。また、フィールドワークとして、A 生はサマースクールのほか相模原市橋本でのイベントに、B 生は静岡県伊東市で行なわれた「伊東湯のまちバル」や「ゼミ交流会」に参加しまちづくりの実態について学んだ。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A
実 施 日：2018 年 5 月 16 日(水)・17 日(木)・18 日(金)・19 日(土)・20 日(日)・21 日(月)
実施都市：神奈川県相模原市
実施場所：伊勢丹相模原店
実施内容：株式会社三越伊勢丹相模原店が主催する「さがみはらマルシェ」にて、相模原市商業観光課が取りまとめ、出店する「推しミヤゲ」の商品販売の補助を行った。「さがみはらマルシェ」とは市内で生産されている銘菓や名産品を紹介、販売する、いわゆる物産展のようなものであった。
成　　果：「推しミヤゲ」の販売補助にあたり、相模原市商業観光課の担当者や「推しミヤゲ」の製作者（つまり商店の経営者など）と関わることができ、相模原市で相

模原市のためにお菓子などを製作することの役割ややりがいを伺うことができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 6 月 1 日(金)～6 月 3 日(日)
実施都市：北海道札幌市
実施場所：北海道大学　札幌キャンパス・他
実施内容：他大学と合同の研究成果発表および討論会
成　　果：今回の研究内容に関する討論を行うことでこれまでにはなかった多角的・客観的な視点を身につけることができた。また、他大学の研究にも触れることで、普段の演習内ではあまり扱うことのなかった経済分野の専門的知識を得ることができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 6 月 18 日(月)
実施都市：静岡県伊東市
実施場所：伊東商工会議所
実施内容：伊東湯のまちバルに向けた討論
成　　果：伊東湯のまちバルでの根本ゼミ担当企画のプロデュースを行なったが、その内容は現状では実施が難しいものも多くあり、現状分析の重要性を学ぶことができた。また、伊東商店街周辺を視察し、伊東のまちについての理解を深めた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 6 月 23 日(土)
実施都市：東京都八王子市
実施場所：道の駅八王子滝山
実施内容：道の駅駅長へのインタビュー調査
成　　果：駅長へのインタビュー調査を行なうことで道の駅の現状や課題のほか、八王子滝山ならではの現状や問題点を把握することができた。また、今回のインタビュー調査前に立てた仮説とは異なる結果が得られたことから、仮説の重要性を学ぶことができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 7 月 10 日(火)
実施都市：静岡県伊東市
実施場所：伊東商工会議所
実施内容：伊東湯のまちバルに向けた討論
成　　果：前回の討論に引き続き根本ゼミプロデュースの企画の調整を行なったが、伊東湯のまちバル実行委員会の方との情報の行き違いがあり、企画の運営において

正確な情報共有の大切さを学んだ。また、地元の方のお話を聞き、伊東のまちについての理解を深めることができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 8 月 7 日(火)
実施都市：静岡県伊東市
実施場所：伊東マリンタウン
実施内容：「伊東湯のまちバル」内フォトロゲイニング企画のための調査
成　　果：「伊東湯のまちバル」で根本ゼミが企画したフォトロゲイニングを行なったが、フォトスポットを決める際に改めて伊東のまちの魅力に気づくことができ、自分の足でまちを歩くことの大切さを学んだ。また、初めて来た場所の良さを伝えることの難しさを、フォトラリーの企画を通して伝えることができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 9 月 2 日(日)
実施都市：静岡県伊東市
実施場所：伊東商工会議所
実施内容：根本ゼミが企画したフォトロゲイニングについての話し合いやその他「伊東湯のまちバル」についての調整
成　　果：フォトロゲイニング企画のフォトスポットについて根本ゼミとして提案したが、実際には権利関係の問題で設置できない場所や行政の許可が必要で時間を要する場合などがあり、小さなイベント 1 つにも住民だけでなく行政の協力も不可欠であると改めて実感することができた。また、「伊東湯のまちバル」新規参加店舗の方に FLP のことを知っていただける機会となった。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 9 月 12 日(水)～9 月 13 日(木)
実施都市：静岡県熱海市
実施場所：川奈駅周辺
実施内容：サマースクール、ゼミ交流会に向けた討論および実地調査
成　　果：A 生はサマースクール期末成果報告会に向けての提言内容の議論を、B 生は調査対象である伊東と同じ伊豆半島にある川奈周辺において、伊東とその周辺の観光客の移動といったまち同士の関係性について調査し、この 2 つの地域は重要な関連性を持っていることが分かった。サマースクール期末成果報告会に向けての提言内容の議論では、A 生だけでなく B 生も議論に参加し新たな視点を加えることで、より良い政策提言を行うことができた。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 10 月 4 日(木)

実施都市：神奈川県相模原市
実施場所：橋本商店街協同組合事務局
実施内容：10 月 27 日に開催される橋本ハロウィンフェスティバルのための会議に参加した。会議には初参加であったため、橋本商店街の方々との顔合わせと今後の流れの確認を行った。
成　　果：ハロウィンフェスティバルを行うことの目的、運営リーダーのハロウィンフェスティバルへの思い、私たち大学生のこれからの役目、当日までのスケジュールを確認することができた。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 10 月 6 日(土)
実施都市：東京都渋谷区
実施場所：代々木公園
実施内容：サマースクールの提言案の参考にするために北海道産品を使ったグルメなどを楽しめるフェアを見学した。また、根室市でお世話になった方々も出店されていたため、ご挨拶に伺った。
成　　果：今回のフェアのようなイベントの根室エリアでの開催の提言を念頭に置いた中での見学であったが、考えの甘さを痛感した。東京の代々木公園で、約 100 店舗もの出店者が参加するからこそ、イベントとして成立していることを目の当たりにし、提言案の修正を進めることとなった。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 10 月 14 日(日)
実施都市：神奈川県相模原市
実施場所：橋本商店街協同組合事務局
実施内容：10 月 27 日に開催される橋本ハロウィンフェスティバルのための会議に参加した。ハロウィンフェスティバルにてスタンプラリー・パレード・子供の遊び場・ナイトパーティを行うに当たり、それぞれの具体的な実施方法、販売物、周知方法などについて会議した。私たちは特に、担当する子どもの遊び場にてどのような飲食物を販売するかについて検討した。
成　　果：実際に橋本で自分の店舗をしている方々とともに、参加者（地元住民）がどれくらいの金額なら飲食物を買うか、その金額内でどのように収益を出すかを考えつつ、販売物とその値段を決定するという、地域で商店を経営する・創業するのに必要な経験を積むことができた。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 10 月 21 日(日)
実施都市：神奈川県相模原市
実施場所：相模原総合補給廠

実施内容：相模原市役所が事務局となっている「さがみはらフェスタ」の運営補助を行った。相模原スイーツフェスティバルのブースにて、来場者に最新版の推しミヤゲの試食の提供、そのうちNo.1を決める投票の呼びかけ、ガラポンの案内を行った。

成　　果：前回と同様のイベントではあるが、開催時期、開催場所、案内商品が異なっていたことから、地元の方や出店者の方の新たな視点の話を伺うことができ、比較することができた。

対象演習：A

実 施 日：2018年10月25日(木)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：橋本商店街協同組合事務局

実施内容：橋本ハロウィンフェスティバル当日直前の会議に参加した。当日の全体の流れ、各自の役割、会場のレイアウトなどについて商店街の担当者の方々と最終確認を行った。

成　　果：数千人が参加することが予測されるイベントの最終確認ということでかなり細かい確認作業を行ったが、淡々と進むわけではなく、全員に明確にコンタクトを行っていくやり方は今後の参考になると考えられる。

対象演習：A

実 施 日：2018年10月27日(土)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：橋本商店街協同組合事務局

実施内容：橋本ハロウィンフェスティバルの本番当日であった。私たち根本ゼミ生は子供の遊び場のレイアウト配置やテント設営と、その場での飲食物の販売（焼きそば・綿あめ・ジュースなど）を行った。

成　　果：25日に綿密な確認を行ってはいたが、人手が足りないなどの不測の事態に陥った。しかし、各自が臨機応変に対応することでイベント自体を大成功に終えることができた。やはり、現場にでると、指揮系統に囚われない動きというものがある程度必要になることを学べた。また、フェスティバルに参加している子どもたちやその保護者の方々との様々な話を通し、このフェスティバルのようなイベントは子どもも大人も楽しむことができるから、地元商店街に加え、自治体としても積極的に支援していくことが重要であると認識できた。

対象演習：B

実 施 日：2018年11月1日(木)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：伊東マリンタウン

実施内容：伊東マリンタウン駅長へのインタビュー調査

成　　果：ゼミ交流会での研究テーマの調査対象である伊東マリンタウンにおいて駅長にインタビューを行い、道の駅と行政、地域の商店街との関わりや道の駅設立による地域経済・地域観光への影響について知ることができた。

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 11 月 3 日(土)
実施都市：静岡県伊東市
実施場所：伊東市内
実施内容：伊東湯のまちバルの運営
成　　果：A 生は伊東湯のまちバルに参加することで伊東のまちへの理解を深めることができ、また運営にも参加することで課題を発見し、次回の伊東湯のまちバルへの参考とすることができた。B 生は自らが企画したイベントを実際に運営することで、企画段階では気づくことのできなかった新たな課題を発見し、これは 12 月に行なったゼミ交流会の研究にも生かすことができた。

対象演習：B・C
実 施 日：2018 年 11 月 4 日(日)
実施都市：静岡県伊東市
実施場所：伊東市内
実施内容：伊東湯のまちバルの運営
成　　果：前日とは参加店舗も異なり、またあいにくの雨で参加者も少なかったことから、様々な場面で楽しめるよう工夫したイベントづくりが大切であると学んだ。また、この日は運営としてのほかに参加者として「伊東湯のまちバル」に参加し、運営側と参加者側には大きな視点の違いがあることに気づくことができた。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 11 月 25 日(日)
実施都市：神奈川県相模原市
実施場所：アリオ橋本
実施内容：21 日に行った相模原スイーツフェスティバルにて住民などに投票されて選ばれた第 2 回「推しミヤゲ」スイーツ総選挙の表彰式イベントの運営補助を行った。当日の会場設営、ガラポン抽選券配布、ガラポンの運営、マスコットグリーティングを行った。
成　　果：ガラポンの担当として、備品の設置、等賞の決定、景品の配布や、さらに、相模原市マスコットキャラクターの「さがみん」として、またその付添人としてグリーティングを行うことで、市役所職員同様の働きを体験し、公務員として地域のイベントを作り上げるという貴重な経験を積むことができた。

＜コンテスト等受賞履歴＞

ゼミ交流会　優秀論文賞（第 2 位）

（2018 年 12 月 8 日実施）

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

地域に関する研究論文の作成

＜授業の概要＞

卒業論文の作成

＜活動内容＞

通常授業内ではA・B生とともに輪読を行ったほか、A・B生が主体となって行なっていたサマースクールや伊東湯のまちバル等のフィールドワークにも参加し、座学にとらわれない幅広い活動を行なった。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：C
実 施 日：2018年6月18日(月)
実施都市：静岡県伊東市
実施場所：伊東商工会議所
実施内容：伊東湯のまちバルに向けた討論
成　　果：昨年「伊東湯のまちバル」の運営に携わった経験をふまえ、B生とともに根本ゼミ担当企画のプロデュースを行なったが、昨年の段階では気づくことのできなかった課題を見つけることができた。また、こうした地域のイベントに携わることで得た知識や経験は卒業論文の参考になった。

対象演習：B・C
実 施 日：2018年11月4日(日)
実施都市：静岡県伊東市
実施場所：伊東市内
実施内容：伊東湯のまちバルの運営
成　　果：昨年は伊東について中途半端な知識で実行委員会として参加したため伊東について参加者に聞かれても答えられない場面が目立ったが、その反省を生かし、今回は積極的に参加者に声をかけてオススメスポットなどを案内することができた。また、２回目の参加で新たな課題を発見することができた。

（５）御船　洋（商学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

地域経営と地方財政

＜授業の概要＞

地方財政や地方分権の現状はどうなっているのか、現段階における課題は何か、課題解決に向けた方策にはどのようなものが考えられるか、といった点を問題意識として共有し、地方財政や地方分権の今後のあり方について検討した。また、地方財政の再建や地方分権の一層の推進は、地域経済の活性化と不可分の関係にあるので、地域の経済発展を促すにはどのような方法があるかについても分析視野に入れて議論した。

加えて、昨今の少子高齢化、グローバル化、地域間格差、貧困、雇用の悪化、都心部の衰退、山間部の限界集落の増大等々の変化は、地方財政運営の根底を揺るがす重要な要因になっている。この授業では、このような問題をひとつひとつ取り上げながら、地方財政のあり方、国と地方の役割分担、公と民の役割分担等について考察した。

＜活動内容＞

演習 B では、演習 A で学んだ地方財政に関する基本的な概念、用語、理論を実際の分析に生かすべく、地方自治体の行財政運営に関する実態調査を踏まえた財政分析を積極的に行った。

前期の前半には、2017 年度末（2018 年 3 月 12 日～14 日）に新潟県湯沢町で実施したヒアリング調査をもとに、報告書の作成を行い、湯沢町役場に送付した。

前期の後半には、夏休み期間中に行う予定の東京都豊島区のヒアリング調査に関する事前調査および質問表の作成を行った。結局、諸事情により、豊島区役所を直接訪問してのヒアリングはできなかったが､電話やメール等により頻繁にやり取りを行って質問の回答を集め、後期前半にそれらをもとに報告書を作成して豊島区役所に送付した。

さらに、11 月 6 日には、東京都府中市役所を訪問してヒアリング調査を行ったが、これについても、事前調査、質問表の作成・送付を行い、ヒアリング調査後には政策提言を含む報告書を作成し、府中市役所に送付した。

以上の活動に加え、演習 B では、地方財政や地方分権の実際の動きを常にフォローし、現在どういう問題が起きているかということをゼミ生全員で共有するために、毎月 1 回、担当者を決めて「ニュース報告」を行ってもらい、それについて全員で議論する機会を設けた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：B

実 施 日：2018 年 11 月 6 日(火)

実施都市：東京都府中市

実施場所：府中市役所

実施内容：「府中市の財政分析」というテーマの下、府中市の所管課でヒアリングを行った。

成　　果：「財政」「公共施設マネジメントと施設活用」「市民意見の取り込み」の 3 分野に関する質問事項を事前に所管課に送り、当日のヒアリングは、ゼミ生の事前質問への回答および補足説明という形で進められた。府中市が取り組んでいるさまざまな事業やサービスの現状について詳しく話を聞くことができ、大変有意義であった。また、府中市役所に提出したわれわれの報告書に対し、所管課の方々から詳細なコメントが寄せられ、大変勉強になった。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

地域経営と地方財政

＜授業の概要＞

各自、研究テーマを決め、研究内容および論文構成を検討し明確化したうえで、計画に沿って資料収集や分析等の準備を進め、4 年修了時までに卒業論文を完成させた。

＜活動内容＞

演習 C では、毎回、ゼミ生が卒業論文の中間報告を行い、その報告をめぐってゼミ生全員で議論し、質疑応答や意見交換を行うことを通じて、論文内容の改善や修正に役立てた。そして期末に卒業論文を完成させ、それらを編集して論文集を作成し、全員に配布した。

卒業論文のテーマは、さいたま市の財政分析、地域ブランドによる地域活性化の促進、地方自治体におけるソーシャル・インパクト・ボンドの発展、練馬区の交通対策、地方自治体における乳幼児医療助成制度、静岡県の財政分析、国分寺市の財政分析、宮古市の財政分析と被災自治体の歳入構造比較､武蔵小杉駅周辺の再開発とエリアマネジメント､等であった。

（6）植野　妙実子（理工学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

【演習 B】男女共同参画社会の推進–少子化克服とともに考える

【演習 C】男女共同参画社会の実現

＜授業の概要＞

日本では 2017 年の出生率は 1.43 となり前年より降下した。生まれる子どもの数も 1973 年には 209 万人であったが、現在は 94 万人余となった。他方で、2000 年頃より共働き世帯が男性雇用者と無業の妻から成る世帯よりも多くなっており、現在では男性雇用者と無業の妻から成る世帯の 2 倍近くにまでいたっている。すなわち、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という性別役割分担は、意識はともかく、現実には崩れている。それならば、この現実を前にして自由や平等に基づく社会制度をいかに構築するかが問われる。少子化は先進国に共通の問題とされているが、フランスのように克服した国もある。フランスでは 2016 年には出生率 1.96 であり、この高い出生率を支える制度として、手厚くきめ細かな家族手当、子どもをもつ家庭に有利な所得税制、多様な保育サービス、基本的に 35 時間労働法制で男女ともに短い労働時間、5 週間の年次有給休暇などがあげられる。したがって、出産期女性の高い労働力率を維持しながらも高い合計特殊出生率を維持することができている。しかもフランスではジェンダーメインストリームという考え方をとりながら少子化を克服している。つまり、男女平等を基本として政策を考えるということである。日本の場合は、結婚・出産に対する価値観の変化や養育コストの増大などが少子化の原因と指摘されている。また現実には男女の役割分担構造が崩れているにもかかわらず、男女平等を基本とした社会制度構築ができていない。そこで、女性には仕事も育児もと負担が二重にかかり、仕事は非正規・パートタイマーとして続けるケースが多く、結果として、男女の賃金格差や昇格格差が埋まってはいない。男女の役割分担意識はいまだに強く、子育ては女性の仕事という考えも根強い。

ところで、子どもの数や子育て世代の人口が減るとそれに伴って社会構造も変化する。小児科医のなり手が少なくなる、学校の統廃合が進むなど、子どもを育てることが困難な環境がますます進んでいく。子どもを産み、育てようという意欲自体もうすらぐことになる。少子高齢社会の最大の問題点は、労働力が少なくなる一方で、高齢者が増え、そちらの方にも様々な対策（年金や医療費など）が必要になる。少子化の問題は、女性が働き続けて晩婚化が進むことが原因といわれるが、女性も男性と同様に、もっている能力をいかして社会で活躍するのは当然である。フランスでは女性の社会進出を支える政策を次々と生み出しながら、同時に少子化も克服した。そうした例に学びながら、少子化を克服しつつ真の男女平等社会をどのように確立したらよいかを考える。なお、演習の柱は、基本事項に関する講義、実態調査の準備と実行、調査報告書の作成、プレゼンテーションであった。

＜活動内容＞

2018 年度、植野ゼミの B 生・C 生は、ともに根室市におけるサマースクールに参加し、さ

らに植野ゼミ独自の調査として、「山梨県の男女共同参画社会とワーク・ライフ・バランスのあり方」をテーマに山梨県庁においてヒアリングを行った。

根室市においては、根室市役所、根室商工会議所、教育委員会、市民団体の kirakira などにヒアリングをした。根室市において、共働き家庭の増加がみられる中でどのような子育て支援サービスがとられているのか、現状と課題をうかがった。また市役所自体でどのようなワーク・ライフ・バランスや男女共同参画への取り組みが行われているのかもうかがった。その結果、意識として重要性が認識されてはいるものの、十分な職員配置が行われず、取り組みが不十分であることがわかった。何といっても根室市の課題は人口減少であるが、ワーク・ライフ・バランスの進展や男女共同参画社会の形成をアピールして、人口流出を止めること、若年人口を取り戻すことが望まれると思った。

山梨県を調査対象に選んだ理由は、必要とされているにもかかわらずなかなか実現できない、病児保育を行なっていたからである。山梨県庁において、病児保育のみならず、その他の男女共同参画社会の形成やワーク･ライフ･バランスの浸透についての対策をうかがった。その結果、病児保育の広域利用や産前・産後ケアセンターの充実など利用しやすい政策、市役所内のトップダウン方式のイクボス宣言などのユニークな政策をとっていることがわかり、非常に参考になった。また市レベルと県レベルの政策の違い、県が市町村に働きかけたり、介入したりすることで広域的に政策を進めるという県の役割も認識できた。山梨県も人口流出、とりわけ労働力の流出に悩む県であった。それゆえ、外国人労働者の受け入れに積極的な姿勢がみえた。他方で山梨県には中小企業が多く、県が男女共同参画社会の形成やワーク・ライフ・バランスの浸透に力を入れている割には企業には響いていないようにも感じた。翌日、勝沼のいくつかのワイナリーの見学も行なったが、観光資源として良いものをもちながらも交通網が発達していないなど、まだまだ対策を進めるべきところがあるようにも感じた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：B・C

実 施 日：2018 年 10 月 31 日(水)～11 月 1 日(木)

実施都市：山梨県甲府市

実施場所：山梨県庁

実施内容：県民生活部県民生活･男女参画課においては男女共同参画の推進に関する政策、産業労働部労政雇用課においては企業における男女平等やワーク・ライフ・バランスの促進に関する政策、福祉保健部子育て支援課においては病児保育と子育て支援事業に関する政策、福祉保健部健康増進課においては産前・産後ケアセンター、主に宿泊型産後ケアについての政策、総務部人事課においては市役所内での男女平等やワーク・ライフ・バランスの推進についてお話をうかがった。

成　　果：病児保育の広域利用や産前・産後ケアセンターの充実など利用しやすい政策、市役所内のトップダウン方式のイクボス宣言などのユニークな政策をとっていることがわかった。また市レベルとは異なる県の仕事のあり方も認識できた。

（7）天田　城介（文学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

＜授業の概要＞

現代日本社会においてどのように人びとは生きていくことが可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所として地域がある。その地域においてどのような仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことを可能にしたり、困難にしたりしているのかを探求する。

演習 A では、ゼミ生のそれぞれの問題関心を大事にしつつもゼミで共通のテーマを見出しながら、サマースクールでのフィールドワークを実施すると同時に、一年間を通じて東京郊外（具体的には八王子・多摩・日野地域など）をフィールドにインテンシヴなフィールドワークを実施し、それらをもとに徹底的に分析・考究していくことになる。演習は当該地域のテーマに関する基本文献の講読と同時に、受講生の研究発表を中心に進める。報告者・司会者・討論者といった役割を毎回決めて、受講生による主体的なゼミ運営を行う。

＜活動内容＞

2018 年度は、前期では 9 月 17 日(月)～20 日(木)に実施された「中央大学 FLP 地域・公共マネジメントプログラム平成30年度サマースクール in 北海道根室エリア」の準備もかねて、八王子市・多摩市・日野市などの都市郊外が戦後日本社会においてどのように形成されたのかを学習しながら、ジェンダー・貧困・格差・差別・労働・教育・福祉などを切り口に新聞記事やドキュメンタリーなどの具体的事例を読み解いた。当初、6 月からは自分たちの足元である八王子市・多摩市・日野市を中心に貧困や困難を抱えている家庭を訪問したり、超高齢化する市営住宅を訪問したり、コンビニやファミレス等のオーナーがどのようなしんどさを抱えているのかインタビューしたり、市議会等のローカルな意思決定の場でどのような議論がなされ予算が執行されているか等々を調査する予定であったが、サマースクールにおける研究計画書の作成、質問項目の設定、インタビュー対象者の選定などに大きな時間を割かざるを得なかったため、今年度はサマースクールでの調査を重点的に実行することにした。同時並行して調査を進めてしまうと、いずれも中途半端になってしまうことを回避するために優先課題を選択したのではあるが､演習 A 単独のゼミ運営は調整が必要であると判断した。

その後、サマースクール調査の主題を「羅臼町に住む子どもを持つ母親の苦悩と葛藤」とし、当該テーマを「ジェンダー」と「労働」の視点から解読するという形で調査を設計した。こうした調査設計のもとでより緻密かつダイナミックな調査を行うための準備を進めていった。こうしたインタビュー調査を実行し、その結果・考察・政策提言をサマースクール最終日の成果報告会で報告した。

後期は、インタビュー調査を実施した羅臼子育て支援センターありんこ、羅臼町社会福祉協議会、羅臼町役場保健福祉課、羅臼町役場まちづくり課、羅臼幼稚園、羅臼小学校、羅臼漁業協同組合で聞き取りしたデータをもとに、分析作業を行った。データのコーディングを

行うと同時に、過去の先行研究や行政資料等を読み解くことを通じて結論をまとめた。

上記の調査の結果として、【1】羅臼町では幼い子供を抱える母親のうち「専業主婦」の割合が他の自治体と比して高いが、実際には漁業などの家の手伝いなどで忙しくしていることが多く、「一時的に預かってほしい」などのニーズを抱えていること、【2】しかしながら、保育園は実際に雇用されて働いている母親の利用を前提にしており、また、幼稚園はそのような一時預かりサービスの十分でないため、家の手伝いをしていたり、パートタイムで働いている女性たちは子育てインフラに対する不満を抱えていること、【3】その結果、延長保育や病児保育、民間サービスの利用がパートタイムで働く女性にとってコストが高いものとならざるを得ないこと、【4】他方、フルタイムで働いている女性たちも子育てインフラが十分でないため、病児保育や急用などの時にサービスを利用することが困難な状況にあることを明らかにした。

加えて、上記に対する政策提言として、【1】ファミリー・サポート・センターの再構築をするなどして「新たな預かり場所」を作ること、とりわけ子どもを持つ母親のための一時的な預かり場所をつくること、【2】限定的、閉鎖的な関わりではなく、地域全体で関わることのできる場所をつくること、具体的には「羅臼どさんこハウス」（仮称）や地域でのイベントなどを行うことを通じて、コミュニティを創出・再構築することを提唱した。

上記を 12 月 15 日(土)の期末成果報告会でその結果をまとめ報告したところ、幸いにも参加してくださった方々からも高い評価を得ることができ、大変実りある報告会となった。

年度末は FLP 報告書の作成を行うと同時に、2019 年度より本格的に実施する東京郊外調査プロジェクト（八王子市・多摩市・日野市）のフィールドワークを検討した。具体的には、東京郊外調査プロジェクトを当該自治体や支援団体と共同で進めながら、定期的に調査報告会を実施し、最終的には調査報告書として完成するための年間計画等を議論した。

全体としては、学生たちは非常に熱心かつ緻密にインタビュー調査や質問票調査に取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になったと思う。2019 年度に本格的な調査プロジェクト始動に向けた社会調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A

実 施 日：2018 年 5 月 15 日(火)

講 演 者：相良　翔 氏（埼玉県立大学保健医療福祉学部）

演　　題：薬物依存からの「回復」に関する社会学的研究-ダルクにおけるフィールドワークを通じて

実施施設：中央大学　多摩キャンパス　3201 教室

実施内容：薬物依存者たちのセルフヘルプ・グループである八王子ダルクを対象に研究に取り組んできた埼玉県立大学教員の相良翔氏による講演を行った。FLP 天田ゼミでは、八王子・多摩・日野地区を対象地にした上で、当該地域で困難を抱えた人びとがどのような生活を営み、自らが支え合う実践を行っているのか等のフィールドワークを実施しているため、2018 年度第 1 回ゲスト講義として、薬

物依存者たちのセルフヘルプ・グループである八王子ダルクの代表の社会関係を分析してきた相良翔氏による講演を行った。

成　　果：相良翔氏は社会学者として長期に及ぶフィールドワークを実施する中で当該テーマを検討してきた第一人者であることから、当事者の視点からみた世界を記述することの醍醐味や困難について報告していただいた。今後のゼミでのフィールドワークを分析する上で大きな理論的な視点を提示していただいた。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 5 月 15 日(火)
講 演 者：加藤　隆 氏（ダルク八王子代表）
演　　題：ダルク八王子を語る
実施施設：中央大学　多摩キャンパス　3201 教室
実施内容：薬物依存者たちのセルフヘルプ・グループである八王子ダルクの代表を務める加藤隆氏による講演を行った。
成　　果：加藤隆氏は八王子ダルクの代表として、薬物依存症者たちのセルフヘルプ・グループを運営する上での困難や八王子という地区における運営上の困難を知り、まさにどのようにして八王子ダルクがお互いに支え合う仕組みを作ることができているのか等の観点から講演していただいた。当事者によるセルフヘルプ・グループの運営の問題への理解が深まると同時に、地域におけるセルフヘルプ・グループの意味を深く理解することができた。今後のゼミ運営にとっても大きな効果となった講演であった。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 6 月 19 日(火)
講 演 者：岡本　晃明 氏（株式会社京都新聞社）
演　　題：現代史を捉え直す-部落差別と運動をめぐって
実施施設：中央大学　多摩キャンパス　3201 教室
実施内容：京都新聞社社会担当部長兼論説委員であり、現代社会を緻密かつ鮮やかに記述するジャーナリストである岡本晃明氏による講演を行った。関西での生活困窮者や薬害被害者や障害者や病者の支援にも関わりながら、それらをもとに『折れない葦』という特集にまとめ（新聞協会賞受賞）、また関西における各種戦争に関する資料を紐解きながら、記録・記憶と断絶と継承について再考した「時を渡る舟」を記し、私たちの社会においてどのような軍学共同の研究実践が行われてきたのかを連載にした「帝国の骨」を発表し、そして、現在は貧困や部落差別とその運動をめぐる歴史を紐解きながら、現代史を再考する取材を続ける岡本氏の講演は今後の研究の発展に大きく寄与するものであった。
成　　果：50 年前に京都・東九条で被差別部落出身の高校生が撮影した自主映画「東九条」という幻のフィルムにおいて「失われた音声部分」「封印された経緯」を導きの糸に地域で聞き書き取材を行うと同時に、著名な建築学者である西山卯三（京

都大学教授）による驚異的な京都の被差別部落／不良住宅のスケッチを読み解きながら、当時の研究者たちの思想とその時代精神を読み解こうとしており、そのような取材経験の観点から「現代史を読み直すことの意義」を講演していただいたことで、学生たちの問題理解は大きく深まることになった。また、当事者たちへのインタビュー調査を踏まえてどこまで、どのように書くことができるかという研究倫理（報道倫理）についても考える契機となることになり、その後のゼミ運営にとってきわめて大きな効果・成果となるものであった。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

＜授業の概要＞

現代日本社会においてどのように人びとは生きていくことが可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所として地域がある。その地域においてどのような仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことを可能にしたり、困難にしたりしているのかを探求する。

演習 B では、ゼミ生のそれぞれの問題関心を大事にしつつも、一年間を通じて八王子市・多摩市・日野市等々のフィールドワークを実施し、その分析・考察を繰り返し行い、適宜、発表を行っていく。これらの調査を通じて「生存の空間としての地域」というテーマを徹底的に分析・考究していくことになる。演習は当該地域のテーマに関する基本文献の講読と同時に、受講生の研究発表を中心に進める。報告者・司会者・討論者といった役割を毎回決めて、受講生による主体的なゼミ運営を行う。

＜活動内容＞

前期は、共通する問題関心をもとに複数のグループに分けて、それぞれのグループごとで研究計画を作成し、調査対象者を選定し、実際に調査対象者に調査依頼をして調査を実行した。また、インタビュー調査のデータのコーディング作業を行って、詳細かつ緻密な分析作業をできるだけ丁寧に行うようにした。

具体的には、研究計画書の考え方や書き方などを学んだ上で、先行研究や各種資料等々をしっかりと下調べしながら、研究計画書を作成したのち、研究計画書を何度もブラッシュアップしながら、実際の具体的なフィールドワークでの調査計画を検討した。その後、質問項目の設定、インタビュー対象者の選定などをできるだけ丁寧に行った。

その後、各グループで「外国人労働者の権利」「障害をもつきょうだいをもつ人びと」「教育と貧困」「高齢者の社会関係」などのテーマを設定し、具体的な調査設計のもとでより緻密かつダイナミックな調査を行うための準備を進めていった。こうしたインタビュー調査を実行し、前期終了段階でその成果を確認した。

2018 年 8 月 22 日(水)～24 日(金)において夏期フィールドワークを実施した。このフィールドワークでは、「日本最大ドヤ街」と称される日雇い労働者の街である釜ヶ崎（あいりん地区）をはじめ、不安定な労働や貧困を余儀なくされてきた人びと、また関西で最も大きな被差別部落の一つである住吉区の差別と排除の歴史、そして在日コリアンが集住する生野区での丁寧なフィールドワークを通じて、その歴史とを知ると同時に今日における「地域実践」の現実を理解した。こうした夏期フィールドワークで収集したデータを分析し、年度末にフィールドワーク成果報告書としてまとめた。

後期は、夏期フィールドワークの分析に加え、前期のフィールドワークの結果を踏まえ、新たに調査を設計し直し、実際のフィールドワークを実施した。後期後半からは FLP 報告書の作成を行うと同時に、2019 年度に更に展開する東京郊外調査プロジェクト（八王子市・多

摩市・日野市）のフィールドワークについて検討した。具体的には、東京郊外調査プロジェクトを当該自治体や支援団体と共同で進めながら、定期的に調査報告会を実施し、最終的には調査報告書として完成するための年間計画等を議論した。

学生たちは非常に熱心かつ緻密にインタビュー調査や質問票調査に取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になったと思う。2019 年度に本格的な調査プロジェクト始動に向けた社会調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：B
実 施 日：2018 年 7 月 6 日(金)
実施都市：東京都八王子市
実施場所：株式会社栄鋳造所
実施内容：外国人労働者の積極的受け入れを行っている株式会社栄鋳造所へのフィールドワークを実施した。2 時間弱のインタビュー調査を行い、実りのある調査ができた。
成　　果：八王子市における外国人労働者を受け入れる現場においてどのような課題があり、いかにそれを捉えているか等についての理解が深まり、今後のフィールドワークに大きな成果をもたらした。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 7 月 13 日(金)
実施都市：東京都八王子市
実施場所：八王子福祉作業所
実施内容：障害者支援を行っている八王子福祉作業所へのフィールドワークを実施した。90 分近くのインテンシブなフィールドワークを行い、実りのある調査ができた。
成　　果：八王子市における障害者支援の現場においてどのような課題があり、現場ではそれをいかに解決しようとしているのか等についての理解が深まり、今後のフィールドワークに大きな成果をもたらした。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 8 月 22 日(水)～8 月 24 日(金)
実施都市：大阪府大阪市
実施場所：釜ヶ崎支援機構・他
実施内容：「日本最大ドヤ街」と称される日雇い労働者の街である釜ヶ崎（あいりん地区）をはじめ、不安定な労働や貧困を余儀なくされてきた人びと、また関西で最も大きな被差別部落の一つである住吉区の差別と排除の歴史、そして在日コリアンが集住する生野区での丁寧なフィールドワークを行った。
成　　果：これらのフィールドワークは、当事者や地域の人たちが抱え込まざるをえないリアリティを理解することになり、 FLP の学生たちが当事者のリアリティを知

るきわめて貴重な機会になったと同時に、地域実践の可能性と課題を深く理解する契機になった。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 8 月 22 日(水)
講 演 者：山田　實 氏（NPO 法人釜ヶ崎支援機構）
演　　題：釜ヶ崎の歴史と人々の実践
実施都市：大阪府大阪市
実施施設：NPO 法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）
実施内容：山田實氏（NPO 法人釜ヶ崎支援機構理事長）は、1976 年に結成した釜ヶ崎日雇労働組合の副委員長・委員長を経て、日雇労働にも従事しながら現場闘争や賃金闘争を牽引した人物である。また、1992 年以降の不況期に反失業闘争を仕切りながら、1999 年に NPO 法人釜ヶ崎支援機構の設立に尽力し、翌年より代表を務めてきた。誰よりも釜ヶ崎を理解し、先進的な活動を行ってきた山田氏に当事者の方々のお話をしていただく機会をサポートしていただきながら、講演を行っていただいた。
成　　果：山田氏の講演は FLP の学生たちにとって当事者のリアリティを知るきわめて貴重な機会になったと同時に、地域実践の可能性と課題を深く理解する契機になった。

対象演習：B
実 施 日：2019 年 8 月 22 日(木)
講 演 者：西川　勝 氏（元大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）
演　　題：釜ヶ崎で生きるということ
実施都市：大阪府大阪市
実施施設：NPO 法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）
実施内容：元大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任教授であり、臨床哲学を専門とする西川勝氏による「釜ヶ崎で生きること」と題する講演を行った。西川氏は、自ら釜ヶ崎に深く関わりながら、生活困窮者とともに「哲学カフェ」を開催し、ともに志向してきた人物であり、当事者を研究することの意味について報告していただいた。
成　　果：西川勝氏の講演は FLP の学生たちにとって当事者を研究することの意味を思考する貴重な機会になったと同時に、地域実践の可能性と課題を深く理解する契機になった。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 8 月 23 日(木)
講 演 者：矢野　亮 氏（日本福祉大学福祉経営学部）
演　　題：大阪における差別の歴史のもとでの住吉地区の当事者のリアリティ

実施都市：大阪府大阪市
実施施設：住吉隣保事業推進センター
実施内容：関西で最も大きな被差別部落の一つである住吉地区を長年にわたって研究してきた日本福祉大学教員の矢野亮氏に「大阪における差別の歴史のもとでの住吉地区の当事者のリアリティ」と題する講演をしていただいた。住吉地区に住む人たちがいかなる歴史的・時代的文脈のもとで、いかにして差別や排除に抗ってきたのか、自らが実践を行ってきたのかについて報告していただいた。
成　　果：矢野亮氏の講演は FLP の学生たちにとって当事者を研究することの意味を思考する貴重な機会になったと同時に、地域実践の可能性と課題を深く理解する契機になった。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 12 月 21 日(金)
実施都市：東京都国分寺市
実施場所：国分寺福祉センター
実施内容：「本当に教育が必要な子供たちに教育の機会を」という理念のもと、経済的な理由で有料塾に通えない中高生のための「無料学習塾」を実践する NPO 法人一粒の麦 Ark こども若者サポートセンターへのフィールドワークを実施した。2 時間弱のインテンシブなフィールドワークを行い、実りのある調査ができた。
成　　果：経済的困難を抱える子どもたちのための無料学習塾を開催する現場においてどのような課題があり、それをいかに解決しようとしているのか等についての理解が深まり、今後のフィールドワークに大きな成果をもたらした。

（８）新原　道信（文学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

「3.11 以降」のコミュニティ形成のための「フィールドワーク力」養成

＜授業の概要＞

地域に入っていき、〝社会のオペレーター〟として社会で活躍していく力を身につけるため、2 年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」――生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど――を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3 年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP 国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4 年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・大山団地 や砂川地区の他の諸組織・団体（連合子供会（砂子連）、立川 5 中、9 小、大山小、児童館、児童養護施設など）や、被災地での活動に参加させていただいています。

＜活動内容＞

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4 つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢 70 名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか――〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合って方針を決めてきました。

こうした活動のなかで、山梨県笛吹市でフィールドワークを行い、日本の地域社会を見つめなおしました。夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学びました。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 8 月 22 日(水)～8 月 24 日(金)

実施都市：山梨県笛吹市

実施場所：笛吹市役所・他

実施内容：4 つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成　　果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめました。

対象演習：A・B

実 施 日：2018 年 9 月 5 日(水)～9 月 7 日(金)

実施都市：山梨県笛吹市

実施場所：モンデ酒蔵・他

実施内容：4 つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成　　果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめました。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

「3.11 以降」のコミュニティ形成のための「フィールドワーク力」養成

＜授業の概要＞

地域に入っていき、"社会のオペレーター"として社会で活躍していく力を身につけるため、2 年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」――生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど――を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3 年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP 国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4 年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・大山団地 や砂川地区の他の諸組織・団体（連合子供会（砂子連）、立川 5 中、9 小、大山小、児童館、児童養護施設など）や、被災地での活動に参加させていただいています。

＜活動内容＞

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4 つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢 70 名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか――〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合って方針を決めてきました。

こうした活動のなかで、山梨県笛吹市でフィールドワークを行い、日本の地域社会を見つめなおしました。夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学びました。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 8 月 22 日(水)～8 月 24 日(金)

実施都市：山梨県笛吹市

実施場所：笛吹市役所・他

実施内容：4 つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成　　果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめました。

対象演習：A・B

実 施 日：2018 年 9 月 5 日(水)～9 月 7 日(金)

実施都市：山梨県笛吹市

実施場所：モンデ酒蔵・他

実施内容：4 つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成　　果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめました。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

「3.11 以降」のコミュニティ形成のための「フィールドワーク力」養成

＜授業の概要＞

地域に入っていき、"社会のオペレーター"として社会で活躍していく力を身につけるため、2 年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」――生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど――を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3 年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP 国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4 年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・大山団地 や砂川地区の他の諸組織・団体（連合子供会（砂子連）、立川 5 中、9 小、大山小、児童館、児童養護施設など）や、被災地での活動に参加させていただいています。

＜活動内容＞

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4 つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢 70 名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか――〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合って方針を決めてきました。

こうした活動のなかで、山梨県笛吹市でフィールドワークを行い、日本の地域社会を見つめなおしました。夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学びました。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実 施 日：2018 年 8 月 22 日(水)～8 月 24 日(金)

実施都市：山梨県笛吹市

実施場所：笛吹市役所・他

実施内容：4 つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成　　果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめました。

（9）黒田　絵美子（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

地域文化振興の実践（1）

＜授業の概要＞

プログラム共通で行われるサマースクールの他､フィールドワークとして中心となるのが､9 月にパルテノン多摩で行われる「パル多摩フェス」です。具体的な内容としては、路上を使った野外イベントの企画・実施です。5 年前のフェス立ち上げ時とその前身のイベントの時代から黒田ゼミが関わってきておりますので、4 月の準備段階からパルテノン多摩のスタッフ（多摩市職員、パルテノン多摩事業部職員）との会議、出演者選考、実施に向けての各出演団体との打ち合わせ、企画立案と本番に向けた準備、リハーサル、本番、実施後の反省会と次年度へ向けての調整、といった流れで年間を通してゼミ活動を行います。

この他に、新ゼミ生の興味に応じて別企画に挑戦していただきます。過去の事例では、東大和市の公立中学校での落語会プロデュース、川越市施設での落語会プロデュース、六本木のストライプハウスギャラリーでの能楽教室及び能楽公演サポートなどがあります。

＜活動内容＞

サマースクールにおいて、北海道のそば粉生産量が国内第一位であることに着目し、訪問した別海町でそばの種まきから収穫、製粉、製麺、販売までの全工程を行っている生産者を訪問､別海町そばのブランド化に向けての可能性を模索し､期末報告会でプレゼンを行った。また、9 月のパル多摩フェスでは、中心となって企画実施を行った B 生をサポートする形で地域の子供たちとの触れ合いの二日間を体験した。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

地域文化振興の実践（2）

＜授業の概要＞

フィールドワークとして中心となるのが、9 月にパルテノン多摩で行われる「パル多摩フェス」です。具体的な内容としては、きらめきの池特設舞台や大階段、路上を使った野外イベントの企画・実施です。5 年前のフェス立ち上げ時とその前身のイベントの時代から黒田ゼミが関わってきておりますので、4 月の準備段階からパルテノン多摩のスタッフ（多摩市職員、パルテノン多摩事業部職員）との会議、実施に向けての企画・立案・準備、本番、実施後の反省会と次年度へ向けての調整、といった流れで年間を通してゼミ活動を行います。

＜活動内容＞

9 月に行われたパル多摩フェスのスタンプラリーを担当した。「ぺたぺた絵本ラリー」と銘打って、各ブースを回るごとに物語性を帯びたスタンプ作品が完成するような仕組みを考案し、参加した地域の子供たちや保護者たちに好評を博した。野外フェスにつきものの天候の心配も経験したが、事前の準備が功を奏し、大きな混乱もなく運営出来た。昨年の先輩たちのスタンプラリーのノウハウを踏襲しつつ、今年度独自の発想も加えた企画立案、手作りスタンプや台紙、その他の準備を夏休み返上で行い、主催者であるパルテノン多摩のスタッフたちとの綿密な打ち合わせを重ねて当日を迎えた。その成果を期末報告会でプレゼンした。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

地域文化振興の実践（3）

＜授業の概要＞

「パル多摩フェス」の５年目となりますので、後輩への指導的立場で企画・実践に携わってください。また、プロデューサーや多摩市職員との密接な関係も築けている状況ですので、これを後輩たちにつないでいかれるよう、学外関係者各位とのさらなる共働に努めてください。要するに、「パル多摩フェス」に関しては、4年生は活動の中心となるよりは、監督的立場からA・B生へのアドバイスを行ってください。

皆さんの代の独自のプロジェクトを緻密な実態調査を踏まえて完成させましょう。

＜活動内容＞

パル多摩フェスでは、主体となるB生のサポート役として参加した。ゼミの授業では古典落語の研究を中心に行い、古典芸能が地域振興に果たす役割を検討・分析した。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：C
実 施 日：2018年5月17日(木)
実施都市：東京都新宿区
実施場所：新宿末廣亭
実施内容：都内で唯一、桟敷席の残る末廣亭で寄席を体験。舞台上のみならず、客席の構造や周辺環境の調査も行った。
成　　果：庶民の娯楽の場として寄席が現在もなお活気を失っていないことを見分し、テレビやネットの時代にあってもこのような演者との生の触れ合いが人々にとって重要な文化的体験の場であることを学んだ。

対象演習：C
実 施 日：2018年7月30日(月)
実施都市：東京都台東区
実施場所：浅草演芸ホール
実施内容：新宿とは違い、観光地として古くから発展し、現在はインバウンドの人気スポットともなっている浅草で、演芸ホールの果たす役割を見分した。
成　　果：新宿とはまた違った賑わい方（観光地であることなど）を実体験し、同じ落語でも演ずる場によって観客層の違いや盛り上がり方、受ける演目の違いなどがあることを学んだ。

（１０）小林　勉（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

＜授業の概要＞

Ｊリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

＜活動内容＞

小林ゼミは、北海道根室管内での現地調査をもとに、急増する外国人観光客をターゲットとしたスポーツ・ツーリズム・「根室ランチウェイ」構想の政策提言を行った。また、小林ゼミＢ生を中心としたＪリーグ公式戦のプロデュース活動のサポート活動を展開し、次年度に控える本格的なプロデュース活動の基盤づくりを行った。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 4 月 12 日(木)～4 月 16 日(月)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：イオン秋田中央店
実施内容：9 月開催の小林ゼミプロデュースのＪリーグ公式戦の PR 活動と市民の意識調査
成　　果：数百名という単位の秋田市民を対象に、当該活動の PR 活動と研究課題に関連する意識調査を実施することができた。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 9 月 13 日(木)～9 月 16 日(日)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田・他
実施内容：小林ゼミによるＪリーグ公式戦のプロデュース活動
成　　果：各関係機関と連携しながら、秋田でのＪリーグ公式戦プロデュースを成功裏に終えることができた。一連の活動は、スポーツを通じた社会開発の事例として、また産官学連携の取り組みとしても秋田県内で大きく注目され、秋田県内の各

メディアでも紹介された。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 9 月 15 日(土)
講 演 者：渡部　真吉 氏（株式会社イモーションズ）
演　　題：「フレイル」に対する適切な介入方法とは
実施都市：秋田県秋田市
実施施設：秋田県立体育館
実施内容：「フレイル」に対する適切な介入方法と高齢者の実態について、専門的な立場から助言をいただいた。
成　　果：フレイルという概念を多角的に検討することができ、高齢者を取り巻く実際的な課題について認識を深めることができた。

対象演習：A
実 施 日：2018 年 9 月 15 日(土)
講 演 者：今村　貴幸 氏（常葉大学保育学部）
演　　題：「POMS」の活用方法と高齢期における適切な運動
実施都市：秋田県秋田市
実施施設：秋田県立体育館
実施内容：気分調査である POMS の概要と高齢期における適切な運動処方のあり方について専門的立場から助言をいただいた。
成　　果：「気分」という数値化しにくい対象に対して、調査手法レベルでの実際的な活用手法について、専門的知識を提供していただいた。

ＦＬＰ演習Ｂ

＜テーマ＞

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

＜授業の概要＞

Ｊリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

＜活動内容＞

小林ゼミは、秋田でもＪリーグ公式戦のプロデュース活動へ向け、各ステークホルダーたちと連携しつつ、全国でも珍しい大学研究室によるＪリーグ公式戦のプロデュースを行った。当該活動は単なるイベント企画にとどまらず、Ｊリーグというプラットフォームの活用可能性について多方面から検討する契機ともなり、その一連の活動はＪリーグチェアマンから関心を寄せられるなど、地域貢献活動の一つとして秋田県内外にて認知度を高めつつある。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B
実 施 日：2018 年 4 月 12 日(木)～4 月 16 日(月)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：イオン秋田中央店
実施内容：9 月開催の小林ゼミプロデュースのＪリーグ公式戦の PR 活動と市民の意識調査に関するアンケートの実施。
成　　果：数百名という単位の秋田市民を対象に、当該活動の PR 活動と研究課題に関連する意識調査アンケートを実施することができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 5 月 10 日(木)～5 月 12 日(土)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田・他
実施内容：Ｊリーグ公式戦のプロデュース活動の準備
成　　果：ホームゲームプロデュースへ向け、民間企業及びスポーツ組織など、各ステークホルダーとの連携を深めることができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 5 月 29 日(火)～5 月 31 日(木)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田・他
実施内容：J リーグ公式戦のプロデュース活動の準備
成　　果：ホームゲームプロデュースへ向け、民間企業及びスポーツ組織など、各ステークホルダーとの連携を深めることができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 6 月 9 日(土)～6 月 11 日(月)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田・他
実施内容：J リーグ公式戦のプロデュース活動の準備
成　　果：ホームゲームプロデュースへ向け、民間企業及びスポーツ組織など、各ステークホルダーとの連携を深めることができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 6 月 30 日(土)～7 月 2 日(月)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田
実施内容：J リーグ公式戦のプロデュース活動の準備
成　　果：ホームゲームプロデュースへ向け、民間企業及びスポーツ組織など、各ステークホルダーとの連携を深めることができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 7 月 10 日(火)～7 月 13 日(金)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田・他
実施内容：J リーグ公式戦のプロデュース活動の準備
成　　果：ホームゲームプロデュースへ向け、民間企業及びスポーツ組織など、各ステークホルダーとの連携を深めることができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 8 月 5 日(日)～8 月 10 日(土)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田・他
実施内容：J リーグ公式戦のプロデュース活動の準備
成　　果：ホームゲームプロデュースへ向け、民間企業及びスポーツ組織など、各ステー

クホルダーとの連携を深めることができた。

対象演習：B
実 施 日：2018 年 8 月 26 日(日)～8 月 27 日(月)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：秋田県立体育館
実施内容：J リーグ公式戦のプロデュース活動の準備
成　　果：ホームゲームプロデュースへ向け、民間企業及びスポーツ組織など、各ステークホルダーとの連携を深めることができた。

ＦＬＰ演習Ｃ

＜テーマ＞

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

＜授業の概要＞

Ｊリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

＜活動内容＞

小林ゼミは、秋田でもＪリーグ公式戦のプロデュース活動へ向け、各ステークホルダーたちと連携しつつ、全国でも珍しい大学研究室によるＪリーグ公式戦のプロデュースを行った。当該活動は単なるイベント企画にとどまらず、Ｊリーグというプラットフォームの活用可能性について多方面から検討する契機ともなり、その一連の活動はＪリーグチェアマンから関心を寄せられるなど、地域貢献活動の一つとして秋田県内外にて認知度を高めつつある。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：C
実 施 日：2018 年 9 月 12 日(水)～9 月 16 日(日)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：あきぎんスタジアム・他
実施内容：秋田でのＪリーグ公式戦のホームゲームプロデュースを行った。
成　　果：プロデュースの中心となる B 生に対して、前年度の経験とネットワークを生かし多方面の支援活動を行い、円滑な業務遂行を展開した。一連の成果は秋田県内の各種メディアでも紹介され、スポーツによる地域活性化の可能性について広く情報発信をすることができた。

対象演習：C
実 施 日：2018 年 9 月 13 日(木)～9 月 16 日(日)
実施都市：秋田県秋田市
実施場所：あきぎんスタジアム
実施内容：秋田でのＪリーグ公式戦のホームゲームプロデュースを行った。

成　　果：プロデュースの中心となるB生に対して、前年度の経験とネットワークを生かし多方面の支援活動を行い、円滑な業務遂行を展開した。一連の成果は秋田県内の各種メディアでも紹介され、スポーツによる地域活性化の可能性について広く情報発信をすることができた。

（１１）関　有一（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ

＜テーマ＞

市町村合併

＜授業の概要＞

平成の市町村合併により、市町村の数はほぼ半減となった。合併は大きく進んだわけだが、その背景事情を見るとともに、その推進力となった要素、合併に消極的な要素としてどのようなものがあったか、について検討する。また、市町村合併が進んだとはいえ依然として小規模市町村もかなり存在している。引き続き人口減少が見込まれる状況の中で、今後の自治体のあり方について考える。

＜活動内容＞

2018 年度は、市町村合併を念頭に置きながら、一部事務組合や広域連合などの市町村間の協力関係について理解を深めた。また、平成の大合併については、「平成の大合併研究」（森川洋著）について輪読を行った。

（１２）堤　和通（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ａ・Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

地域における犯罪予防と再犯減少策の調査研究

＜授業の概要＞

現行の制度によるものに加えて、犯罪要因について、地域の自治体や近隣地域、それに、児童福祉、家庭支援、精神衛生、教育など地域を拠点とする各機関が、どのように取り組んでいくことができるのかを考えます。

＜活動内容＞

ゼミは合併開講で開いています。前期はB生に少年法の概説書を担当を決めて報告、検討することをメインにしました。多くの場合、報告前にオフィスアワーで事前の検討をしています。前期はサマースクールの準備にも重要な時期ですが、今年度は授業期間中は多くを自主ゼミで進めてもらい、前期の終わりから夏季休暇の間にオフィスアワーで検討を加え、サマースクールに備えました。後期には、A生の成果報告、B生の少年法報告に加え、C生の卒論準備に注力しました。今年度の卒論テーマは、テロ、親子間暴力でした。関連の法律を踏まえることはもちろんですが、いずれも、法政策の観点を重視し、準備状況の報告を受け、検討しました。

例年、年度内の2月初旬に分野が関連する学会部会での卒業発表会に、A生、C生が発表を行います。今年度も、後期の後半から部会発表を目標に準備を進めました。

（１３）細野　助博（総合政策学部・教授）

ＦＬＰ演習Ｂ・Ｃ

＜テーマ＞

まちづくりの成功事例の定量的検証

＜授業の概要＞

近年の中心市街地の衰退は目を覆うばかりです。どうしてこのようになったのでしょう。郊外に林立するメガモールだけの責任でしょうか？そうではありませんね。闇雲に注ぎ込まれる「補助金」という税金、それを取ってくることで自分の役目は終わったと勘違いし、それに異を唱えると「村八分」という商店街の雰囲気、一歩下がって市民協働を唱えるだけで、調整も規制もできないよという行政の消極的な姿勢、地域の衰退など無関係と孤高を保つことだけに生きがいを見出す大学のプライド。こんなところ知るかとさっさと逃げ出す若者達の意識の低さ、皆でまちを壊しています。少子高齢社会の進むまちの中で、まちの「中心」として市街地が果たすべき役割を自覚していないところが問題なのです。ゼミはこの問題意識を共有し、理論と実践の両面から、まちづくりを調査研究します。

授業内容についてはおおまかに前期と後期に分けられ、前期は主に都市を調査・分析する上で必要となる基礎的な知識の習得を目標とし、Excel や統計、地図ソフトを活用した分析手法の習得や、都市を扱った代表的な論文の輪読などを通じて読解力・分析力を養います。そして後期では、前期で学習した内容を踏まえて実際のまちを〝見る〟（まちナビ）ことに主眼を置き、実地調査等を行いながら多くの事例を学びます。

2009 年度は、群馬県沼田市、宮城県仙台市や東京都福生市を調査対象として取り上げました。データ収集や現地ヒアリング等を通じて問題の実態を知り、グループワークによって分析検討し、具体的な政策提言を含んだ論文とプレゼンテーション資料等を作成しました。

2010 年度は、長野県富士見町との「都市農村交流」をはじめ、「学校跡地活用」に関して八王子のケースをもとに調査研究成果を現地にて発表しました。現地でケーキの材料になるルバーブの採取、ジャムに加工されるほおずきなどの摘み取りも経験し貴重な体験をしました。

2011　年度は、宮崎県小林市とのタイアップで六次産業化が地域振興にどのような効果があるかについて、現地でワークショップやシンポジウムを開催しました。

2012 年度は、横須賀市や立川市とのジョイントで、市政の課題について定量分析を行い、発表する機会を設けました。

2013 年度は、金沢市とのジョイントで「大学ゼミに金沢を研究対象にする」ためのパンフレット作りと、金沢の観光行政への提言書の取りまとめを行いました。

2014 年度は、福生市とのジョイントで外国人向けマップの作成、通行量調査、市報作成などを行いました。

2015 年度は、産学官連携組織のネットワーク多摩の調査事業に学部ゼミと共同で取り組み、立川市でアンケート調査をもとにワークショップ「立川のミライを考える」を実施しました。

2016 年度は、立川市に立地した「ららぽーと立川立飛」に関するアンケート調査とその統計分析を行い、立飛ホールディングスで三井不動産（株）とのワークショップを開催しまし

た。

2017 年度は、立川市に新設された「立飛アリーナ」を巡って、スポーツの多様な側面とアリーナ周辺の地域活性の戦略を構築しました。

2018 年度は、福島県、福島県観光物産交流協会との連携で、福島県の観光計画「HOPE TOURISM」のフィージビリティ調査と実地研修を行い、「HOPE TOURISM」の本格始動への戦略的指針構築にあたった。

＜活動内容＞

細野ゼミは、「まちづくり」戦略の構築とそのための実地調査、統計分析を主として行なっています。その対象地域は日本全国です。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対 象 演 習：B・C

実 施 日：2018 年 9 月 12 日(水)～9 月 14 日(金)

実 施 都 市：福島県浪江町

実 施 場 所：一般社団法人まちづくりなみえのある福島県浪江町・飯坂温泉・会津若松・喜多方・大内宿など、HOPE TOURISM ベンチマークモデル候補地

実施内容/成果：福島県が企画する学生を対象にした HOPE TOURISM のベンチマークモデルの具体的実践を行った。現地関係者とのワークショップのために事前の観光に関して、RESAS などのデータや学内アンケートの統計分析を用いながら『中間報告書』を作成した。この報告書を持って、現地との討論に臨んだ。福島県へのインバウンドおよび学生の観光客数増加のための戦略構築を目指し、それを報告書『福島県 HOPE TOUR 報告書』の形でまとめ、福島県ならびに国・県市町村の関係部署に配布した。

中央大学全学連携教育機構

本報告書に関してお気づきの点等ございましたら、全学連携教育機構事務室（多摩キャンパス 5 号館ペデ下ー学生部学生相談室上）までお問い合わせください。

＜問い合わせ先＞
全学連携教育機構事務室
TEL:042-674-3663
E-mail:flp@tamajs.chuo-u.ac.jp